
流星のロックマンメテオGを止めてからのその後の日々

ソウイチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマンメテオGを止めてからのその後の日々

【Nコード】

N0728H

【作者名】

ソウイチ

【あらすじ】

星河スバルがメテオGの事件を止めてから一年後の物語りです。

説明とご挨拶

メテオG事件から一年たった後の星川スバルの日常を物語りです。
皆さん私は新米でつまらないかもしれないかもしれなかせんがどうかよろしく
お願いします。

説明とご挨拶（後書き）

ソウイチと言います。本格的に明日からガンガン投稿しますのでよろしくお願いします。

騒がしい朝

小鳥が鳴いているある静かな朝、一体の電波体が大声を上げて1人の人間を起こしていた。

「おい！いつまで寝てるんだ？さっさと起きろ！」

「う、うーん。ミソラちゃん、このお弁当すごく美味しいよ。」

今起こしているのはA M星生まれのF M星育ちで現在1人の少年のウィザードであるウォーロックこと通称ロックである。

「ったく、なにが、ミソラちゃん、お弁当美味しいだ！？寝言なんか言ってるねーで、さっさと起きろってんだ！ったく。」

ロックは呆れながら1人の少年を見つつ起こしていた。

「うーん。は！ロックおはよう。今時間わつと…わ、わあ！やばい遅刻するー！」

「まったく、早くしねーからだ！」（それにしても、スバルのやつ、何の夢を見てたか知らねーが、ミソラの奴に気があるみてーだな。ククツ！後でからかってみるか！）

そう、今ロックが起こした少年は地球を3度も救ったヒーロー、星河スバルである。

「おはよう！スバルにロック君。早くしないと委員長さん達が来ちゃうわよ。」

スバルの母親の星河あかねはいいながら、密かに、ロックを台所に呼ぶ。ちなみにスバルの父親の星河大悟はすでにN A W Aに出勤している。

「ロック君、お願いがあるんだけど、今日、伝えなくちゃいけないことがあるから、学校が終わったらロックマンになって帰ってきてほしいの。最近スバル、同じ学年の女の子達から放課後待ち伏せされて告白されたり、ファンレターを渡されたりして、帰る時間がいつも遅いみたいなのよ。お願い！ロック君！」

あかねはロックに両手で拝むようにしてお願いをした。

「そんなことか！お安い御用だぜ！でも、伝えなくちゃいけないことってなんなんだ？」

「うふふふ、それは後で教えるわ！」

そう質問してくるロックに対して、あかねは少し笑いながら答えた。

（それにしてもスバルの奴急にもてだしたな。）

それもそのはず、メテオG の事件を阻止して2週間後、星川大悟が地球に帰還した次の日に、記者団達に今までのことをすべて話し、またスバルがロックマンになって地球を救ったことを話したからである。

当然記者団達はスバルにもインタビューをしようとしたが、サテラポリス遊撃隊の隊長の暁シドウにより止められてしまい、記者団達は渋々諦めざるを得なくなった。それに関しては助かったスバルだが、その次の日から学校中の人気者になってしまい、特に同じ学年の女子生徒達からもてるようになった。

スバルが朝食を食べ終わると同時にインターホンが鳴った。

わわわ、委員長達が来ちゃったよー。行ってきまーす！」

慌ててカバンを背負って出ていった。それを見ていたあかねはいつ

てらっしやいと声を掛けて洗濯物を干しにいった。
玄関をでるとお馴染みの4人組がいた。

「おはよう！スバル君！今日から6年生なんだから、気を引き締め
ていくわよ！」

「オッス！スバル！ちゃんと飯は食ってきたか？」

「おはようございます。スバル君！それと、ゴンタ君君じゃないん
ですから……。」

おはようスバル！おいゴンタ！お前はいつも飯のことばかりだな？」

最初に挨拶してきたのは生徒会会長兼クラスの委員長の白金ルナで
ある。

彼女のウィザードはモード。

次に挨拶してきたのは体が大きく牛丼大好きな力自慢の牛島ゴンタ
である。

彼のウィザードはFM星人のオックス。

ゴンタとオックスが電波変換すると、オックス・ファイアになる。

次に挨拶してきたのは背は皆より低いが、豊富な知識を持っている
最小院キザマロである。

彼はマロ辞典というものを持っている。

ウィザードはペディア。

最後に挨拶してきたのはジャックだ。

彼はもとディーラーのメンバーであったが、ロックマンに止められ、
姉のクインティアと共にサテラポリスに自首したが、暁が姉弟の保

護者になったため今では普通にみんなと学校に通っている。

ちなみに姉のクインティアは、来年スバル達が学校の教師として、努めている。ジャックのウィザードは一度はブライによりデリートしてしまったFM星人のコーヴァスだが、天才科学者ヨイリー博士のおかげで再構築され、再びジャックのウィザードに戻る事ができた。

ジャックとコーヴァスが電波変換すると、ジャック・コーヴァスになることができる。

「みんな！おはよう。」

そしてスバル達は学校に向かって歩いていった。

騒がしい朝（後書き）

すいません。だいぶ投稿するのを遅れてしまいました。申し訳ありません。次からなるべく早く投稿いたします。

ツカサ登場！

学校に着いたスバル達はそれぞれの席に鞆を置きルナの席に集まり雑談をしていた。

「そうそう、今日転校生が来るみたいよ！」
いきなりルナが、話しを切り出した。

「え？誰だろ？」

「男性の方ですか？それとも女性の方ですか？」

「どっちにしても仲良くすればいいじゃん！」

「出来たら可愛い女の子がいいぜー。」

上から順にスバル、キザマロ、ジャック、ゴンタが言った。

ルナは両手でお手上げと言わんばかりに、

「それが男の子が来るとしかわかんないのよ。ま、後でどんな子がわかるから後のお楽しみね！」

そういった直後チャイムが鳴りスバル達の担任育田道徳が入ってきた。そして挨拶をして出席をとってから話を切り出した。

「さて、いまから始業式の為、体育館に移動する前に今日転校してきた仲間を紹介する！と言ってもみんなが知っている人物だな。さあ入ってきなさい！」

育田先生にいわれて入ってきた人物にクラスの皆がビックリして同時に声を揃えて言った。

「……………つ、ツカサ君！？」「……………」

そう、その人物は緑色の髪の毛をしていて、どこか中性的な雰囲気を持っていて少年、その少年の名は双葉ツカサである。ツカサは教室に入って教卓の真ん中でこう告げた。

「みんな、久しぶり！また今日からよろしくお願いします。」
と頭を下げて言った。

もちろん、みんなの反応は

「「「「「お帰りなさい。ツカサ君こちらこそよろしく。」」」」」

と言つてツカサのもとに行こうとしたが、育田先生が皆に席につくように言い、ツカサはジャックの隣に座りツカサがジャックに、
「僕は双葉ツカサよろしくね。」

と言つツカサに対しジャックも
「俺はジャックだ、こちらこそよろしくな！」

と言いお互い握手をして育田先生の話しに耳を傾けた。

「いまから体育館に向かう。そこで始業式の前に一年生との対面式がある。白金、今回は生徒会の会長としてでなく、6年生の代表としてやつてもらつことになると思う。多少緊張するかもしれんが頼んだぞ！」

それに答えるようにルナは

「任せてください！失敗のないように見事努めてみせますわ！」

それを聞いた育田先生は安心して皆と一緒に体育館に向かった。そ

して無事に始業式や、対面式は終わった。そして午前中の授業は終わり、昼休みいつものメンバー＋ツカサの6人で昼食をとりながら話しをしていた。

「そういえばツカサ君？ヒカルとはどうなったの？」とスバルが言い、その事情を知っていた、ルナ、キザマロ、ゴンタが聞こうと耳を傾けた。だがただ1人事情を知らないジャックは、

「一体なんのことが説明してくれよ？」

そういわれ、スバル達は、ジャックに説明しツカサの話しを聞こうと耳を傾けた。

「実はスバル君に止められて、一カ月後に皆の前からいなくなっただでしょ？それからナンスカ村に行ってヒカルを封印する旅に出たんだ。」

それを聞いたゴンタはあの時いった村か、と思います。

以前ゴンタは記憶喪失になったとき、ナンスカ村の村長にゴンターガとして操られたことがある。

ゴンタはスバル達のおかげで記憶を取り戻したが車で空港に逃げている途中ナンスカ村の村長はムーの電波体コンドルと電波変換してコンドル・ジオグラフとなりゴンタ達を捕まえて生け贄にする寸前ロックマンによって阻止されたのである。

「本当あの時はどうなるかと思っただぜ。なあキザマロ？」

「ええ！本当一時はどうなることかと思いましたよ。」

「本当に、あの時はスバル君のおかげで助かったわ。」と3人にいうのに対し、ツカサとジャックが、

「「どづいづこと(だ)?」」

と疑問を口にする。それをスバル達が2人に説明し納得したところで、ツカサが何かを思い出したかのように口に出す。

「あの時、ナンスカ村に行ったときにあったあの銅像は、ゴンタ君をイメージして作ったものなんだ」。道理でゴンタ君に似ていると思っただよ。」

それを聞いた、ゴンタは顔を赤くしながら、

「あ、あの、村長さん、そんなものを作ったんだ!?はずかしいな」。…。」

顔を赤くしているゴンタをみたツカサ微笑みながら話しを戻した。

「そうそうそれで僕がナンスカ村に行つてからは
ここから皆は真剣にツカサの話しを聞くのであった。」

ツカサ登場！（後書き）

次回はツカサ編です。#

ナンスカ村での出来事（前書き）

いままでより若干長いです。

ナンスカ村での出来事

1人の少年がある目的の為にナンスカ村にいた。

その目的とはもう1人の自分自身を完全に封印するためだった。

彼にはある秘密があった。それは多重人格者だったことだ。

彼は赤ん坊の頃ドリームアイランドのゴミ集積場にゴミ当然のごとく捨てられていた。

そこで一体の分別ロボにより見つけれられ、その後、近くの施設に引き取られそこで育てられた。

その時、彼は自分を捨てた親を見つけ復讐することを誓った。

その時、以上なまでに親を恨んでいたせいか、彼の中にもう1人の人格が出てきた。5年生の時、彼の前に一体の電波体が現れた。その電波体はFM星から来たジュミニと名乗り地球を抹殺しようとして誘ってきた。

彼は地球を抹殺することで復讐が果たせらるならとその誘いに乗り、悪事の限りをつくさんとするが、ある時自分の運命を変えた1人の少年と出会う。

最初はなんとも思わなかったが、何度か会って話しているうちに、いつのまにやら親に対する復讐心は消え、その少年とブラザーバンドを結ぼうと思うようになった。

それを快く思っていなかった彼のもう1人の人格者はブラザーバンドを結ぼうとしている彼を利用してこの少年を抹殺しようとするが失敗に終わり一時的に封印されてしまう。彼は自分のもう1人の人格者がやったこととはいえ罪の意識を感じた。それに、いつまた、もう1人の人格者が復活してまた同じ過ちを犯すかもしれない思いその少年の前からいなくなった。

そして今、少年はナンスカ村に来ていた。

「ここがナンスカ村か。結構いい村だな。」

今、この村に来ているのは双葉ツカサである。

ツカサはもう1人の自分であるヒカルを完全に封印するために来ていた。

ツカサはこの村はいい村だなと思いながらヒカルをどうやって封印しようか考えていた。突然後ろから声をかけてきた人物がいた。

「ようこそ！ナンスカ村へ、私がこの村の村長です。ゆっくり観光を楽しんでください。」

ツカサは急に後ろから声をかけられてビックリしたが、すぐに自分も挨拶をした。

「僕は双葉ツカサと言います。こちらこそよろしくお願いします！」

そして、お互い握手したあと、ツカサは村長に村を案内してもらった。中でも一番見てビックリしたのはこの村の守り神と崇められているゴンターガという銅像であった。

思わずツカサは村長に銅像のことを聞いてみた。

「ああ！これはなある日のこといきなり空から人が降ってきたのじや、なんとその方が我らの守り神ゴンターガ様だったのだ。だが、

ある時、私はゴントーガ様を使い世界中を我らナンスカ族のものにしようと考え始めたのだ。だがそれを知ったゴントーガ様の家来が迎えに着たのだ。私はゴントーガ様をなんとかこの村にいてもらおうと色々と手を尽くしたのだが、家来のなかに青い姿をした少年がおってゴントーガ様を連れていきおった。私は途方にくれた…。そんなとき変な格好をした男が私に力をくれたのだ。私は思った。あのゴントーガ様とその家来を生け贄にして、この私、自らナンスカの王として君臨していけばいいと、だがそれも青い少年に止められてしまい、今度こそこのナンスカ村もおしまいだと思った。そんなときゴントーガ様がこの村を観光地にしたらよいとおっしゃってくれた。そのあと、自分のいた時代に帰られた。それで我々村の者は感謝の意味を込めてゴントーガ様の銅像を作ったのだ。」

村長の話聞きツカサは思った。

（多分、青い少年は、スバル君で、ゴントーガというのはゴンタ君だね。家来と言つのは委員長とキザマロ君のことだね。多分、また何かに巻き込まれたんだろうな。今度会ったとき聞いてみようつと。）

それから色々と案内してもらい、大分案内してもらったところで、ツカサは村長にあることを聞いた。

「色々と案内してもらいありがとうございます。ところで、この辺で修行ができるでしょうか？」

ツカサがそう聞くと、村長は少し考える素振りをして、口を開いた。

「この奥に遺蹟がある。あそこなら修行にピッタリじゃろ！」

それを聞いたツカサは村長に礼を言い1人遺蹟の奥へと入っていった。

そしてツカサは深呼吸をして自分の心の中に問い掛けた。

(いるんだよね？ヒカル！隠れてないで返事したらどうかな？)

そう心の中に問い掛けると口調の激しい声が聞こえてきた。

(ち！ばれてたか！？いつ気付いた！)

そうヒカルは言うつとツカサはこう言い返した。(心の中に)

(そんなの決まっているじゃないか！もう1人の僕でもあるんだからね。)

(確かにな。さて、雑談はそれぐらいにしてそろそろ本題に入ろうか？)

そういうと、ツカサは真剣な顔になって話し(心の中に)始めた

（ヒカル！まだ親に復讐しようと思ってるの？もし思ってるのならもうやめない？できたらヒカルを封印したくないんだ…。）

その言葉を聞いてヒカルは鼻で笑っていった。

（ははっ！笑わせるなよ！俺を封印するだど！？だいたいお前が親に対する恨みを強くもっていたから、俺が生まれたんだだろうが！それをやめろだど？今さらやめられる分けないだろう！）

（ヒカルの言葉は当たっているけど、僕は気付いたんだ！憎しみから何も生まれないって、それを気付かせてくれたのはスバル君なんだ！今度は僕がヒカルを説得する番なんだ！）

ツカサはヒカルを封印する考えからいつのまにか説得しようとしていた。

（ふん！確かに憎しみからは何も生まれないだろう。だがな俺はどうしたらいいんだ？お前の憎しみから生まれた俺は？）

そのヒカルの言葉にツカサは何も言えなくなった。ふとヒカルはツカサにある提案をした。

（そうだツカサ！俺とお前で電波変換してお互いの思いをぶつけ合っつて戦うのはどうだ！それでお前が勝ったらおとなしく言うことを聞く。どうだ？）

ツカサは驚いた電波変換してヒカルと戦うということに。

(でもどうやって電波変換するの?)

そう疑問をぶつけてきたツカサに対してヒカルは余裕の表情でいった。

(安心しろ！ロックマンに倒されたときの悔しさのせいか、俺の体内に電波残留があるみたいだ。電波変換するときはハンターV.Gを空に掲げて電波変換双葉ツカサ、オン、エア！て言ったらできるぜ。さあ、どうする?)

そうヒカルは言うつと決意したようにツカサはいった。

(わかった！それでヒカルを止められるなら僕はヒカルと戦うよ！いくよ！ヒカル！)

そして、ツカサは深呼吸を二度するとハンターV.Gを掲げて言った。
「電波変換双葉ツカサ、オン、エア！」

するとツカサ光に一瞬にして飲み込まれ気付いたときはジュミニニ・

スパークWになっていた。
その前方ではジュミニ・スパークBがエレキソードを構えてこちらを見ていた。

ジュミニ・スパークWがBに向かって言った。

「本当にこれに勝つたら、もう誰も襲わないんだよね？」

それに対してジュミニBは短く答えた。

「約束は守る！」

それといい終わったと同時に助走をつけ、一気にジュミニWに迫った。とつさのことでジュミニWは左腕をエレキソードに変えてジュミニBと激しく打ち合った。

ジュミニWが勢いをつけジュミニBに向かおうとしたとき、どこからか悲鳴が聞こえてきた。ジュミニBとWは動きを止めて悲鳴の聞こえた方を見た。なんとナンスカ村から小さな女の子が電波体のイエティ2体と上空からコンドルが一体が今まさに女の子を襲わんとしていた。ジュミニWはジュミニBとの戦いをやめ、真っ先に女の子を助けにいった。まず、上空にいるコンドルにエレキソードを食らわせデリートして、2体のイエティに右手のロケットナックルを連続で当てデリートした。

そして、女の子に近づき、

「もう大丈夫だよ！ いったい何があったの？」

とジュミニWは聞いたが女の子は返事をする代わりに人差し指を空に向けた。

それにつられるようにジュミニWは上を見上げ驚いた。

なんと空の上に大きな建物があり、そこからいろんな電波体が降りてきていたのだ。

ふと気付いたら女の子が目には涙をしながら村の方を差した。

それを見てジュミニWは理解して女の子に頭を乗せてやさしく言った。

「安心して、村のみんなは必ず助けるから、ここに隠れて待っててね。」

そういうと、女の子はニコツとしてうなずいてジュミニWから離れていった。

そしてジュミニWは町へと向かっていった。

すでに町ではいろんな電波体が暴れていた。ジュミニWは次々と電波体を倒していくが、そのたびにやられては復活して、やられては復活しての繰り返しになりながらも弱音を吐かずに戦っていった。だが圧倒的な数に疲れが見えはじめ動きは鈍くなっていった。

その一瞬の隙をつかれコンドルの爪が後ろから迫っていた。

気付いたときはコンドルの爪は目の前まで来ており避ける事ができず、覚悟決めて一瞬目を瞑ってしまった。だがいつまでたっても衝撃がこないのを目をそっとあけて見たら、そこにはジュミニBがい

た。

「どこにいったかと思えばこんなところで楽しみやがって、俺も入れてもらっぜ！」

いきなりジユミニBの出現に驚きながらも肩で息をしながらも答える。

「あ、ありがとう。ヒカル」

「礼はいらないぜ、それに俺たちは2人で一つだろう！そもそも1人でやるなんて間違っているぜ！」

そういつた瞬間ジユミニBは大量の電波体に向かっていった。

それを見たジユミニWは自分も頑張ろうと思い、ジユミニBの後に向かっていった。

だがいくら、ただの電波体とはいえ、さすがに疲れてきて徐々に追い詰められていった。周りを取り囲んだ電波体が一気にジユミニ・スパークに襲おうとしたとき、周りにいた電波体が次々とデリートされていった。何が起こったかわからず上を見上げると上空にあった建物が崩れていったのである。それを最後まで見届けて電波変換を解きツカサはヒカルに問い掛けた。

(ヒカルさつきは助けてくれてありがとう。おかげでたすかったよ。闘いは明日でいいよね？僕は今日疲れちゃったからさ。ごめんねヒカル！勝手なことって)

そうツカサはヒカルに（心の中に）言った。
だが、ヒカルからは返事がない。
不思議に思ったツカサは、心の中に問い掛けてみた。

（ヒカル聞こえてるなら返事をしてよー！どうしたのヒカル？まさか！？）

ツカサは思った。僕を助けたことで、ヒカルの中から憎しみが消えたことによりヒカル自信も消えてしまったのかと、そう思うとツカサは目から涙を流していた。

（そんな！ヒ、ヒカルが消えたなんてう、嘘だ…信じたくない。）

そうして、地面にひれ伏して泣いていると近くで声が聞こえた。

「泣くのは勝手だが人を殺すのは勘弁してくれよ。」

そういって顔を上げて見てみるとそこにいたのはFM星のジュミニがいた。
ツカサは驚いてジュミニに聞いた。

「君は、確か、ロックマンに倒されたはずじゃ？」

すると、ジュミニは顔を笑いながら言った。

「おいおい、もう俺の声を忘れたのか？」

ツカサはその声を聞き恐る恐る聞いてみた。

「も、もしかして、ヒカル？」

そういうと、ジュミニはこう答えた。

「ああ、そうだ。どうやら俺のなかにあった憎しみが、きれいさっぱりなくなっただみたいだ！ただなぜかは知らんがこんな格好になっ
てしまったんだ。」

ツカサは驚きながらも聞き返した。

「じゃあ、もう人を襲ったりしないの？」

その質問にジュミニはこう答えた。

「ああ！約束する！ただし俺が満足するまで暫くここに滞在して戦つてもらつから覚悟しとけよ！」

そついつジユミニ対してツカサは微笑みながらこたえた。

「うん。いいよ！その代わり、これからは僕の相棒としてよろしくね。」

その言葉に対してジユミニは上等だぜといった。

「ということなんだ。」

ここは場所が変わつて教室、いままでのことをツカサはスバルとルナとゴンタとキザマロとジャックの5人に話していた。

その話を聞いていたルナはゴンタに微笑みながら（目は笑っていない）いった。

「ふん。私はゴンターガ様の家来ね。ゴンタ！放課後になったらじっくりと聞こうかしら？」

そんな委員長を見てツカサ以外のメンバーは心の中で恐怖した。

スバルは、逃げるかのようにトイレにいこうとしたら教室を出た瞬間、今年入った一年生の女子に握手やサインを求められて、どっと疲れがでたのはいうまでもない。
ツカサはそんな光景を見て思った。

（帰ってきてよかった。）

ナンスカ村での出来事（後書き）

ミソラ出番はもう少し先です。すいません。

放課後

リンゴーンカーンコーン

チャイムが鳴り、授業がすべて終わった後、育田先生が話した。

「え、皆に連絡したいことがある！実は、今日双葉ともう1人転校生が来ることになっていたんだが、その子は都合により明日この学校に来ることになった。皆仲良くしてやってくれ！白金、号令を頼む！」

育田先生が連絡事項を言ってルナに挨拶を促した。

「起立！礼！」

そして放課後、スバルはツカサのところに行った。

「ねえ、ツカサ君！今度こそブラザーバンドを結ばない？」

その質問に対してツカサは笑顔で答えた。

「あ、ありがとう。じゃあブラザーバンドを結ぼう！」

そうやって2人はお互い結んだ。

「そう言えば委員長達はツカサ君とブラザーバンドを結ばないの？」

スバルはルナ達に聞いたらルナが両手を腰に当てて少し睨んだ顔で答えた。「昼休みにあなたが1年生の女の子にもてる間にあなた以外、このクラスは皆終えたわよ。」

そういうルナに対してスバルは苦笑いしながら答えた。

「そ、そうなんだ。アハハハ。」

そう言うスバルに対してルナはため息をしつついつものメンバーに言った。

「さて帰るわよ。ツカサ君も、一緒に帰りましょう?」

そう言うルナに対してツカサはうんと頷き皆で帰ろうとしたその時、ロックがウィザードオンしてスバルたちには言った。

「悪いが、今日はスバルと俺様は電波変換して帰らせてもらっぜ！」
それを聞いたルナはロツクに喧嘩腰になって言った。

「あなたは別にいいわよ！なんでスバル君が、ロツクマン様になつて帰らないといけないのよ？」

ルナの言葉に一々腹が立つ女だなと思いつつ理由を話した。

「今日お袋がどうしてもスバルに言いたいことがあるんだとよ。」

それを聞いたルナは、両手に腰をあてさらに言った。

「だったら、私達と帰っても問題はないんじゃないか？」

その質問にキザマロとゴンタが答えた。

「委員長、僕たちと帰っても問題はないと思いますが、校門の外で待っている女子達にスバル君が囲まれる可能性が高いからだと思います。」

「それにそれを見ていつも委員長はスバルを助けなくて、スバル君はもててることだし、放っておきましょう。と言って見捨ててるじゃないかよ！」

そう言われた委員長が顔を少し赤くなりながら2人に向かって答えた。

「わ、わかったわよ！スバル君、今回はロックマン様になって帰ることを許してあげる！それじゃあ皆、帰りましょう！」

そう言われて、スバルは少しぎこちなく答える。

「う、うん。ありがとう委員長！じゃ、じゃあ僕は先に帰るね！それじゃあ皆また明日！」

「ちよっ、ちよっと待ちなさい！これだけは言っとくわよ！明日も遅刻しないように！」

スバルはルナにそう言われると、わかった！と言って屋上へと向かった。

【屋上】

スバルはハンターV.Gを掲げていつもの決めゼリフを言った。

「トランスコード・シューティング・スターロックマン」

次の瞬間スバルの体は青い光に包まれてそこには地球を三度も救ったヒーロー、ロックマンになった。

「おい！スバル校門の外をしてみるよ。」

突然ロックがスバルに校門の外を見るように言った。スバルはウェーブロードの上から校門の外を見ると、そこには女子が数人ほど待ち伏せをしていた。スバルはため息をつきながら、また家へとむかいながらロックに先程のことを聞いてみた。

「そついえば僕に何を伝えたいんだろう？ねえロック？母さんから何か聞いてない？」

というスバルの質問に対してロックは興味なさそうに答えた。

「さあな？帰ったらお袋に聞いてみな！」

そつ言うロックに対してスバルはそれもそうかと思いきや家に向かって帰っていった。

伝えたいこと(前書き)

一気に二話投稿してみました。

伝えたいこと

家の前に着いたスバルはウェーブアウトして家のなかに入った。

「ただいまー。」

「お帰りなさいスバル。荷物を置いたらリビングに来てちょうだい！」

あかねはスバルが帰ってきたのを見て声を掛けた。

スバルは自分の部屋にいき、鞆を置いてあかねのところに向かった。

あかねはスバルが来るのを見て、スバルに話を切り出した。

「あのね、スバル。明日から暫くこの家に居候する子が来るのよ！それで暫くスバルの部屋に置かしてもらえないかしら？」

それを聞いたスバルは少し考えて答えた。

「うん。別にいいけど。一体誰なの？」

スバルの質問にあかねは顔をニヤニヤさせながら答えた。

「それは本人に会ってからの楽しみよ！」

そういうと、あかねは台所にいき夕飯の支度を始めた。

スバルは頭の中で誰が来るのか考えたが、明日になったらわかるならと気持ち切り替えて自分の部屋に行き宿題を始めた。その頃台所では誰が来るのか気になったロックがあかねに聞いていた。

「頼む！お袋、スバルには言わないから教えてくれ！」

そういうロックに対して、あかねは一つお願いをした。

「教えてあげてもいいけど、絶対スバルには内緒よ？あと悪いけど、明日もロックマンになって帰ってきてくれるかしら？」

「それぐらいお安い御用だぜ！だから教えてくれ頼む！」

ロックが土下座までして頼みこむのをみたあかねは約束を守ってくれるならと、ロックにある人物の名前を言った。

それを聞いたロツクはビツクリしてこころ思った。

（ほつあの女が来るのか！こりゃ明日が楽しみだぜ！）

伝えたいこと（後書き）

今回はウォーロックの視点で書いてみようと思っています。題してウォーロックの1日です。

ウォーロックの夜（前書き）

すいません。予告ではウォーロックの1日にしようと思ったのですが、なかなかいい案が浮かばず、急遽ウォーロックの夜にしてみました。ごめんなさい。

ウォーロックの夜

ウォーロック
俺は今、ウェーブロードの上でウイルスがないか探しているところだ。

本当ならスバルと電波変換してウィルス^{ミュージック・ミュージック}を倒してスカーツとしたいのだが、あいつは今、M・Mという歌番組^{ミュージック・ミュージック}を見ている普段は見ないあいつだが、今日はあの女が出るので、夕飯を速攻で食べ急いで風呂に入ったぐらいだ。

俺はそれでも、スバルに言った。

「おい！スバル！明日も電波変換していいから、今からウィルスを探してスカーツとしいこうぜ！」

そういつたが、スバルはテレビから視線を外さずに言った。

「やだ！行きたいなら1人で行けばいいじゃないか？僕がこれをどれだけ楽しみにしてたことか？」

そういうスバルに対して俺は言い続けた。
だがこの一言でスバルを怒らせてしまう。

「なあスバル。そんなものDVDデッキで予約して帰って来たら見ればいいじゃねえか？」

すると、スバルは立ち上がってこっちを向いた。
俺はてつきりその案にのると思ったが、いきなり口元を震わせながら行ってきた。

「こんなもの？こんなもので悪かったね。ロックは時代劇と刑事物しか興味ないもんね？さつきも言ったけど、これをどれほど楽しみにしてたことかわかるわけないもんね？行きたいならロック1人で行ってこい！」

と家中に響くぐらいの声でいったあと、スバルはソファーに座ってテレビの方を向いた。

俺は尚も言おうと思ひ声を掛けた。

「おい！スバル！てめえ明日も…。」

と言ってる途中スバルからどす黒いオーラを放ちながらスバルは視線をテレビから放さず優しい口調で聞いてきた。

「なにか言った？ロック君？」

「いや、なんでもありません。」

そついうスバルに対して俺は全身から恐怖を感じてしまいスバルに一言、言つて外に出てウイルスを探しながらビーストイングの素振りをしていた。

(そつ言えば、今日学校に行つて久々にジュミニの奴とオックスと三人「三体」で話をしていたが、まさか、ジュミニの奴がツカサの

もう1人の人格者のヒカルと融合して生まれ変わったとはこいつはビックリしたぜ！

それにしても、こんなに探してもウィルスが一匹もないんじゃないか帰るしかねえな。そろそろスバルの奴がテレビを見終わる頃だろうしな！)

だが家に帰ってビックリした。

それはスバルがすでに布団に入り夢の中へと行ってしまった。

(こいつ！今日は絶対テレビ見た後、俺のこと忘れて寝やがったな？

まあいいや、明日になったら、面白そうな事が起こるしな！クク

ツ！楽しみだぜ！

さて俺も寝るとするか？)

そう思いロックもスリープモードに入った。

ウォーロックの夜（後書き）

今回はウォーロックが1人で電波ウイルスを探しているとき、スバルはテレビを見た後何をしてたかを書こうと思っっています。今度は必ず予告どつりにやります。

ミソラ登場！〔前編〕（前書き）

遂にミソラが登場します！あと今回はスバル視点で書かせていただきます。

ミソラ登場！（前編）

PM21:00、僕はM・Mを見た後、自分の部屋に行き寝巻きに着替えて就寝準備に入った。その時、ロックにいないことに気が付いた。

「あれ？ロック、一体どこに行ったんだろう？まあいいか！直に戻ってきて勝手に寝るだろうし。」

僕はそう思い部屋の電気を消そうと思ったとき、ハンターから電話がなった。

（誰だろう？こんな夜に？）
と思い電話に出た。

「ヤッホー！スバル君！久しぶりー！よる遅くにごめんね。」

なんとそこには、超国民的人気アイドルでありスバルの最初のブラザーの響ミソラが最高の笑顔で僕に話し掛けてきた。

僕は一瞬脳が停止したが、すぐにはっとなって、僕も返事を返した。

「久しぶりー！ミソラちゃん！さっきM・Mに出てたのに大丈夫？

疲れてない？」

真っ先に、僕はミソラちゃんの体調を気にした。

「う、うん。大丈夫だよ！さっきやってたM・M見ててくれてたんだー！ありがとう。」

ミソラちゃんは少し顔を赤くしながら、お礼を言ってきた。

「見るのは当然だよ。僕もミソラちゃんのファンだし、それに一番のブラザーだしね！」

僕も少し顔を赤くして答えた。

その後、僕達は一时间近くそれぞれのことを話したりしていた。

「そう言えば、明日転校生が来るんだー。誰が来るのか今から楽しみだよ。」

僕が明日の転校生の話をしだすと、ミソラちゃんが急に嬉しそうな顔をしました。

「へーそうなんだー。誰だなんだろうね？」

「ミソラちゃん？急に笑顔になってるけど、誰が来るか知ってるの？」

その質問に対して、ミソラちゃんは悪戯っぽい顔で言ってきた。

「さあ〜！誰だろうね〜？知ってても教えてあげない？」

「え〜、そんな〜。あ、もしかして？」

僕がわかったと思ったのか、ミソラちゃんが目をキラキラと輝かして聞いてくる。

「もしかして？」

僕は深呼吸を二度してから答える。

「もしかして？ミソラちゃんが今いる学校の友達でしょ!？」

僕は思った事を言ってみた。ミソラちゃんは何かがツカリしてるよな気がする。僕は思わず聞いてみた。

「違ってたかな？」

「当たらずとも遠からずだね！明日になったらわかると思うから、答えは明日のお楽しみってことだね。」

と笑顔で言ってきたので、僕はそれ以上聞かないことにした。そこえミソラちゃんのウィザードでFM星人であるハーブが2人の間に入って言った。

「お二人さん。楽しく話してるところ、悪いんだけど、そろそろ23:00よ！寝たほうがよくてよ？」

そついわれ僕達はそれぞれ寝るため電話を切ろうとした。

「じゃあまたね！ミソラちゃん。お休み。」

「うん。お休みスバル君。また明日！」

「また明日？」

僕は思わず聞き返した。

「あ、ううん。なんでもないよ。お休み！」

ミソラちゃんが慌てて言うと、電話を切った。

僕はそのあと、布団に入り夢の世界へ入っていった。

ミソラ登場！〔前編〕（後書き）

次は中編です。ミソラ視点で行きます。

ミソラ登場！〔中編〕

AM7:30目覚ましが鳴って一度は止めたけど、また寝てしまった私は^{ミソラ}ハープによって起こされた。

「まったくもう！これじゃあ目覚まし掛けた意味がないじゃないの！」

私はハープに起こされて早々文句を言われた。

朝からそんなことを言わなくてもいいのになと思ってしまう。

私は起きて、顔を洗い、朝食を作って食べた。

今日の朝食は目玉焼きとトーストにした。

そのあと、歯磨きをして化粧台の前に座って鏡を見ながら、寝癖を直して学校に行く準備をした。

「よし！準備OK！」

そして、靴を履いて家を出た。

そして、外に出て家の方を振り返った。

（今日で暫くの間、この家ともお別れかあ…。だって今日から…。）

「ミソラ！何ニヤついているの？転校早々遅れるわよ！？」

「だって、これから、私の一番大切で大好きな人の家で、過ごせると思うと嬉しくなっちゃうんだもん！」

私はハーブに今の正直な気持ちを言った。

「気持ちはわかるけど、今は学校に行く事が先決よ！」

「わ、わかってるよ。じゃあ、ハーブ！いくよ！」

「ええ！」

私はハンターを空に掲げながら言った。

「トランスコード・ハーブ・ノート」

そして、光に包まれた瞬間私はハーブ・ノートになって学校に向かった。

【学校】

学校についた私は人目のつかないところで、電波変換を解いて職員室に向かった。

そこで会った先生に隣の客室で待つように言われて、10分後、理科室にあるようなフラスコを掛けながら1人の男性が入ってきた。

「君が響ミソラちゃんだね？私は今日から君の担任になる育田道德だ。私は君がアイドルだからって特別扱いはしないつもりでいるからな！」

「はい！こちらこそよろしく願います！」

「よし！じゃあ今から教室へと行くか？ついてきなさい！」

私はそういわれ育田先生の後についていった。

教室の前まできて育田先生は、入るように言うから、そこで少し待つようにいわれ、緊張しながらその時を待った。

最初は教室ががやがやとしていたが、やがて静まって育田先生が出席をとる声が出て、いよいよ運命の時がきた感じがした。

「えー、昨日も言ったが、転校生を紹介する。入ってきなさい！」

私は大きく深呼吸をして、教室に入った。

「ベイサイドシティーから来ました。響ミソラです。皆さんよろしく願います！」

ミソラ登場！〔中編〕（後書き）

次回はまたスバル視点で書きます。

ミソラ登場！〔後編〕

僕「スバル」は今学校にて固まっている。

いつもどおりロックに起こされて、委員長達と学校に行き、今日来る転校生は誰だろうと話をしていたら、学校のチャイムがなり、育田先生が来て出席を取ったあと、教室の外にいる転校生に向かって入ってくるように言った。

なんとそこには、僕の最初のブラザーであり、今、恋心を抱いている人物が入ってきたのだ。

「ベイサイドシティーから来ました。響ミソラです。皆さんよろしくお願いします！」

そう、彼女は国民的人気アイドルの響ミソラだった。僕はもちろんのこと、クラス中がまるで氷河期の時代が来たように固まっていた。そんな姿を見てか、育田先生が氷を溶かすような一言を言った。

「なに固まっているんだ！？せっかく新しくきた子が自己紹介しているのに拍手もしないのか？」

そう言われて、真っ先に委員長がはっとなって言った。

「よっこそーミソラちゃん。私達のクラスへ！」

そう言っつて、拍手をしたらまた1人また1人と拍手をしだした。ついににはクラス全員が拍手をした。

「え、響の席だが…。」

そういつた瞬間、男子の目が光った気がした。(ツカサ君とジャックは除く)が次の瞬間ミソラちゃんは僕のところまで来て隣の席に座って笑顔で言っつてきた。

「よろしくね。スバル君！」

その言葉を聞いた瞬間男子達から殺気を感じ、また委員長の方からは殺気以上のどす黒いオーラみたいなのを感じたが、僕も一応ミソラちゃんに返事を帰した。

「じ、こちらこそ、よろしく。」

そして、今日の授業があつという間に終わり、放課後になった。

僕達はいつものメンバーミソラちゃんの机に集まり、真っ先に委員長が話を切り出した。

「ミソラちゃんはなんで、転校してきたのかしら？」

そう言う委員長に対して、ミソラちゃんは下を向いて俯いたまま話しました。

「前の学校では友達と呼べる人がいなかったの。仮にいたとしても、私をただの有名人とでしか見てくれなかったの。だから思い切ってこっちに転校してきたの。」

最初はマネージャーに反対されたけど、ここには親しい友達がいるからお願いって頼み込んだらそういうことならと許してもらったの。こっちに転校してきたら、スバル君やルナちゃん、キザマロ君にゴント君、ジャック君やツカサ君に毎日逢えると思ったから、転校してきたんだけど、やっぱり迷惑だったかな？

ミソラちゃんが悲しそうな眼で言ってきたためみんなは慌てて口々にいった。

「迷惑だなんてとんでもありませんよ。逆に何かあったら僕達に遠慮なくいつてください。何でも相談に乗りますよ。」

「キザマロの言うとおりだぜ！ミソラちゃん」

「もし、男子達に言えない悩みがあったら、聞いてあげるわよ。女

の子同士なら話しやすいこともあるだろうしね。」

「俺は対して、相談相手になれるかわからないけど、何かあったら力になるぜ！」

「僕もだよ。ミソラちゃん！だからみんなに迷惑がかかるなんて思わないだよ。」

上からキザマロ、ゴンタ、委員長、ジャック、ツカサ君が言った。

「だからさ、ミソラちゃんそんな悲しい顔しないでよ。ミソラちゃんは笑顔が一番似合っているんだから。」

ミソラちゃんは皆が言ってくれて嬉しかったせいか。満面の笑顔で答えた。

「ありがとう、みんな！
これからよろしくね！」

「「「「「「「「「「
もちろんだよ！」「「「「「

良い雰囲気になっているところ、一体の電波体が雰囲気をぶち壊した。

「おい！スバルさつさと帰るぞ！今日はミソじゃなくて、居候する奴が家に来るんだろ！さつさと帰るぞ！」

ロックがまた勝手にウィザード・オンして僕に言ってきた。僕が返事をする前に委員長がロックに言った。

「またあなたなの？少しは雰囲気を読みなさいよ！まったく！それで誰が暫く泊まるのかしら？」

「さあ？母さんは今日帰ってきたらわかるって言ってたから、明日いっよ。」

「それなら仕方ないわね。明日になったら必ず教えなさいよ。いいわね！」

「了解！」

「さて皆帰るわよ。じゃあスバル君また明日ね！」

そういって、帰ろうとした時、ミソラちゃんが言ってきた。

「あ、あの〜。私は今からスバル君の家に行きたいんだけど、良いかな？」

ミソラちゃんが聞いてきたので僕はOKした。

そのあと、委員長達と別れた僕とミソラちゃんは屋上について、電波変換して家に帰っていった。

ミソラ登場！〔後編〕（後書き）

次回から普通の視点で行きます。

えええエエー！？（前書き）

今回はかなり短いです。あと、『騒がしい朝』でキザマロのウィザードがペディーになってましたが、正しくはペディアでした。ご迷惑をおかけ致しました。それと、ちゃんと修正いたしました。

えええエエー！？

スバルとミソラは家の前に着き電波変換を解いた。

「ただいまー。」

「邪魔します。」

スバルとミソラは家に入るときにそれぞれ言葉を言って中に入った。

「お帰りなさい。二人とも夕飯になるまで二階にいときなさい！」

まず、最初に反応したのがスバルだった。

「え？2人ともお帰りなさいって、どういうこと？それにミソラちゃんも夕飯を食べるの？」

スバルは頭に疑問を浮かべながらあかねに聞いた。

「あら、そこまで言ってまだ気付かないの？じゃあ、仕方ないわね！ここでスバル君に問題です！今日から暫く家に来る子は誰でしょう？？」

あかねはまだ、誰が家に来るかわかってないスバルに笑顔で言った。

「え？今日から家にとまる子って、えええエエー！？ま、まさか、母さん、今隣にいるミソラちゃん！？」

スバルが驚きながら答えをいうと、あかねは笑いを堪えながら、スバルに言った。

「正解！ね？ミソラちゃん！」

「はい！これから暫く宜しくお願いします！」

「こちらこそよろしくね。ミソラちゃん！それとここは今日からあなたの家でもあるんだから、お邪魔します。じゃなくて、ただいまって言うのよ！わかった？」

「は、はい！」

スバルが放心状態になっている傍らでミソラとあかねがそうやり取りをしていた。そのあと、あかねは夕食の準備をして、ミソラは放心状態のスバルをハープとロックに手伝ってもらいながら引っ張りながら二階に上がっていった。

ピンター！（前書き）

タイトルが適当みたいですいません。
も短いです。

それと、今回

スバルがようやく気付いたかと思うと、何故、自分の部屋にいるのかと聞かれたミソラは、ため息をつきながら説明した。

「スバル君は私が暫くこの家に居候すると聞いて、ビックリしすぎて、固まってたんだよ！そのあと、ハーブやロック君に手伝ってもらってスバル君をこの部屋まで運んだんだよ！」

「そ、そうだったんだー。ごめんね。ミソラちゃん。それと、言うのをすっかり遅くなったけど、これからは色々とよろしくね！」

「こちらこそよろしく！スバル君！」

そう言いながら、2人は握手をした。

そのあと、スバルとミソラは夕飯になるまで、談笑していた。夕飯の時間になった頃、あかねに夕飯が出来たから、下に来るようと言われて、下に行き、あかねをいれて、3人は談笑しながら、食事をした。

そして、食べ終わった後、食器を台所に持っていき、また二階へと上がっていった。

ピンター！（後書き）

お知らせです！実はこれは恋愛というより、ファンフィクションに近いのではないかとメッセージを多数いただきました。それで、自分が読み直した結果恋愛話の一つもないことに気付いたので、ジャンルを変更させていただきました。恋愛話が入ったときにジャンルに追加させていただきます。

皆様、指摘して頂いてどうもありがとうございました。

パートナーのからかい

夕食を済ませてからも、2人は仲良く話をしていた。そこへ、あかねが布団と毛布と枕を持ってやってきた。

「仲良く話しているところ悪いんだけど、ミソラちゃん、今日からこの部屋で寝てね。これはここに置いてくからね!」

「はい!ありがとうございます!」

その言葉を聞いた、スバルは驚いて、下に行こうとするあかねを呼び止めた。

「ちょ、ちょっとまってよ!母さん!ミソラちゃんがこの部屋で寝るんだったら、僕はどこで寝たら良いの?」

あかねは何を分かり切ったことを聞いているのかしらと思いつつ言った。

「あら?自分の部屋で寝れば良いじゃない?」

スバルはその言葉を聞いてさらに驚いた。

「ちょ、ちょっとまってよ！仮にも男女が同じ部屋に寝るなんて、なにかあつたらどうするの？」

その言葉を聞きあ、あかねは笑いながら答えた。

「うふふふ。大丈夫よ！スバルに限ってそれはないわよ！ね？ミソラちゃん？」

「はい！スバル君は私に変なことをする人じゃないと信じてますから！」

そして、あかねは下に降りていった。

スバルがそのことに頭を抱えていると、ハンターV.Gからロックがウィザード・オンして言うてきた。

「良かったじゃねえか！スバル！夢の通りになってよ！」その言葉に、ハーブがウィザード・オンして目を輝かせながら、聞いてきた。

「あら？どついついことかしら？」

そう聞いてくるハーブに対して、ロックは最近、ミソラに係する

と思われる今までの寝言のことや、テレビ番組やさらにCDの事を話した。

それを全て言われたスバルは顔を真っ赤にしながら、ロックを追い掛け回した。

「ロック！な、何言ってるんだよ！ただ、僕はミソラちゃんのファンであり、最初のブラザーだからだよ！変な勘違いしないでよ！」

それに対して、ロックはスバルから避けながら答えた。

「なにいつてんだ！昨日の朝なんか、寝言でミソラちゃん、このお弁当おいしいよ。とか言ったり、昨日の夜なんか、M・Mを熱心に見てたじゃねえか！」

その言葉に対してスバルはもはやなにも言えなくなっていた。

ミソラはというと、こっちはこっちでハーブにからかわれていた。

「良かったわね！スバル君がそこまで思ってくれて。あとは、告白したら、晴れて2人は恋人同士だわ！じゃあ、私は邪魔な奴をどこかに連れて行くとしましょうか！」

そう言って、ロックを連れていこうとするハーブをミソラは顔を真っ赤にしながら止めた。

「ちょ、ちょっとまってよ！ハーブ！スバル君がさっき言ってたじゃない！私とは最初のブラザーでありファンだから、応援してくれてるって、だ、だから、勘違いしたらだめだよ！」

そういうと、ハープクスクス笑いながら、言った。

「まあいいわ！ミソラがそう言うんなら、なにも言わないけど、早くしないと、誰かに捕られても知らないわよ？」

そう言うと、ハープはハンターV.Gの中に入っていった。

「もう！ハープったら！」

ミソラはトランサーの中に戻ったハープに一言言っただけ追いつけっこをしているスバルとロックの方を見た。

デートの約束

スバルはロックを強制的にウィザード・オフにして、少し顔を赤くしながらミソラの方を向いた。

(な、何か、喋らないと、でも何を喋ればいいんだろ?)

スバルがそう思っている一方、ミソラも似たようなことを考えていた。

(な、何か、緊張する。どうすればいいんだろ?)

お互い黙ったまま暫く見つめあっていた。ふとスバルがあることを思った。

(そ、そうだ！今日の朝、父さんが天地さんに貰ったからといって、僕にくれたものがあつた！)

そう思い、スバルは自分の机に行き引き出しから、白い封筒を取り出してミソラの前にだしながら言った。

「ミ、ミソラちゃん！今週の日曜日は暇？」

そう言われた、ミソラは少し顔を赤くしながら答えた。

「う、うん。昨日から1週間は休みを貰ってるから大丈夫だよ！」

「休みが1週間しかないんだ！？大変だね？」

その言葉にミソラは笑顔で答えた。

「そうでもないよ。最初はママの為にやったことだけど、今は自分がやりたいからやってることだから、全然大丈夫だよ。」

「すごいな！ミソラちゃんは！でも無理だけはしないでね！」

「うん！心配してくれてありがとう！」

雰囲気や和んだところでスバルが話を再開させた。

「そうそう、それでね、今週の日曜日、最近ベイサイドシティに出来た遊園地に行かない？」

「うん！いいよ！」

そうスバルが聞くとミソラは満面の笑みで答えた。

「じゃあ、朝9：00に行こうか？」

「うん！いいよ！」

2人は遊び（デート）に行く約束をして、それぞれ布団に入って寝た。

デートの約束（後書き）

次回やっとうら田にはいります。

土下座

AM7:30、スバルが欠伸をしながら起きだした。

「ふわぁ〜あ！おはよう！ロックにハーブ！」

「おっ！おはよう！スバル！今日は、自分で起きるなんて珍しいじゃないか！」

「あら、おはよう！スバル君！」

ロックとハーブがスバルに挨拶した。特にロックは自分で起きたことに嬉しそうに答えた。
そのあと、スバルはミソラのところに行き起こした。

「ミソラちゃん！起きて！早くししないと、学校遅刻しちゃうよ！」

「う、うん。眠い…。」

ミソラはそっぴいながら、目をゆっくりと開けていった。

「おはよう！ミソラちゃん！」

「おはよう！スバル君」

2人はそのあと、着替えて、顔を洗って、朝食を済ませると、家のインターホンが鳴った。

その時、スバルは今日、初めての恐怖を抱いた。

（そ、そうだった！昨日からミソラちゃんがこの家にいるんだっ
ー！）

スバルがそんなことを考えているとミソラがスバルの前まできた。

「どうしたのスバル君？早く行こうよ！？ルナちゃん達が待ってるよっ。」

スバルはミソラの質問には答えず、土下座して言った。

「お願い！ミソラちゃん！僕が出て少ししてから後から家を出て！」

そう言うスバルに対して、ミソラは涙目になりながら言った。

「スバル君はやっぱり私のことが、迷惑なの？」

「め、迷惑じゃないよ！ただ、今一人で出ると委員長が怖いから…。」

慌てながら言うスバルに対してミソラは笑顔になって言った。

「そんなことだったら、私からルナちゃん達にうまく言うから大丈夫！」

そう言われたスバルはミソラちゃんがそう言うならと信用して、二人でいつてきますと言って、家をでた。スバルはその後、後悔することになる。それを台所から見ていたあかねは、二人がいなくなつた後、腹を抱えて笑っていたのは言うまでもない。

土下座（後書き）

デートの話はこの1日が終わったら書きたいと思います。

ミソラVSルナ

2人は玄関を出て皆に挨拶をした。

「おはよう皆ー!」

「おはようってええええー!?」

「おはようスバル君!ミソラちゃん!」

「オッス!」

ルナとキザマロとゴンタは、スバルと一緒に出てきたのに対して、ビツクリした。

ちなみに、ツカサとジャックは昨日、2人が帰ったのを見て、こうなることはわかってたみたいだが。

「なんで、スバル君の家から、ミソラちゃんが出てくるのかしら?」

ルナは、少しだけ黒いオーラを放って言った。

「私の家からじゃ遠いから、スバル君のお母様をお願いして、暫くの間、停めてもらおうことになったの?」

「だ、だったら、私のところに来たら良いわ!私も私の両親も理由を話せば納得してくれるわ!それにスバル君は男の子だし何かあったらどうするの?」

その言葉に満面の笑みで答えた。

「心配してくれてありがとう!ルナちゃん。でも、大丈夫だよ!だってスバル君の家には、スバル君のお母様がいるし、何より昨日、一緒に部屋で寝たけど、何もなかったよ!」

その言葉を聞いた、スバルとルナとキザマロとゴンタが驚愕した。

(ミソラちゃんなんてことを!)

スバルはミソラを見ながら何かが終わったと思った。そこに怒りに満ちた顔でゴンタとキザマロが迫ってきた。

「おい!どういいうことか、説明しろ!場合によってはウェーブバト

ルで倒してやる！」
ゴンタがいうと、その言葉を聞いたロックが勝手にウィザード・オンして出て来た。

「おっしゃー！スバル！あいつにあることないこと吹き込んで、バトルだー！」

「ちょ、ちょっとロック！勝手に出てこないでよ！？もうどうしたらいいか、ますますわからなくなってきたー。」

「おい！スバル！質問に答えろ！」

「そうですよ！答えてくださいスバル君！」
3人が言い合っている一方、こちらの女性二人組はというと、段々と笑顔が消え、険しい顔になりながら、言い合っていた。

「た、たまたま何もなかっただけよ！それに、昨日がそうだったからって、今日はどうなるかわからないわよ！」

「絶対！大丈夫だもん！もしかして妬いてるの？」

ルナはそう言われて顔を赤くしながら答えた。

「そ、そんなわけないでしょ！だいたい、私が好きなのはスバル君

じゃなくて、ロックマン様なんだから！」

ミソラは意地悪くルナに言った。

「スバル君がロックマンだから、結局ルナちゃんは、スバル君のことが好きってことでいいんだよね？」

ルナはその言葉を聞いてさらに顔を真っ赤にさせた。

「だから、違っつて言ってるでしょ！」

「違うわけないもん！」

と2人は言い合っていた。

一方完全に蚊帳の外の2人はというと楽しく雑談をしていた。

「スバル君！たいへんそうだね。」

「まあな、しょうがねえぜ。シドウが言ってたが、ヒーローはもて

るんだと。」

「ふうん。暁さんが言ってたんだ。」

そこでジャックは笑いながら言った。

「ま、シドウの場合はもてるというより、姉ちゃんが一方的に好きになってるだけだがな？あいつのどこがいいんだか？それに姉ちゃんから聞いたんだけど、何か企んでるみたいなんだよな。」

ツカサは思わず聞き返した。

「暁さん、何を企んでるんだろう？」

「さあな？なんか、スバルの両親もなにかあるみたいだぜ？ま、なんだっていいさ。いこうぜ！ツカサ！これ以上、こいつらとここにいたら遅刻しちまうしよ。」

その言葉に同意したツカサは皆の方に振り返って言った。

「じゃあ、僕とジャック君は先に行くね。皆も遅れないように。」

そういつて、ツカサとジャックは先に行った。

あの後、予鈴がなるまで言い合ってた5人は見事に遅刻した。

ミソラVSルナ（後書き）

土下座で投稿したやつで書くのを忘れてた部分があったので、書き
入れました。すいません。

それぞれの日常1（スバル・ミソラ・ルナ編）（前書き）

更新遅くなって申し訳ございません。スバル視点からどうぞ。

それぞれの日常1（スバル・ミソラ・ルナ編）

僕は学校が終わった後、僕とミソラちゃんに寄ってくるファン達から脱出しながら、家に辿り着いた。

その後、宿題をして、夕飯を食べて、風呂に入って、今、ミソラちゃん、僕と入れ代わりに風呂に入っている。

（それにしても、今日は大変な1日だったな…。
でも日曜日にはミソラちゃんとデートができる！じゃなくて、遊びに行けるから楽しみだな！断じて、デートではなく、ただ、遊びに
いっただけだ！）

僕は誰もいないのに何故か顔を赤くなりながら自問自答をしていた。

その時、ハンターV.Gから電話が鳴りだした。

僕はハンターV.Gを手にとって電話にでた。

「こんばんわ。スバル君！今いいかしら？」

電話の相手は委員長からだった。

「うん！今大丈夫だよ。」

「実は今週の土曜日にキザマロとゴンタとツカサ君を連れてロツポンドーヒルズに映画を見に行くんだけど、スバル君とミソラちゃんは大丈夫かしら？」

「僕は大丈夫だけど、ミソラちゃんには聞いてみないとわからないよ。」

「わかったわ！じゃあ、聞いたら後でメールを送ってくれるかしら？」

「了解！」

「それと、スバル君？一つ聞いてもいいかしら？なんで、電話にでたとき、顔が真っ赤だったの？」

（ギクッ！！）

僕は本当の理由を言ったらじゃあ、日曜日は私達も付き合っわとか言われて、ついて来られては困るなと思ひ慌てて話題をそらそうと試みた。

「ちょ、ちょとね。それより、ジャックはいかないの？」

「ええ、なんかクインティア先生とどこかに出かけるみたいよ。」

「そうなんだー。じゃあ、ミソラちゃんに聞いて後でメール送るね。それじゃあ。」

「ちよ、ちよっと!」

委員長が何かを言う前に電話を切った。

その後、風呂から上がってきたミソラちゃんに土曜日の話をした。

「ごめんなさい。実はお風呂から上がってからすぐ、スバル君のお母様に、土曜日に二人でスピカモールに買い物に行かないかって誘われたの。だから、ごめんね。スバル君。」

「そう言うことなら仕方ないよ。わかった!委員長にはメールで伝えておくよ。」

そういつて、メールを送った後、眠くなるまでミソラちゃんと会話をしていた。

↳ミソラ視点↳

今日、私は学校が終わった後、スバル君と一緒に家まで逃げ帰った。もちろん、ファン達から逃げるためである。その後、宿題をして、夕飯を食べて、今はお風呂に入っている。

「は、気持ちいいな。」

「ほんとね。」

今、私はハーブと一緒に入っている。

ときどき、私は思うんだけど、ハーブは電波体で実際お湯には浸かってないのに気持ちいいな。て言うのはなんか変だなと思うときがある。

「…なに？ミソラ？あなたなにか聞いたそうね？」

私はやばいと思い、何食わぬ顔でいった。

「別に何も思っ
てないよ。ハー
プの気のせい
じゃないの？」

「いつとく
けど、スバル
君は誤魔化
せても私は
騙されない
わよ。」

「な！なん
で、そこで、
スバル君が
出てくるの
よ！」

「クスクス、
顔が真っ赤
よ！ミソラ。」

「もう！ハ
ープ！」

そう言いな
がら、私は一
生ハープに
は勝てない
なと思った。

そのあと、
お風呂から
上がってきた
私にスバル
君のお母様
が声を掛け
てきた。

「ミソラ
ちゃん。ち
よっといい
かしら？」

「なんですか？」

「土曜日にスピカモールと一緒に買い物にいかない？」

「いいですよ！」

ちょうど、その次の日は、スバル君とデートだから、服を買いに行くのいいなと思いながら返事をした。そのあと、二階に上がるとスバル君から土曜日の話を聞いていた。

「ごめんなさい。実はお風呂から上がってからすぐ、スバル君のお母様に、土曜日に二人でスピカモールに買い物に行かないかって誘われたの。だから、ごめんね。スバル君。」

私は両手を合わせて謝った。

「そういうことなら仕方ないよ。わかった！委員長にはメールで伝えておくよ。」

そのあと、私は眠くなるまでスバル君と会話をしていた。

〈ルナ視点〉

私は学校が終わった後、職員室にいき、育田先生に今日遅刻した事を謝り、明日必ず遅刻しないようにしますと、宣言して帰路に着いた。

そのあと、今日の宿題をして、夕飯はママと一緒に食べてから、ママと話をしていた。

「ねえ、ルナ？実は今週の土曜日からやる映画のチケットが7枚あるから、お友達を誘っていったらどうかしら？」

「ええ、一回皆に聞いてみるわ。でもなんで、都合よく今週の土曜日からやる映画のチケットが7枚あるの？」

「今日、あなたが、不機嫌に帰ってきたから、あなたが宿題中にモードに何があったか聞いたのよ。」

それに、あなたは気になる子がいるみたいだし、やっぱり母親としては応援してあげたいじゃない！」

「べ、別に私はスバル君なんか気にしてないわよ!」

「あら?スバル君なんて一言も言ってないわよ。それになんで顔が真っ赤なのかしら?」

「そ、それは、あー!そうだったわ!早く皆に聞かないといけないわね!じゃあ、ママ!ちそうさま!」

そういつて、逃げるように自分の部屋に向かった。

『ルナの部屋』

「ちょっと!モード出て来なさい!」

そう言うつと、私のウィザードのモードがウィザード・オンして出てきた。

「なんですか?ルナちゃん?」

「なんですか？じゃないわよ！あなた、なにママに余計なことを喋ってるの？」

「私はルナちゃんの為と思ってママさんに相談したんですけど、いけなかったですか？」

「いけなくはないけど、まあいいわ！モードは私の為を思ってるの」とだし、許してあげる。

…それとありがとう」

「私の方こそごめんなさい。次からは気を付けます。」

そう言って、モードはハンターV.Gの中に戻っていった。

(さて、まずはツカサくんに電話ね)

私はまずツカサ君に電話を掛けた。

すると、ワンコールしたあと、すぐにツカサ君の顔が出てきた。

「こんばんわ、ツカサ君！今いいかしら？」

「うん、大丈夫だよ！」

「今週の土曜日にロッポンドーヒルズに映画を見に行くんだけど、何も予定とかはないかしら？」

「うん！大丈夫だよ！」

「わかったわ！誰と行くかは、後でメール送るわ！」

「了解！」

そのあと、電話をきってから、キザマロに電話を掛けた。彼もワンコールしたあと、すぐに出てきてくれた。

「もしもし、キザマロ！あんた土曜日暇よね？ならロッポンドーヒルズに映画を見に行くわよ！」

誰と行くかは後でメールするからそれじゃあ！」

「了、了解……」

(ふう、次はゴンタね。)

ゴンタに電話掛けてたら15秒ぐらい後に出た。

「おう！委員長何か用か？」

「あなた、早く電話に出なさいよね！」

全くこの私を待たせる何ていい度胸だわ！

大方、ハンターV.Gを探すのに手間取ったところかしら？」

「め、面目ねえ。」

「まあ、いいわ。今週の土曜日にロッポンドーヒルズに映画を見に行くわよ！」

誰といくかまだわからないけど、わかったらメールするわね！」

「おう！わかったぜ！」

そついうと、私は電話を切ってジャックに電話をした。彼もツカサ君やキザマロ同様にワンコールしたあと、すぐに出てきてくれた。

「もしもし私だけど、今週の土曜日暇よね？その日にロッポンドー

ヒルズに映画を見に行くから、必ずその日はあけときなさい。わか
ったわね！」

「了解！つて姉ちゃん！？いきなり何するんだよ！」

いきなり、ジャックの顔からクインティア先生の顔が出てきた。
彼女はジャックと同様に、もとディーラの一員だったけど、

スバル君や暁さんのに救われて今は私達が来年通う、中学校の先生
をやっている。

ウィザードはたしか、スバル君やツカサ君とジャックとゴンタとあ
とミソラちゃんのウィザードと一緒にFM星人でブアルゴって名前
だったわね。もちろん、あの5人と一緒にクインティア先生も電波
変換ができるのよね。

話を元に戻すわね。

「こんばんわ、クインティア先生！」

「こんばんは、白金さん。悪いけど、その日はジャックと用事があ
つて出かけなくちゃいけないのよ。ごめんなさいね。」

「いえ、そういうことでしたら、仕方ありませんわ。では失礼しま
す。」

「ええ、またね。」

私は電話を切ったあと、すぐにスバル君に電話を掛けた。
すると、彼もワンコールしたあと、すぐに出たけど、何故か顔が赤いのが気になった。

「こんばんわ。スバル君！今いいかしら？」

「うん！今大丈夫だよ。」

「実は今週の土曜日にキザマロとゴンタとツカサ君を連れてロツポンドーヒルズに映画を見に行くんだけど、スバル君とミソラちゃんは大丈夫かしら？」

「僕は大丈夫だけど、ミソラちゃんは聞いてみないとわからないよ。」

「わかったわ！じゃあ、聞いたら後でメールを送ってくれるかしら」

「？」

「了解！」

「それと、スバル君？一つ聞いてもいいかしら？なんで、電話にでたとき、顔が真っ赤だったのかしら？」

私はさつきから気になることを聞いたら、案の定体が一瞬だけ反応したのを見逃さなかった。

「ちよ、ちよとね。それより、ジャックはいかないの？」

「ええ、なんかクインティア先生とどこかに出かけるみたいよ。」

「そうなんだー。じゃあ、ミソラちゃんに聞いた後でメールを送るね。それじゃあ。」

「ちよ、ちよとー！」

スバル君に先程の質問を聞く前に電話を切り忘れてしまった。

(まあ、いいわ！明日は必ず吐かしてやるんだから！)

そう思いながら私は明日の準備をしてスバル君からのメールを見て、ツカサ君とゴンタとキザマロにメールを送って眠りにはいった。

それぞれの日常1（スバル・ミソラ・ルナ編）（後書き）

次の話をすぐ投稿します

それぞれの日常2 (ツカサ・キサマロ・ゴンタ・ジャック編) (前書き)

ツカサ視点からです

それと、今回はスバルは出てきません。

それぞれの日常2（ツカサ・キザマロ・ゴンタ・ジャック編）

^{ツカサ}僕は学校が終わった後、ウェーブライナーに乗って、ドリームアイランドの公園に行った。

そこで、僕はこの前知り合った、この公園の管理人のおおそのソウジさんという人に出会って時々、ここで公園に捨てられてあるゴミを片付けている。

「おお、ツカサ君！今日もご苦労さん！」

「いえ！僕はここの公園が一番好きなんです。

それに、ここの公園に限らず、ゴミはちゃんとゴミ箱に捨ててほしいですし！」

「本当にツカサ君の言うとおりじゃ！早いとこやって切り上げようかの！ツカサ君は今日はあっちを頼む！あの隅っこにいるんなゴミが捨てられての困ってたところなんじゃ！」

「わかりました！」

僕は言われたところにいきゴミを燃えるゴミ、燃えないゴミ、空き缶、空き瓶、ペットボトルなど、こと細かく分別して袋に入れていった。

終わる頃には夕日が沈みかけていた。

僕はおおぞのさんのところに行き一緒にゴミ集積場にいきその係の人にいつもの通りをお願いしておおぞのさんに挨拶をして家へと帰った。

その後、夕飯を作って食べて、お風呂にはいり、自分の部屋に行つて今日の宿題をしようとした時、ハンターV.Gの電話が鳴った。僕が電話に出ると委員長の顔が出てきた。

「こんばんわ、ツカサ君！今いいかしら？」

「うん！大丈夫だよ！」

「今週の土曜日にロッポンドーヒルズに映画を見に行くんだけど、何も予定とかはないかしら？」

「うん！大丈夫だよ！」

「わかったわ！誰といくかは、後でメール送るわ！」

「了解！」

そういつと電話を切った。

(久しぶりに皆と映画を見に行けるのかたのしみだな！)

そう思いながら宿題に取り掛かった。

～キザマロ視点～

僕は学校が終わった後、委員長が職員室に言ってる間、廊下で待たされていた。

「あー！あの子先生に怒られて立たされてるー！」

「あのチビ！きっと何かやらかして立たされてるんだぜー！」

などと、下級生に馬鹿にされた挙げ句、委員長が職員室から出てきて僕に今朝遅刻した愚痴を散々聞かされながら帰宅した。
ちなみにスバル君とミソラちゃんはファンから逃げるためダッシュで帰って、ツカサ君は用事があるからといって先に帰り、ゴンタ君とジャック君は委員長からのとばかりが怖くて委員長が職員室に行ってる間、それぞれ電波変換して帰っていった。

（はあ～。今日は1日疲れたな～）

「キザマロ君！お疲れさまです！」

声をかけてきたのは僕のウィザードのペディアだった。

「はあ。本当に疲れたよ。僕も皆みたいに電波変換できたらな。」

「

…キザマロ君。元気を出してください。」

「ありがとう。ペディア！そうだ！早く宿題を終わらせてゆっくりしよう。」

「そうですよ。頑張ってください！」

そう言うと、ハンターV.Gに戻っていった。

その後、宿題を終わらせてゆっくりしようと布団にダイビングしようとしたら、突然ハンターV.Gに電話が鳴った。電話に出ると、そこには委員長顔があった。

「もしもし、キザマロ！あんた土曜日暇よね？ならロッポンドーヒルズに映画を見に行くわよ！
誰といくかは、後でメールするからそれじゃあ。」

「了、了解…」

そういって、電話を切った。

(いつもながら、拒否権なしですか…。)

かわいそうなキザマロであった。

〈ゴインタ視点〉

俺は学校が終わった後、委員長が職員室^{ゴインタ}にいつてる間、電波変換して家に帰った。キザマロには悪いけど、俺たちの犠牲になってもらおう。

そのあと、俺は牛井クエストを夕飯の時間までやったあと、一時的に断して、夕飯の牛井を食べてゲームを再開しようとしたとき、どこからか、牛井戦隊のオープニングのテーマ曲が流れてきた。俺は慌てて散らかってるところから探して、見つけた後、急いで電話にでた。

そこには不機嫌そうな委員長顔があった。とりあえず、俺は声を掛けた。

「おう！委員長何かよつか？」

「あなた、早く電話に出なさいよね！」

全くこの私を待たせる何ていい度胸だわ！

大方、ハンターV.Gを探すのに手間取ったところかしら？」

「め、面目ねえ。」

俺は頭を下げた。

「まあ、いいわ！今週の土曜日にロッポンドーヒルズに映画を見に行くわよ！」

誰といくかまだわからないけど、わかったらメールするわね！」

「おう！わかったぜ！」

そして電話を切った。

「それにしても委員長、何故俺がハンターV.Gを探してたなんてわかったんだ？」

「それは、お前の行動がワンパターンだからだよ！」

ハンターV.Gから、オックスが出てきて言った。

「そうか。じゃあ、悪いけど、オックスこの部屋の片付け頼むぜ！」

「お前！人の話を真剣に聞いてないだろう！
それにお前がこの部屋を散らかしたんだから自分で片付ける！」

「そんな堅いこと言わないでくれよ。部屋を片付けてくれたら、今度、特盛りの牛丼を頼んでやるからさ。頼むよ！」

「まったく、調子のいい相棒だな。」

そういつて、オックスは部屋の片付けして、ゴンタは眠くなるまで、
始終ゲームをやっていた。

〜ジャック視点〜

ジャック
俺は学校が終わった後、委員長が職員室に行ってる間、電波変換し
て家に帰った。

そのあと、宿題をして、夕方には姉ちゃんが帰ってきたので、飯を
食いながら、雑談をしていたら、俺のハンターV.Gから電話が鳴っ
たので、でてみたら、委員長からだった。

「もしもし、私だけど、今週の土曜日暇よね？その日にロツポンド
ーヒルズに映画を見に行くから、必ずその日はあけときなさいよ。
わかったわね！」

「了解！って姉ちゃんいきなり何するんだよ！」

俺は委員長に言ったからまあいいけど、と思ったてたら姉ちゃんの言葉を聞いてビックリした。

「こんばんわ、白金さん。悪いけど、その日はジャックと用事があったて出かけなくちゃいけないのよ。ごめんなさいね。」

(な、なんだと〜！俺はそのことについて一言も聞いてねえぞー！)

「ええ、またね。」

そう思っているうちに電話が終了したみたいだ。
当然のごとく、俺は姉ちゃんに聞いた。

「姉ちゃん！俺そのことについて聞いてねえぞー！」

「あたりまえよ！まだ話してないんだから！実はねー……………
ということだからあなたも手伝いなさい！」

(えー！なんで俺がトホホ…。)

それぞれの日常2 (ツカサ・キサマロ・ゴンタ・ジャック編) (後書き)

更新が遅くなってしまった訳は、話がまとまらず更新が出来ずになりました。 申し訳ございませんでした。

ミソラとあかねの買い物(前書き)

今回はミソラ視点です。

ミソラとあかねの買い物

【土曜日】

私は今日、スバル君のお母様と一緒にスピカモールにショッピングに行く日だから、楽しみでワクワクしている。

私は着替えてから、上で寝ている、スバル君を起こしにいった。

「スバル君！朝だよ！」

「ふわーあ？あ！おはようミソラちゃん！それじゃあ、おや。」

私はスバル君がまた寝てしまう前に上からスバル君を覆い被さるよ
うに倒れこんだ。

「うわぁー！ー！」

今の一撃で目が覚めたみたいね。

「ミ、ミソラちゃん！？起きます！起きますから退いてください！」

「よろしい！でも、明日もこんな状態で寝るようなことがあったら、
スバル君のおでこに目覚めのキスしちゃうからね！」

そう言っつて、私は下に降りていった。

リビングではすでにスバル君のお母様が朝食の支度をしていた。

「おはようございますー！」

「あら、おはようー！ミソラちゃん！今日は思いっきり買い物しちゃおうね！なんたって、明日はスバルとデートなんだし」

「は、はいー！」

私は顔が赤くなりながらも返事をした。

そこで、スバル君がいつも通りの普段着に着替えて降りてきた。

「おはようー！母さんー！」

「おはようー！スバル！朝食の用意が出来てるから早く食べなさい。」

「はい。」

そのあと、3人で朝食をとったあと、私達はそれぞれ身仕度をして、家を出た。

そのあと、ルナちゃんとキザマロ君とツカサ君がいた。

「「「おはよう！皆！」「「「

「「「おはようございます。」「「「

「あれ？ゴンタは？」

スバル君がゴンタ君がいないことに、気付いてルナちゃん達に聞いていた。

「それが、まだ来てないのよ！まったく、あれほど遅刻しないよう、言ってたのに、遅刻する何ていい度胸だわ！」

「まあまあ、もうすぐで来るでしょうから、もう少し、待ってみましょうっ？」

「おばさまがそうおっしゃるなら、もう少し待ってみようかしら？」

お母様がルナちゃんにそう言うと、ルナちゃんは苛々しながらももう少し待ってみることにした。とそこへ、慌てて走ってくる人物が

いた。

それは、紛れもなくゴンタ君の姿だった。

「皆ー！遅れてすまねえ！」

「遅れてごめんじゃないわよ！一体約束の時間より、何分遅れてるのよ？ちよっとは反省しなさい！」

「まあまあ、ルナちゃん、ゴンタ君が来たんだから、怒るよりも、早く行かないと、上映時間までに間に合わなくなっちゃうわよ？」

ルナちゃんがゴンタ君にお説教モードに入る前にお母様がルナちゃんを宥めた。

「それもそうですわね。ゴンタ！次からはこういう事がないようにしなさい！わかったわね？」

「次からは気を付けるぜ。」

そういうと、皆でウェーブライナーの乗り場までいき、ウェーブライナーに乗っていった。

皆で楽しく会話しているとアナウンスが鳴った。

「次は、ロツポンドーヒルズ、ロツポンドーヒルズ、おおりのお客さまは忘れ物などございませぬようにおおりにございませぬ。」

「それじゃあ、僕達はここで降りるから。」

そういって、スバル君達は降りていった。

その後、スピカモールに到着した私達は、まず、洋服を買いにいった。私はどれが、明日のデートに似合うかなと、お母様やハープに相談しながら、買い物を楽しんでいた。

そして、明日のデートに着ていく服を買って時間をみると、もう昼のPM12:30になっていた。

「あら？もうこんな時間になったの！？それじゃあ、ミソラちゃんあそこのバイキングにいつて食べましょう！」

「え！？バイキング！！行きます！行きます！」

そう言って、私達はバイキングレストランに行つて昼食をとることにした。

私はスパゲティやハムステーキやカツサンド等を食べた後、食後のデザートにプリンやゼリーやケーキ類等を食べた。

お母様の方はビーフカレー食べた後、コーヒーを飲みながら、私がお母様の方を待っていてくれた。

「」馳走様でした。」

「うふふ、かなり食べたわね！特にデザートなんかかなりの量だったわね。スバルから聞いてた以上だわ。」

「スバル君、そんなことをいってたんですか？」

私は恥ずかしくなって下を向いてしまっただった。

「さあ、そろそろ出ましようか？」

そう言って、会計を済ませた。

そのあと、2人で偶々イベント会場で動物達にやるショーが間もなく開演と言うことで、中に入って見ることにした。最初に出てきたのは、お猿さんが丸いボールに乗りながら横に付き添っているピエロの人の手を持ちながら玉転がしをして出てきた。ピエロの人が中央まできて、手を離すと、お猿さんは、足だけで玉を転がしながらその状態でバックステップを何回か成功させて、ピエロの人と一緒に帰っていった。

そのあと、空の檻が出てきたと思ったら、檻の隣にマントを持った、女性の人そのマントを檻に被せると、大きな声で行った。

「3・2・1・GO！」

そういつて、マントを取ると空の檻からいきなり、ライオンが現われた。

そのあと、大きな檻が出てきたと思つたら、先ほどまで、空の檻に入つてたライオンが出てきて、一緒にいる、女性の人が用意されたワツカに火を点けると、いつの間にか持っていた鞭でライオンをしつけながら、火のワツカにライオンが飛び込んだ。そして、また一個のワツカに火を点けると、また同じようにして、ライオンが飛び込んでいった。

最後に火の点いたワツカを3つにライオンが飛び込んでいった。

そして、拍手が喝采してるなか、ライオンと女性の人が一礼して静かに引き上げていった。

そのあと、白いシルクハットを被つたスーツ姿の男性の人が出てきた。

「ご来場の皆様！本日は動物達によるショーを見ていただき誠にありがとうございます。この度は1ヶ月後に行われる動物達と人間たちの愉快的サーカスショーの宣伝の為、今回この場を借りてやらせていただきました。1ヶ月後にはこれ以上の素晴らしい物をお見せいたしますので、当日には是非ともお越しただくようお願い申し上げます。それでは、皆様また会うときまでご機嫌！」

そういつと、帽子を脱いだ瞬間、何十羽という白い鳩が飛び出てきた。

会場がおおー！といいながら拍手している中、白いシルクハットを被つた男性の人が静かに退場していった。

(は、1ヶ月後か、よし！今度は絶対スバル君達と見に行こう！
こと！)

動物達のシヨーを見終わった私達は家に帰るため、ウェーブライナーに乗っていた。

「今日は楽しかったわね！特に偶々とはいえ、動物さんによるシヨ
ーは良かったわー！」

「はい！今日は色々とありがとうございました！」

「うふふ！良いのよ！明日はスバルと思いつきり楽しんでらっしゃ
い！」

「は、はい…！」

(明日はスバル君とデートだー！よし！明日は今日以上に楽しんで
じゃうぞー！)

そう思いながら、スバル邸へと帰っていった。

ミソラとあかねの買い物（後書き）

今回はミソラとあかねが買い物に行ってる時、スバル達はどうしていたかの話です。

ロンドン・ヒルズの映画館にて（前書き）

今回はスバル視点です。

ロップンドーヒルズの映画館にて

【朝】

「スバル君！朝だよ！」

そう言っつて、起こしてくれたのは、こないだから僕スバルの家に居候して
いるミソラちゃんだった。

「ふわーあ？あ！おはようミソラちゃん！それじゃあ」

まだ眠たかった僕はミソラちゃんにおやすみと言っつて寝ようとした
僕に、ミソラちゃんが倒れこんできた。

「うわぁー！ー！ー！」

僕は思わず悲鳴を上げて慌ててミソラちゃんに言っつた。

「ミ、ミソラちゃん！？起きます！起きますから退いてください！」

「よろしい！でも、明日もこんな状態で寝るようなことがあっつたら、
スバル君のおでこに目覚めのキスしちゃうからね！」

「!?!」

そう言っつて、ミソラちゃんは下に降りていった。

「ククク、スバル、顔が赤いぞ！」

ロックはハンターV.Gの中から一言言っつてきた。

僕はそれに答えず、着替えてから下に降りていった。すると、下では、母さんは朝食の支度をして、ミソラちゃんは既に食卓用の椅子に座っつていた。

「おはよう! 母さん!」

「おはよう! スバル! 朝食の用意が出来てるから早く食べなさい。」

「はい。」

そういっつて、ミソラちゃんとは向かい側になるように座っつて食べ始めた。

食べ終わっつた後、身仕度をして三人で家を出た。

待ち合わせ場所に行くと、委員長とキザマロとツカサ君がいた。

「おはよう！皆！」「」

「おはようございます。」「」

「あれ？ゴンタは？」

僕はゴンタがいないことに気付いて委員長達に聞いた。

「それが、まだ来てないのよ！まったく、あれほど遅刻しないように、言うておいたのに、遅刻するなんていい度胸だわ！」

「まあまあ、もうすぐで来るでしょうから、もう少し待ってみましょうっ。」

「おばさまがそうおっしゃるなら、もう少し待ってみようかしら？」

母さんの一言で委員長は苛々しながらも、待ってみることにしてみましたよ。

と、そこへ走ってくる一人の少年がいた。

「皆ー！遅れてすまねえ！」

「遅れてごめんじゃないわよ！一体約束の時間より、何分遅れてるのよ？ちよっとは反省しなさい！」

「まあまあ、ルナちゃん、ゴンタ君が来たんだから、怒るよりも、早く行かないと、上映時間までに間に合わなくなっちゃうわよ？」

「それも、そうですね。ゴンタ！次からはこういう事がないようにしなさい！わかったわね！」

「次からは気を付けるぜ。」

母さんは委員長がゴンタに対して、いつものお説教モードに入る前に宥めた。

それを見た僕はさすが母さんだなと感心した。

そのあと、ウエーブライナーに乗って楽しく会話しているとアナウンスがしてきた。

「次は、ロツポンドーヒルズ、ロツポンドーヒルズ、おおりのお客さまはお忘れ物などございませぬようおおりくださいませ。」

ロツポンドーヒルズに着いた後、ミソラちゃんと母さんに降りる前に一言言って降りた。

そのあと、映画館にむかっていった。

そこで、委員長が受け付けの人に5人分の入場券を渡したあと、中に入っていた。

席は右から委員長、キザマロ、ゴンタ、ツカサ君、僕と座っていた。上映が開始されるまでの間に僕はどんな映画かを把握していなかったため、受け付けで貰ったパンフレットを見て僕は青ざめた。なんと、今回やる映画は『古い物を捨てる奴は呪われる』というホラー映画だった。

僕は直ちにこの場からコッソリと脱出しようとしたが、ツカサ君に手を掴まれた。

「な、なに？ツカサ君？」

「いや〜。確か、スバル君でホラー物が苦手だって委員長がいつてたから、てっきりスバル君が逃げるのかなと思っちゃって。」

ツカサ君は顔をニコニコしながら、言ってきた。

「べ、べ、べ、別に怖くないよ。それにこの映画だって実。」

僕は実際は作り物なんだしと言おうとしたら、ツカサ君が言ってる途中に話を遮った。

「いや、案外実話だったりすると思うよ。この映画の内容は、この

パンフレットにも、書いてるけど、人間達が古くなった物をまだ使えるのに、古くなったからと言って、物を捨てたり、新しいのが出てきたから、捨てられたりされた物が、魂を持って人間たちに復習するって話だけど、僕達も、案外似たような状況だから、実話があってもおかしくないと思うんだー。」

「へ、へー。で、でも、化、化学的に有り得ないよ。」

「だったら、この映画を見ても大丈夫だよな？」

「あ…。」

そのあと、僕は何も答えられないまま、覚悟を決めて、上映時間まで座って待っていた。

「ブーーーーー」

音が鳴ると各出入口が閉められ、照明が暗くなった。その時、予告にホラー映画の宣伝を見た瞬間、一気に意識が飛んでいった。

あれからどれくらいがたっただろう。僕は突然、耳に声が聞こえてくると、ゆっくりと目を開けた。そこには、ツカサ君の顔があった。

「早くおきて！スバル君！映画はもう終わったよ。」

いつの間にか照明が明るくなっていて、出入口からは映画を見ていたと思われる人達が、ぞろぞろと出ていく。

「委員長達はもう外に出ているから、僕達も、早く出よう！」

「う、うん。」

僕はツカサ君に頷くと席を立って出ていった。

そこで、委員長達と合流した。

「あなた達出てくるのが遅かったわね？まさか？スバル君？あなた、気絶してたんじゃないでしょうね？」

（ギク！）

僕は委員長にどうやってうまく言おうかと悩んでたら、ツカサ君が助け船を出してくれた。

「違うよ。ただ、人が多かったから、人が少なくなったら出ようって話してたんだー。ね、スバル君！」

「そつだよ。委員長！」

「ふーん。ま、いいわ。今回は楽しめただけじゃなくて、勉強にもなったから、これからは、私達も、古いからといって、まだ使えるものを捨てないようにしないとね。」

「さすが、委員長です！僕も見習わないようにしないといけませんね。」

腕組みをしながら委員長が言うと、キザマロが眼鏡をずり上げながら言った。

「それと、ゴンタ！コダマタウンに帰ったら、キザマロの家に行って今日の映画の話をしっかりと聞きなさい！わかったわね！」

「了、了解だぜ。」

「どうしたの、ゴンタ」

僕は委員長が何故、先程見た映画の話をキザマロに聞いとくように言ったのか、疑問に思い聞いてみた。

「上映開始早々に、いびきをかいて寝てたんですよ。」

「そ、そうだったんだ。」

僕はツカサ君と顔を見合わせて、つい苦笑いをしてしまった。

その後、皆でお昼を食べてから、近くのボーリング場で5人の内、誰が得点で一位になるか、勝負をすることになった。

勝負をした結果、

一位、ツカサ	300点
二位、ルナ	220点
三位、キザマロ	150点

四位、スバル 148点

五位、ゴンタ 78点

等の順番だった。

因みにツカサ君はすべて、ストライクで、記念品を貰っていた。

そのあと、僕達はウエーブライナーに乗ってコダマタウンに帰って言った。

ロンドン・ヒルズの映画館にて（後書き）

後、2話ほど話を書いたら次はスバルとミソラのデートに行きます。
色々話を伸ばしてすみません。

決心（前書き）

久しぶりに通常視点で行きます。あと、今回はいつもより短いです。

決心

【夜】

今、食卓にはスバル、ミソラ、あかねの3人がそれぞれの出来事を話しながら食事をしている。

3人同時に食べ終わると、あかねは洗い物をやりに、ミソラはお風呂に入りに行った。

(ミソラちゃんが風呂に入ってる今しかない！)

「ねえ、ロック？今から展望台に行こう！」

スバルは自分のハンターV.Gの中にあるロックに言った。

「突然なんだよ！ま、いいけどな。」

スバルはあかねに一言言うと、気を付けて行ってらっしゃいと言われてから、靴を履いて玄関のドアを開けた。ちょうど、そこには、NAXAから帰ってきた、大悟と出会った。

「ただいま、スバル？こんな時間に何処に行くんだ？」

「ちょっと展望台にいつてくる。」

「そうか、気を付けてな！」

「うん！」

そう言って展望台に駆け出していった。

【展望台】

スバルは展望台に着くなりロックをワイザード・オンして話し始めた。

「ねえ？ロック？明日のことをお願いがあるんだけど、明日、僕とミソラちゃんが観覧車に乗ってる間だけでいいから、何処かに行ってくれないかな？」

「ああ！いいぜ！」

スバルはロックにそうお願いすると、ロックはあっさりと承諾した。その事にビックリしたスバルは思わず聞き返した。

「え？いいの？」

「ああ！俺もお前のパートナーになって1年、俺も少しだけだが、人間達の事がわかってきたからなあ！なあ、スバルーっただけ聞いていいか？」

ロックが真剣な顔をしてスバルに聞いてきた。

「な、何？」

「今のお前の眼を見ていると何かを決意した眼になっている、といことは、お前、明日『カンランシヤ』で乗り物に乗ってミソラに明日、なにかを言おうとしてるな？」

その言葉を聞いて、スバルは真直ぐな瞳でロックに言った。

「明日、ミノラちゃんに僕は告白しようと思っているんだ！だから。」

「わかった！そう言うことなら、明日は全面的に協力するぜ！」

「ありがとう！ロック！」

「ただし、二つ条件がある！」

条件と聞いてスバルはゴクンと喉を鳴らした。

「一つは、明日は必ず自分で起きること！もう一つは最後にどんな結果になるうとも、後悔しないこと！わかったな！一つでも破ったら承知しねーぞ！」

「うん！約束する！」

そう言って、スバルとロックは軽く拳と拳をぶつけあった。

とそこへ、一人の少女がスバルの元へ歩いてきた。

「スバルくん！」

「……ミリンちゃん……？」

展望台の下で（前書き）

書いてて何故か自分も恥ずかしくなってきました。

展望台の下で

「スバルくん。」

「ミ、ミソラちゃん!？」

展望台に来たのは、ミソラだった。

「どうしたの?ここにきて?」

「私がお風呂から上がった後、部屋に言ったらスバル君がいないから、スバル君のお母様に聞いたら、お父様がスバルなら展望台にいるよって教えて貰ったから来たの。ところで、スバル君はこんなところで何をしてたの?」

「夜空が綺麗だから、眺めてたんだー。」

スバルはロックと話した後、展望台から星を眺めようとしたところ、ミソラが来たのだった。

「じゃあ、二人であそこのベンチに座って眺めよう！」

「うん！いいよ！」

ミソラは展望台に設置されている椅子を指差して言うと、スバルも頷いて、二人は座った。

「本当にきれいだね。」

「そうだね。ミソラちゃん。でも、」

スバルは横にいるミソラをチラッと見た後、続けて言った。

「でも、ミソラちゃんのほうが凄く綺麗だよ！」

「え！？」

ミソラはスバルのその言葉を聞いて、頬を真っ赤に染めた。スバル本人も自分でつい思ったことを言ってしまったせいか、頬がミソラよりではないが、赤くなっていた。二人は無言で星を見てい

て、いつのまにか、二人は無意識の内に手を繋いでいた。しばらくしてから、ミソラが口を開いた。

「そろそろ帰ろうか？」

「うん！そうだね！」

そう言っつて、二人が立ち上がったとき、手を繋いでることに気付いた。

二人は慌てて手を放して同時に言葉を発した。

「ごめん！ミソラちゃん！」

「スバル君！ごめんなさい！」

「いや、僕がつい手を繋いでしまっつてごめん。」

「うんうん、私が無意識の内に手を繋いでしまつたから。」

「いや、僕が！」

「いえ、私が！」

暫く二人はそう言い合っていたが、やがて、二人同時に笑いだした。暫く笑いあつた後、ミソラが話した。

「さ、早く帰ろう！」

「うん！そうだね！」

二人は仲良く帰っていった。

それを見ていた二体の電波体は優しい眼で二人を見守った。

展望台の下で（後書き）

初めてスバルとミソラのラブラブシーンを作ってみました。

ここまでで、質問や意見や間違いなどの指摘がありましたらコメントや感想などをお送りください。お願い申し上げます。

夜に動く二つの影

人々が夜という、暗い闇の中で寝静まつてる頃、あるマンションの一室にて躰いびきをかいて、寝ている二十代前半くらいの男性がいた。その隣の部屋では二十代前半と思われる女性と、12、3歳と思われる男の子が隣で躰いびきをかいて寝ている男性を見ると、静かに襖ふすまを閉めたあと、二人は頷きあって、電波変換をして、ある施設に行った。

「????司令室」

そこで、二人は電波変換を解除して、うまい棒で埋めつくされている机に向かった。

「あいつ、相変わらずうまい棒が好きだな」

そう言って、少年は、ゴミ箱に捨てられてるうまい棒の残骸を見た。

（うへへ、どっだけ好きなんだよあいつは？）

家で寝ている男性を思い浮かべながら、目的の物を探すため引き出しを開けた。すると、マル秘計画書と書いているファイルを見つけて、女性と男の子は中を見て、ため息をついた。

「姉ちゃん…これ？」

「…ええ、間違いないわね　そうになると人手が一人ぐらいほしいわね？」

「そう言うことなら俺に任せろ！最近転校してきた奴がいてよ、そいつとは仲が良いし、電波変換もできるからきつと力になってくれるぜ！」

そう言うとき女性は少し考える素振りをしてから言った。

「わかったわ！　じゃあ、帰ったらあの人にばれないように連絡するのよ」

「了解だぜ！」　そのあと、二人は電波変換して帰っていった。
二人が見たマル秘計画書には、明日スバルとミソラが行く場所が書かれていた。

夜に動く二つの影（後書き）

今回はスバルとミソラのデートを書いていこうと思います。

それと、個人的都合により次回は水曜日に書かせて頂きます。申し訳ございません。

久々のデート（前書き）

お久しぶりです。久々の投稿ですが、かなり短いです。

久々のデート

天気の良い朝スバルとミソラが同時に起きた。

「ふわぁ〜あ、あ！ スバル君おはよう」

「ふわぁ〜あ、あ！ミソラちゃんおはよう」

二人は挨拶をしたあと、ミソラは一階でスバルは二階でそれぞれ着替えた。そのあと、スバルは一階に降りた後、ミソラがいつもと違う服だと気付いて、つい魅入ってしまった。ミソラは白色のワンピースを来ていた。

「昨日、スバル君のお母様と一緒に選んだんだけど、に、似合うかな？」

スバルはミソラの言葉を聞いてはっとなりすぐに答えた。

「うん！すごく似合ってるよ」

「ありがとうー！」

スバルの似合ってるという言葉にミソラは喜びながらお礼をいった。

「ほら早く朝ご飯を食べてデートに行つてきなさい」

あかねが二人にそういうと、二人はデートという言葉に頬を赤らめながら朝御飯を食べた後、それぞれ身仕度をしながら思った。

（スバル君とはロツポンドーヒルズにデートしに行つて以来だから今日はおもいつきり楽しんじゃうぞー！）

（ミソラちゃんとはロツポンドーヒルズにいつて以来だなー。今日は絶対いい思い出を作つて、最後はミソラちゃんに）

二人はそれぞれ思いながら玄関に向かった。そこにあかねがスバルとミソラを見送るため玄関の前に来て一言言つと二人は顔を真っ赤にさせた。

「二人とも！ 楽しいデートをね」

「い、行つてきまーす」

二人は顔を赤くしながら、勢いよく出ていった。

「うふふ」

あかねは勢い良く出ていった二人を見ながら微笑んでいた。

スバルとミソラは仲良く話ながら、ウェーブライナーの乗り場に向かっていった。すると、前方に三つの影が現れた。

「あら、二人仲良く何処に行くのかしら？」

そこにはルナ、キザマロ、ゴンタの三人組がいた。

久々のデート（後書き）

一応説明させていただきませう。

流星のロック

マン2をしたことのあるかたはわかると思いますが、スバルとミソラは前にロックポンドーヒルズに遊び（デート）に行っているのでのこのタイトルにしました。

お姫様抱っこ

スバルとミソラはベイサイドシティーの遊園地に向かう途中、ルナ、キザマロ、ゴンタの3人と偶然とはいえ運悪く遭遇してしまった。

「委員長!?!」

「ルナちゃん!?!」

二人はビククリしてしまった。

スバルは委員長のどす黒いオーラに怯え、ミソラはせっかくの二人っきりのデートなのにどうしようとしてそれぞれ恐怖や困惑していた。

「ミソラちゃん? よく見たら、いつもと違う服みたいだけど、2人で何処に行くのかしら?どこかにいくんだったら私達も今暇だから、一緒に付き合おうよ」

ルナはミソラに声は優しい口調で言うが、明らかにどす黒いオーラを放って言った。

「え、えーと、そのお〜」

ミソラはルナ達にどう言おうか悩んでいた。

それを見ていたスバルは何かを決心したように頷いて心の中で謝りながら言った。

「あー！ あそこ！（委員長達ごめん）」

スバルは突然大声を上げて何も無い空を指差すとルナ達は一瞬スバルが指す方向に向いてしまった。

（よし今だ！）

「ロック行くよ！」

「お、おい、スバル！？ ちょっと、ちょっと待！」

「トランスコード・シューティングスター・ロックマン！」

スバルはロックの返事を待たずロックマンに変身してミソラをお姫様抱っこしてウェーブロードに乗ってそのまま目的地に行ってしまった。

「キャ！？」

ミソラは当然の事ながら一瞬ビツクリした。スバルがまさか自分をお姫様抱っこして逃げるとは思わなかったからである。そのあと、ミソラは顔を少し赤くしながら、振り落とされないように、両手をスバルの首の後ろに回しながら目的地につくまで、身を委ねた。

一方ルナ達はというと、スバルに騙されたとは言え、みすみす逃げたことに腹をたてていた。

「ク、悔しいー！ まさかスバル君にやられるなんて、こっぴごうなったらあの二人を追い掛けるわよ！」

「でもどうやって、居場所を掴んで追い掛けるんですか？」

キザマロはルナの怒りが怖い余りなるべく声のトーンを落として、聞いた。

「あなた、なんのために自分のウィザードがいるの？ さっさとペディアを出してあの二人が何処に行ったか突き止めなさい！」

「は、はい！ わかりました！」

キザマロはルナの怒りに恐怖の余り、自分のウィザードであるペディアをウィザード・オンして、スバルがロックマンになっていった方向を計算させた。しばらくしてから、ペディアがキザマロに計算の結果を報告した。

「キザマロ君、ロックマンは99、6%の確率でベイサイドシティで最近オープンした遊園地に行っただと思われます。」

「でかしたわ！ さあ、あの二人を追い掛けるわよー！」

「おー！」

「おお」

ルナがペディアからスバル達が何処にいったか知ると後を追い掛けようと、キザマロとゴンタを引き連れていった。なにかわからないけど、委員長のためなら頑張るぜー！と気合いが入るゴンタと違ってキザマロは委員長怖すぎですと思ふあまり気合いがはいらないキザマロだった。

入場（前書き）

お久しぶりです。今回も短いです。ごめんなさい。

入場

ロックマンとなったスバルは目的地の近くまでくると、ウェーブロードから降りて人気のないところで電波変換を解除して溜め息をついた。

「ふうなんとか委員長達から逃げ切った。ミソラちゃん急にごめん・ね!？」

スバルはミソラの方に向きながら謝ろうと向いた瞬間ミソラの顔が眼と鼻の近くに来ていたことにビククリしてしまった。スバルは今の今まで委員長達から逃げるのに必死で無意識の内にミソラをお姫様抱っこしていたことに気付かなかったのだ。

スバルは慌ててミソラを優しく地面に足がつくように降ろした。

「ご、ごめん！ つい委員長達から逃げるためとはいえこんなことして本当にごめんなさい！」

スバルはミソラにそう言いながら頭を深々と下げた。それを見たミソラは微笑みながらスバルの両手を持ちながら言った。

「そんなに謝らなくていいよ。私は怒るところか逆に嬉しかったぐら이다よ。だからそんなにあやまらないでよ、ね！ さあ！ 早く

行こう！」

そう言うとミソラはスバルの手を引っ張って遊園地の入場出入口前までいった。二人は入場入口前までいき、その係員に入場券を手渡した。

すると、係員からあることを聞いて二人はビックリした。

「これは、招待券ですね。でしたらこれをお付けください。これはフリーパス用になります。これを付けている間は乗り物やアトラクションはご自由に何度でも入ることができますが、売店やレストランだけは別料金になります。ご注意ください！」

そういつて係員の人はスバルとミソラの左手にフリーパス用のプラスチックを巻いた。

二人は中に入ってしまった。

二人がなかに入って同じ頃ルナ、キザマロ、ゴンタが遊園地の前に到着した。

「さあ、早く入場券を買って二人を追うわよー！」

「は、はい...」

「おう！」

そして3人は券売機の方に並ぶのだった。

遊園地（前書き）

皆さんお久しぶりです

遊園地

「スバル君すごい人が多いねー！」

「そうだね！テレビやチラシ等で宣伝してたしね！」

スバルとミソラは中に入るなりその人掛かりやアトラクションや乗り物の多さにビックリした。

「ねえ？スバル君？私最初に乗りたい乗り物があるんだけど、いいかな？」

「もちろんだよ！早速行こうよ！」

「うん！」

二人はパンフレットを見ながらミソラの乗りたいところに行った。後でスバルが後悔するとは知らずに。

その頃ルナ達はまだ券売機の列に並んでいた。

「早く入場券を買っていかないとますます不安だわ！」

「でも、委員長あの行列でしかも看板には約1時間掛かるって書いてますよ！」

実際キザマロの言うとおり暑い中一人の男性が、【約一時間】と書いてある看板を持ちながら、

「ここから券を買うまで約一時間掛かります」と声が枯れるくらいまで言っていた。ルナとキザマロ苛々しながら待っているなか、ゴンは腹が減ったため近くの屋台で売ってる特大フランクフルトを食べていた時、ある人物達を一瞬だが、入り口に入るのを見かけた。「あれ？ あそこにいるのはクインティア先生とジャックとツカサじゃねえか？」

「ブロロオオン！ コーヴァスとヴァルゴとジュミニの気配がするから間違いないぜ！」

いきなりゴンのハンターV.Gから出てきたオックスが三体の気配を感じてゴンに言った。

「でも、なんであの三人がいるんだろう？」

「さあな？」

一人と一体には知る由もなかった。

遊園地（後書き）

続けてもう1話投稿します。

恐怖のジェットコースター！

【入口前】

入口前にはクインティアとジャックとツカサの3人がまるで何処かの基地に潜入する前に最後の打ち合わせをするみたいに話しをしていた。

「いい？ ジャックとツカサ君は中にいる奴らの妨害をするのよ！
私はあの人を止めるから！」

「おう！」

「わかりました！」

「それじゃあ、行動開始！」

「了解！」

3人は入口へと入っていった。

その頃スバルとミソラはミソラが先に乗りたいたと言っていたジエックトコースターの前に来ていた。

「早く行こう！ スバル君！」

「う、うん！」

二人はジエックトコースターの前に並んで自分達の番になるまで楽しく談笑をしていた。

その頃ルナとキザマロとゴンタはやっとの思いで入場券を買って中に入る事ができた。

「やっと入る事ができたわね あの二人は何処にいるのかしら？
こう人が多くちゃ見当たらないわね？」

「そうですね」

「こうなったら片っ端から探すわよ！ 行くわよ！ キザマロ！
ゴンタ！」

「はい！」

「おう！」

3人はスバルとミソラの2人を探し始めた。

その頃、スバルとミソラは自分達の番になって乗り物に乗り込んだところだった。（一番前の席）
マイクを持った定員がこの乗り物についての注意を言った。

「本日は当遊園地に起こし頂き誠にありがとうございます。 ジェットコースターに付きましては乗り物酔いをする方や薬を服用している方は誠に残念ですが、お客様の健康の安全面を第一と考えまして、ここから退場して頂いております。 また、それ以外のお客様に申

し上げます。このジェットコースターは二週いたしますが、一周するのに約30分かかりますので、耐えられない方はここで降りください」

それを聞いたスバルは青ざめた。

（一周ならまだしも、二週も？ しかも約一時間は掛かる 早く降りないと！）

スバルは降りようとするもミソラの手が先にスバルの手を繋いだ。

それにスバルは顔を青から赤に変わりこの場から逃げることを忘れてしまった。

「では大丈夫のようなので、安全装置を作動させますので、皆様は一時両手をあげてください」

係員の人がそういうとスバル達（乗っている人達も含む）は両手を挙げると安全バーがスバル達の膝のうえにカチャット降りてしつかりと固定された。

「それでは行ってらっしゃいませ」

そう定員が言うのと同時にベルがジリリと鳴って乗り物が動きだした。

そして上まで上っていくとそこで一時止まった。

そして遂に下に急降下したと同時にスバルとミソラは楽しい方の悲鳴と死にそうな悲鳴を上げた。

恐怖のジェットコースター！（後書き）

これまで全然投稿しなくて申し訳ありませんでした。またこんな調子になると思いますが、今後ともよろしくお願いします。

怖いお化け屋敷！？（前書き）

今回は早く投稿できました。
！

ではごっごー

怖〜いお化け屋敷!?

スバルとミソラはジェットコースターに乗り終わった後、スバルが軽い吐き気を感じたため近くのベンチに腰掛けていた。

「スバル君？ 大丈夫？」

「うん、まだ少し気持ち悪いけど大丈夫だよ」

「良かった！ でも無理したらダメだからもう少しゆっくりしてからいこつ？」

「うんありがとう!」

ミソラはスバルを心配して聞いてみたが、スバルはまだ軽く吐き気を感じながらもミソラを安心させようと笑顔を見せて言った。それにミソラも安心して二人は少ししてから次の場所に向かった。

(こゝ、ここは!?)

「今度は二人で手を繋いで入ろうね! スバル君!」

二人が着いた場所はお化け屋敷であった。

もちろんスバルはお化けは苦手で、ミソラはスバルが苦手なのを知っててスバルの手を繋ぐ。スバルの顔は青ざめながらもミソラに引っ張られているため嫌々中に入っていた。中に入るとスバルは早速びくついてしまったが、ミソラが握っている手を少し強めてから笑顔を見せながら言った。

「大丈夫だよスバル君! 私がついてるからね!」

スバルはミソラにそう言われてか、自分がミソラちゃんを守らないといけないのに逆に守ってもらうことに関して情けないと思ったのかわからないが、顔が真っ赤になった。そのためお化けの格好をした人が驚かしてもミソラは楽しそうに悲鳴を上げてスバルは顔が真っ赤になってたため何とか(悲鳴を辛うじてだすことなく)びびりながらも通ることができたのだ。そして出口から出てきた二人はまだ手を繋いでいるのを忘れて先程スバルとミソラを驚かせた

お化け達について話していた。

と、そこへアナウンスが鳴った。

ポンパンポン

ピン

「本日のご来店ありがとうございます 当遊園地では、お昼の1時30分よりレース会場にてカーレースを行います なお優勝したかたにはトロフィーと当遊園地からの素敵なプレゼントがございます どうぞ皆様ふるってご参加頂きますようお願い申し上げます」

ピンパンパンポン

それを聞いたミソラは興奮気味にスバルに言った。

「ねえ、スバル君？ 今の聞いたよね？ カーレースに優勝したら素敵なプレゼントがあるって！ 私達も早速参加しに行きましょう
！」

張り切るミソラにスバルは待ったをかける。

「ちょ、ちょっと待ってよミソラちゃん？ カーレースは1時30分からなんだし先にお昼にしようよ？ 今丁度12時だしカーレースまであと一時間半もあるしね！」

「うん！ そうだね！ じゃあ、あそこのレストランでなにか食べ

「よし？」

「うん！」

二人は近くのレストランに行こうとしたとき手を繋いでいることに初めて気付いた。

その瞬間顔を真っ赤にしてしまいスバルが手を話そうとすると、ミソラは逆に繋いでる手を少し強めてからスバルに言った。

「ね、ねえスバル君？ このままでいかない？」

「う、うんいいよ」

スバルはミソラに上目遣いに言われたため顔を赤くしながらも答えた。

そして二人は手を繋いだままレストランの方に言った。同時刻どこかの草むらでスバルとミソラが手を繋いでレストランの方に行くのを見ていた二つの人影があった。

「よし！ 二人がデートをしている決定的瞬間をとったぞ！」

「やったな！ 本社に持って帰れば俺達大手柄だ！ 早速帰って編集長に報告しよう！」

「ああ！ 全は急げだ！」

二人が撮ったフィルムとカメラを鞆の中になおそうとしたとき、小さな電撃が一瞬墜ちてきた。

その瞬間カメラとフィルムが駄目になってしまった。だが二人はきずかずにその場を去っていった。

二人がいた上空からはジユミニWとBがいた。

「ヒカル？ あれでよかったのかな？」

「多分な」

そう言うと二人は何処かへと行ってしまった。

カーレース

二人は近くのレストランで食事をした後、カーレースに参加するためレース会場に向かっていた。

「ミソラちゃん？ よくあれだけ食べれるね？」

スバルが感心しながら言うのも先程のレストランでスバルとミソラは和風スパゲッティを頼んだのだが、ミソラはそれだけではなく4色の色違いスパゲッティを注文したあと、店にあったデザートを全部頼んだためスバルはビックリしてウェイターさんが運んできた水を飲んでいるときに吐きそうになったほどだからだ。
因みに二人の分はスバルが出した。

「え〜そうかな？ スバル君が小食だからじゃないからかな？ でもおいしかったよ！ ご馳走様スバル君！」

「どういたしまして」

（それにしてもミソラちゃんのお腹の中って一体どうなっているんだろう？）

「あ！ スバル君！ レース会場に着いたよ。」

「あ、本当だ！ 早速受け付けに行つてエントリーしに行こう！」

「うん！」

二人はお昼を食べた話をしていたらいつの間にかレース会場の近くまで来ており2人は受け付けまで走っていった。

受け付けに行つてエントリーの申し込みをすると二人は番号が書いてあるゼッケンを渡されて中に入つていった。

その先には男子と女子の更衣室に別れていたので2人はそれぞれ一言言つて別れて入つた。

一時間後

「皆様大変お待たせいたしました。さてレースもいよいよ終わろうとしています。先程の予選で勝ちました10人によるラストバトルが開始されようとしています。ルールは簡単！今からこの10人にはこの遊園地内を一周してもらい先にゴールしたほうの優勝です！なお遊園地にいるお客様にはこのレースが終わる間だけ安全なところで待機してもらいます。何とぞご協力をお願い申し上げます。さてまず本選まで勝ち進んだ皆様にご入場していただきます。では大きな拍手でお迎えください。選手入場！」

司会者が言った瞬間大きな拍手が鳴り響くなか本選に勝ち進んだ10人が出てきた。そこにはレーサーの服を着てヘルメットを被つたスバルの姿も会つた。番号は5番だ。

因みにミノラは予選敗退で現在はスバルを応援するため会場の中にいる。

「さて全選手マシンに乗り込みました！ さあ行きますよ！ 皆さん！」

司会者がいい終わると同時に何処からか赤3つと緑1つのついてあるスタートランプが降りてきた。まず一つ目赤いランプが点灯すると会場からはスリーという声が二つ目がつくとツーと三つ目がつくとワンと最後の緑のランプがつくと同時に10台中9台がスタートしたと同時に会場からは、わあああー！ という声が上がった。

「各選手一斉にスタートしましたが9番の選手がスタートしてないどうしたことだー？ 今係員の人が見に行っていますので、その間スタートを切った各選手を見てみましょう。前から順にいきますと1番、3番、5番、10番、4番、2番、6番、8番、7番の順番です。ここでお知らせを申し上げます。いまだにスタート地点にいる9番の選手はマシントラブルのためリタイアとのことです。引き続きレースの実況をして参りましょう」

その頃、5番のマシンに乗っているスバルは1番と3番を抜かそうとしていたが、なかなか抜かす隙がなく少しずつ焦ってきた。

（くそ、さすが本選だとそれだけ手強い人達が集まってくるな！

レースも残り半分まできた！ あせるな星河スバル！ 必ずチャンスは訪れるはずだ！）

スバルが前にいる二台のマシンの隙を狙っていた。

だが、レースが終盤に差し掛かるとチャンスが出てきた。

カーブするときに3番の車が急ブレーキを掛けたのかスピードが落ちたのである。

（今だ！）

スバルはその隙を見逃さずに見事にカーブしながらドリフトして3番のマシンを抜かしたのである。

そして、残るは一直線に進むだけであった。

会場側

「おーっと！ 1番と5番の選手が接戦を繰り広げながらこのサーキット場に近づいています。果たして最初にゴールをして優勝を手にするのはどっちだー！」

とうとうゴールまで残り1kmになったところで1番と5番が横一列に並んだ。

それを会場で見ているミソラは一心にスバルの勝利を願っていた。

（頑張ってスバル君！）

「残り500mを切りましたー！ 300、100、50、さて優勝を手にするのはどっちだー！ ゴールイン！ なんと!? 1番と5番の選手がほぼ同時にゴールしました。スローモーションで再生して見てみましょう」

先程のゴールした瞬間がモニター画面にスローモーションで再生された。

「おーっと、これは!? 僅かに1番のマシンの先端がゴールに入っています。優勝は1番の選手です。おめでとーございます!」

ミソラはガツカリしたが、逆にスバルはいい勝負だったので顔が気持ちいいぐらいの笑顔だった。

1番のマシンからスバルと同じぐらいの小学生が降りてきてスバルの元に向かうと手を差し伸べて言った。

「いい勝負だったぜ！ またお手合せ願いたいものだな」

「僕のほうこそ今度勝負する時は絶対勝つ!」

そう言うとスバルも手を差し伸べてお互い握手した。その瞬間会場からはワァーという声と同時に大きな握手が沸き起こった。

そのあと続々とマシンが入ってきた。

ここで順位を説明しとくと、一位が1番、二位が5番、三位が3番、四位が8番、五位が7番、六位が2番、七位が4番、八位が10番、最後が6番だ。

なお9番の選手はマシントラブルのためリタイアしたのでこの試合からは退場した形になったため、9人の選手しかない。

ピンポンパンポン

「選手の皆様にお知らせします。お疲れのところ申し訳ございませんが、このあと、受賞式を行いますので5分後そのまま格好でお越しください」

ピンポンパンポン

その5分後受賞式が行われた。

一番上の真中の台には1番のゼッケンを着た男の子、真中から右の台には5番のゼッケンを着たスバル、真中から左には3番のゼッケンを着たスバルと一緒に年齢ぐらいの女の子が立っていた。

因みに四位、九位の人達はそれぞれ決められたところに立たされている。

そして、司会者がマイクを持ってスバルたちの前に出た。

「これから受賞式をはじめたいと思います。まず三位の人から順に名前と一言感想をそれぞれ言ってもらいたいと思います。では三位の方からどうぞ！」

司会者がその女の子にマイクを手渡すと少し緊張気味に話した。

「私の名前は月島唯です。今回は三位という結果でしたが、楽しかったです」

そついで終わると会場からは拍手が響きわたった。司会者が唯という少女からマイクを受け取った。

「続きましては一位の子と接戦を繰り広げ惜しくも二位になった方どうぞ！」

そう言われるとスバルはマイクを渡された。

「ぼ、僕の名前は星河スバルです」

そついうと会場がざわめきだした。

「星河スバルって地球を救ったロックマ

ンじゃないのー」

「嘘ー！」

「マジでー！」

とか色んな声が飛び交ったがスバルは無視して感想を一言いった。

「僕は結果二位だったけど、最後まで楽しめました。」

そついで終わるといつの間にかガヤガヤが治まって拍手が喝采した。

そして司会者がスバルからマイクを受け取ると話した。

「最後に優勝した方に話してもらいましょう！」

そつうって司会者がマイクを男の子に渡した。

「俺の名前は林田トドロはーです。今回は星河君と接戦だったため一位をとれたのは運が良かったとしか言い様がありません。でも俺もこのような貴重な経験が出来たことを嬉しく思っています。会場の皆さんここでレースをした9人の応援してくださってありがとうございます。一同の代表としてお礼申し上げます。どうもありがとうございました！」

そういうと同時に頭を下げると会場からは拍手が響いた。司会者が林田トドロからマイクを受け取ると話しだした

「はい！ どうもありがとうございます。それでは見事優勝した林田トドロ君に優勝トロフィーとプレゼントととして入場券無料チケット一年分を差し上げたいと思います！」

そういうと20代前半のレースクイーンの人が商品とトロフィーを渡す際に優勝おめでとうと言って頬に祝福のキスをした。当然トドロは顔が真っ赤になり会場からはオオー！と言う声が上がった。

「これにて受賞式を終わりたいと思います。皆様最後にこの9人に盛大な拍手を！」

そして拍手が喝采しているなか9人の選手達は退場して言った。

その頃、今だにスバルとミソラを探しているはずのルナとキザマロとゴンタは、ルナが

「せっかく遊園地に来たんだからスバル君達を探しながら楽しみましょ」

と言ったため3人はジェットコースターに乗っていた。

ぬいぐるみをとる！（前書き）

タイトルは適当です。　ごめんなさい。

ぬいぐるみをとる！

「はあく疲れた」

「お疲れ様スバル君！」

今スバルとミソラは次のアトラクションを何処にしようか悩みながら歩いていった。

「それにしてもあと一歩だったのにな」

「しょうがないよ。あれは運がなかったただけだし！」

「なんかミソラちゃん？ 僕が負けたことに喜んでない？」

「そ、そんなことないよ。私は勝ち負け関係なしにただ楽しかったから笑顔なんだよ」

（と言うのは言い訳で本当はもしスバル君が一位をとってたらあのレースクイーンの人に頬にとはいえキスされるのが嫌だったからなんて絶対に言えないよ。）

「そういえば、ミソラちゃん予選敗退だったよね？ 丁度あそこに乗り物に乗りながら渡されたレーザー銃で出てくる物の怪やそのボスを倒して総合点が2人ペア3万点で素敵なぬいぐるみをプレゼントトしてみたいだから2人で挑戦してみない？」

「うん！」

そういつて2人はシューティングバスターズというアトラクションにいった。

意外と混んでいなかったためすぐに順番が廻ってきた。

係員の人が（アトラクション用の）レーザー銃を2人に渡して簡単な説明をして2人は乗り物に乗り込んだ。

「ではいつてらっしゃいませ！」

係員がそういつてお辞儀をすると乗り物が出発した。中に入って十秒もたたないうちに物の怪がでてきた。2人はでてきた物の怪をレーザー銃でどんどん倒していった。そして最後の親玉を乗り物が出口に出る前に倒してボーナス点を取って乗り物から降りる際にレーザー銃を係員に返却して総合点が現れるボードを見た。

結果は三万二千点！

そして、見事総合点を獲得した2人はぬいぐるみを選んだ。

そしてミソラが選んだピンク色の可愛らしい熊のぬいぐるみを選らんでその場を出た。時刻は夕方の6時になろうとしていた。

「ねえ、スバル君？ そろそろ日が沈むね？」

「うん、そうだね」

「明日からしごとだな。いつまた学校に行けるんだろう?」

丁度1週間前にミソラはスバルの家に引っ越しをするためわずか1週間の休みをもらったのだが、明日から仕事なのである。

悲しそうな顔をするミソラを見てそこでスバルはあることを提案した。

「そうだ! ミソラちゃん? 最後に観覧車に乗らない?」

「え? うんいいよ!」

ミソラは一瞬驚いたがすぐにスバルの提案に了承した。そして二人は観覧車に向かっていった。

スバルとミソラが仲良く観覧車が向かっていく姿を1人のカメラマンらしき人が二人を(盗撮)撮っていた。

(よし! あの2人に着いていけば、衝撃的シーンがとれるかもしれない! そうしたら自分は一気にただのカメラマンから編集長に出世できるのも夢じゃないぞ!

それにして
もあの情報はガセネタじゃなかったな!まさか地球を救った英雄のロッキーマンこと星河スバルと超国民的人気シンガーソングライター

響ミソラの二人がデートをしてたなんてな！
こうしちゃいられない早くあの2人を追わないと！)

そしてカメラを持った怪しげな男性が二人の跡を追おとしたとき、いきなり一人の少年に勢いよくぶつかつた瞬間近くにあつた池に転げ落ちてしまった。

「いたたたたた、なんだ？ 一体？」

男の人がそういいながら池からはいあがつて辺りをキョロキョロと探したが、ぶつかつてきた少年は何処にもいなかった。

だがその男はぶつかつてきた少年に対する怒りよりも写真のフィルムに収めてあつたものを見ながら青ざめた。(しまったー！ せつかくの証拠のフィルムが台無しだー！ しかも半分ガセネタだと思つてたから写真を一つしか持ってきてなかったし、使い捨てカメラを買うにも池の中に財布を落としてしまった！ どうしよう…)

それをウェーブロードから見る電波人間がいた。

背中に黒い翼が生えている電波人間はジャック・コーヴァスである。ジャックはさっきの男性に当たつたとき、わざと池に転がり落ちるようにあたり素早くコーヴァスと電波変換したのだ。

そして、ジャックは慌てふためくその男性をみたあと、一瞬ニヤツと笑つと何処かへいった。

場所は変わって、その頃ルナ達はスバル達を探しながら遊園地を楽しんでいた。

「そろそろ、日が暮れるわね?」

「委員長今日は諦めて、明日学校でスバル君達に問い詰めてはいかがでしょうか?」

「俺もその意見に賛成だぜ! それに腹が減ってきたしよ!」

上からルナ、キザマロ、ゴンタが言うと、ルナは少し考えた素振りをしてやがて諦めたように言った。

「それもそうね。明日学校でスバル君に今日のことを聞き出すとして、あなた達最後に観覧車に乗りに行かない? 夕陽に照らされた町並みを見て帰りましょう?」

「それはいい考えです!」

「早速乗りに行こうぜ!」

そして、3人は観覧車へと向かった。
スバルの運命や如何に?

告白

スバルとミソラは観覧車の前に来ていた。
乗る直前に突然ウォーロックがウィザード・オンしてハープを呼び出した。

「おいハープ！　なんか俺に用事があったんじゃないか？」

「へ？　あ、ああ、そうだったわ！　ミソラ悪いんだけど、私とこのバカは大事な用があるからちよつと出かけてくるわね？」

ハープは一瞬気の抜けた返事をしたが、ウォーロックのすることを数秒で理解してウォーロックを挑発するように言った。

「だれがバカだと！　チツまあいい。　さつさといくぞ」

そういつて、二体の電波体はそれぞれの相棒にエールを送った。

「がんばれよスバル！」

「頑張つてねミソラ！」

二人はその言葉を聞いて顔が少し赤くなった。

そして、ゴンドラに乗った二人を乗せてゆつくりと上へとあがっていった。2人はむかいあうように座って無言でゴンドラから見える綺麗な夕焼けを見ていた。

ふと、スバルがミソラのほうにむくとつい見惚れてしまった。
（普段のミソラちゃんも可愛いけど、夕陽を眺めてるミソラちゃんの顔もかわいいなあ〜）

ミソラはスバルの視線に気付いたのかスバルの方にむいた。

「どうしたの？ スバル君？ ボーとしちゃって？」

「え、い、いやなんでもないよ」

そういうと、慌てて夕日の方にむいた。それを見たミソラはクスツと笑い夕日の方にむいてるスバルに話し掛けた。

「ねえ、スバル君？ 私達が会ったときのこと覚えてる？ あの日私がママの為に歌を歌っているときにスバル君があ展望台に来たんだよ！」

スバルはミソラの方に顔をむけながら初めて会ったときのことを懐かしんでいた。

「僕はその時はまだ孤独から抜け出せなくて展望台にいったんだ！。そしたら初めてミソラちゃんと会ったんだよね？」

「あの頃、私は前のマネージャーにお金の為に歌うように強制されて正直うんざりしてたの。そんな時、私はFM星からきたハーブと一緒に私とママの歌を守るため人々を傷つけはじめたの。その時、ロックマンとなってスバル君が私を止めてくれて私は自分が何故歌を歌うのかそれを知るため一時期引退ライブをやってそのあと、スバル君とブラザーを結んだんだよね？」

「うん！ それからいろんな敵と戦って平和を取り戻して今みんな

と楽しく過ごしているんだよ!」

2人は初めて会ったときの事から今まで会ったときの事を思い返し
ながら話していた。

そして、二人が乗っているゴンドラが真ん中に到着するとゴンドラ
が突然止まった。

するとアナウンスが流れてきた。

「お客様に申し上げます。只今機械が原因不明により止まってしま
いました。早急に動かすようにいたしますので危険ですのでそのま
ま座ってお待ちください」

二人はその放送を聞いたあと同時に思った。

(今しかチャンスはない!)

「あ、あのさミソラちゃん」

「あ、あのねスバル君」

「え?」

「先にミソラちゃんからいいなよ!」

「いや、スバル君から言つてよ!」

「いや、ミソラちゃんから!」

「いや、スバル君から！」

「そう？　だったら悪いけど、僕から言わせてもらおうよ」

そういつてスバルは一回深呼吸をして真剣な眼でミソラを見た。真剣な眼で見ってくるスバルを見てミソラは一瞬ドキツとした。

「僕は最初ミソラちゃんのおかげで自分の殻から抜け出せて感謝してたんだ！」

「感謝？」

スバルはうんと頷いて話した。

「ミソラちゃんと会ってブラザーバンドを結んだのがきっかけで学校に行くようになったんだ。だからミソラちゃんにはすごく感謝してるんだ。もしミソラちゃんが困ったことがあったらブラザーとして力になってあげたいと思ってたんだ。でもいつしか僕は、ミソラちゃんの事を一人の男として守ってあげたくなったんだ！」

「そ、それって!？」

スバルは立ち上がって姿勢をピシッと正してまっすぐにミソラを見た。

ミソラも座りながらもまっすぐとスバルを見て次に出てくる言葉を静かにまっした。

「僕はミソラちゃんの事が好きです。　付き合ってください！」

返事（前書き）

久々に二話連続更新です。

返事

「僕はミソラちゃんの事が好きです。付き合ってください！」

今先ほどスバルがミソラに告白したところだった。ミソラは頭を下げて自分に告白している少年を見ていった。

「ス、スバル君頭を上げてよ。その返事をする前に私の話を聞いて！」

スバルは顔を真っ赤にしながらも顔を上げてミソラの話聞くことにした。

「私だってスバル君に感謝してるよ。初めてだった！私と似たような孤独を持った人がいるなんて！私とスバル君がブラザーバンドを結ぶ時にスバル君からブラザーバンドを結んでほしいって言われたときは凄く嬉しかった。だって何があってもスバル君とブラザーバンドを結んでいるかぎり絶対一人じゃないって信じてるから！」

スバルは何もいわないで静かに聞く。

ミソラは次に言うことを少し顔を赤らめながら言った。

「私はスバル君と初めてブラザーバンドを結んだときから好きでした。」

私でよかったですら付き合ってください！お願いします！」

そう言いながらミソラも頭を下げた。

スバルの返事は

「もちろん！ それとミソラちゃんの返事を聞いてもいいかな？」

スバルが顔を真っ赤にしながら聞くとミソラも顔を真っ赤にしながら、

「私のほうこそよろしくお願いします！」

そして夕焼けで照らしていた2つの影が一つになった。それを上空で見上げる電波体が二体優しく見守っていた。

「さて、機械を動かしますか？」

「そうね。あの二人の為とはいえ他のお客さんにも迷惑を掛けちゃったしね！」

そう言うと、二体はどこかにいった後観覧車が動き始めた。

だが、スバルとミソラにはまだ難関が待ち構えているのであった。

その頃、一人の男性が左手で望遠鏡をもってスバルとミソラの乗っている観覧車を見てもう片方にはトランシーバーのような物を持っていた。

「よくやった！ アシッドこっちに戻ってこい！」

だが、トランシーバーから意外な答えが帰ってきた。

「残念ですがシドウ！ 捕まってしまいました…」

その言葉を聞いてシドウという22、3ぐらいの男性はハア〜と溜め息をついた。(と、いうことはやっぱり…)

「見つけたわよ！ シドウ観念しなさい！」

シドウの前にクインティアが立っていた。

シドウとクインティア（前書き）

お久しぶりです。

投稿を遅れて申し訳ございません。

シドウとクインティア

とある遊園地の前でトランシーバーを持っている男性と髪の長く顔は美人で、でも（ジャックに言わせると）怒ったら鬼のように怖い女性がお互い対峙するようにむきあっていた。

「見つけたわよ！ シドウ！」

暁シドウは溜め息をハアと吐いた。

シドウは元ディーラーの潜入工員としてディーラーにいた。

その時、クインティアと知り合いお互い愛しあうようになった。

だが、シドウはディーラーの長であるキングがメテオGのノイズを利用して、世界征服を企むことを知りディーラーを裏切る際にクインティアにも一緒にと誘ったがクインティアには弟のジャックと共にやらねばならないことがあると行って別れた。

そして、ディーラーによるNAXA日本支部襲撃の時に2人はその場で再会したが、お互いの思いがすれ違ったために2人は戦うしかなかった。

そして、運命の日が訪れたサテラポリス遊撃隊によるディーラーの本拠地を襲撃した時、ディーラーの右腕的存在だったジョーカーがシドウと共に爆死したのだが、シドウは相棒の電波体アシッドの助けにより南の島の孤島シーサーアイランドに飛ばされ、その管理者であるストロングに助けられそこで療養生活を送っていた。そのあと、体は順調に回復していき、嬉しいことに電波変換したときに体に負担がかかるため短時間しかできなかったが、ヨイリー博士が電波変換したときでも、体に負担がかからないようにしてくれたためシドウは一番の悩みの種であったのがなくなったため、自由に電波変換ができるようになった。そのあと、シドウはサテラポリスに身柄を拘束されていたジャックとクインティアをサテラポリス遊撃

隊長の権限で自分が保護者になるという条件付きで二人を引き取った。

そのあと、二人がディーラーと深く関わりがあったという証拠書類などをすべてシドウが一人で極秘に処理をして二人をサテラポリス遊撃隊に入れた。(ジャックだけは知らない間に入っていたことに怒っていたいう。)

今はクインティアとジャックはシドウの家で暮らしている。

「ティアどうしたんだい？　こんなところに来て？　もしかして、俺とデートしたくて遊園地の中を探していたのかい？　君が俺のことをそこまで思ってくれているなんて、嬉しいかぎりだよ！」

そう言っつてシドウはわざとらしくクインティアに言った。

「ええ！　とつても会いたかったからずっと探していたわよ。でも、あなたとデートをしたくて探してたんじゃないの。期待させてごめんなさい」

そう謝りながら顔は笑っていたが口が全然笑っていなかった。

「そりゃ残念だな。俺になんの用なんだい？」

「あらとぼけるの？　素直に吐いたほうが良くてよシドウ？」

「そうは言ってもいったい何のことかわからないけどなー？」

そう言っつてシドウは何故か懐に入れてたうまい棒のチーズ味をサクサクと食べはじめた。

それを見たクインティアはフツと笑って懐からある書類を出しながら言った。

「シドウこれに見覚えはないかしら？」

「そ、それは!？」

シドウはクインティアから書類を見せられた時、思わず食べていたうまい棒を落としてしまった。

なんとそれはシドウの机の中にあつたマル秘計画書であつた。

その内容はスバルとミソラがデートの内容であつた。

「これはどこにあつたかあなたが一番ご存じのはずよね？ スバル君とミソラちゃんのデートを観察するだけでなくデートシーンを盗撮するなんて立派な犯罪よ！ 本当ならあなたをこのままサテラポリスに突き出してもいいんだけど、理由に寄つたら許してあげるわ！」

クインティアはそういいながらシドウに詰め寄つた。シドウはやれやれと溜め息をついてティアになら言っつてもいいかなと思ひ本当のことを話した。

「あゝ実はな、丁度1ヶ月前に大悟さんからこんなお願いをされたんだよ。」

1ヶ月前シドウがNAXAでうまい棒食べながら仕事をしていた時、大悟がシドウの元に来てあるお願いをしにきた。「シドウ君？ 忙しいところすまないが少し相談があるのだが？」

「何でしょうか？」

そう言つて二人は屋上に行った。

「実はな息子のスバルが結構学校でもてるんだよな。さすが俺の自慢の息子だぜ！」

(いや、貴方がロックマンの正体をばらしたからじゃないですか？)

そう思うシドウを無視して大悟はどんどん話を進めていく。

「それで相談と言うのは、スバルは目立つのがいやみたいなんだよ！ いまは別にいいんだが、将来俺と一緒に宇宙飛行士になるんだつたらマスコミから騒がれても堂々といられるようにしてほしいんだよ。俺も機会があつたらスバルを一人の男として鍛えるからシドウ君も協力してくれないか？ 頼む！」

そう言いながら大悟が頭を下げた。

「頭を上げてください。分かりました！ 機会があつたら必ずスバルを一人前の男にしてみせます！」

「ありがとうシドウ君！ 二人でスバルを一人前の男にしようではないか？」

「はい！ 頑張りましょう大悟さん！」

そして二人は堅い握手をした。

「と、いうわけなんだ」

今まで話を話を聞いていたクインティアが口を開いた。

「大体の事情はわかったわ。でも、スバル君達のデートの情報はどこから手に入れたのかしら？」

「ああ、それは、丁度1週間前に大悟さんがスバルとミソラがこの遊園地に行くようにしといたからって教えてくれたんだ！」

「なるほど、それであるの二人の情報をマスコミに流したのね？」

「まあ、な。それで、これから俺をどうするんだい？ サテラポリス遊撃隊の副隊長さん？」

因みに捕捉とていうと、クインティアはサテラポリス遊撃隊の副隊長になっている。

「とりあえず私と一緒に来てもらおうかしら？」

そう言いながら、クインティアはシドウの腕に抱きつくようにしがみついた。

「出来たらスバル君達をどこから盗撮したか教えてくれないかしら？」

それを聞いたシドウはニカッと笑ってクインティアと一緒に時間ぎりぎりまで遊園地を楽しんだのは言うまでもない。

その頃遊園地上空のウェーブロードでは、シドウの相棒のアシッドとジュミニBとWとジャック・コーバアスがシドウとクインティアのやりとりを見ていた。

「あれ？ クインティア先生と暁さんって人がどこかにいつちやうね？ もしかしてデートかな？」

「もしかしなくてもそうだろ。ツカサとりあえずこのアシッドという電波体はどうするんだ？」

「どうしようか？ 取り合えず例のビデオテープは回収したし、ジヤックあとはクインティア先生に任せて帰ろうか？」

「ああ、そうだな！」

（シドウの奴、帰ったらただじゃおかないからな！）

そしてジユミニBとWとジャック・コーバアスはアシッドを連れその場を去った。

その頃、スバルとミソラは観覧車から降りた後、ルナ、キザマロ、ゴンタに見つかり二人は三人に囲まれている形になっていた。

二度目の・・・！？

今スバルとミソラはルナ、ゴンタ、キザマロ（委員長長軍団）に囲まれていた。

「やっと、見付けたわよ！ スバル君！ ミソラちゃん！」とルナ

「観念してください二人とも！」とキザマロ

「おいスバル！ お前を見付けるのに苦労したんだぞ！ 罰として今度特盛り牛丼おこれよな！」とやや話が脱線しているゴンタの三人がそれぞれ言葉を発した。

「ま、まだ付けてきてたの？ていうかどうしてこの場所がわかったの？」

その三人に対しスバルが青ざめながら言った。

すると、ルナがふつと笑ってキザマロのハンターから（勝手に）ペディアを出しながらいった。

「キザマロのペディアのおかげよ！ ペディアが貴方がロックマン様になって行った方向を計算してくれたからここにすることがわかったのよ」

それを聞いたスバルは顔を真っ青にするだけでなく背中から冷や汗が流れてきた。

今まで黙って聞いていたミソラが口を開いた。

「私達を見つけるなんて凄いわね。でもわかっているのかな？
ルナちゃん達私達に用事が会ってきたんならともかく、用もないのに追い掛けてきたんならそれはただのストーカーだよ？」

(ミ、ミソラちゃん！？なんてことを！！)

「な、なんですって~~~~~!!」

「~~~~~ひい~~~~~」

ミソラが笑顔で発した言葉はルナの怒りを最大限にあげる(まるで爆弾を投下するのと一緒ぐらいの一撃の)言葉を発した。

周りにいたスバル、ゴンタ、キザマロはお互いの肩を抱き合いながらルナの顔が鬼とした顔をブルブルと震えながら見ていた。

「なんで私が貴方たちの後を着けたと思っているの？ただ、私は皆で行ったら楽しいから一緒に行こうって言ったのに貴方たちはそれには答えずに勝手にどこかにいったからでしょうが！」

「な〜んだそうだったんだ！でもさ、そんなこと私達を追い掛けるよりキザマロ君とゴンタ君と三人で遊んで明日私達に学校でその事を言えばいいんじゃないの？」

「そ、それはス、スバル君には明日にでも言えるけど、あなたには言えないじゃない！ 明日から仕事のためしばらく学校には来れないでしょ？ だから！ 私は貴方たちを追い掛けて来たんじゃないの？ それにキザマロとゴンタは遊ぶことよりも一言スバル君にいつてやりたいっていったのよ。 ねえ？ そのおふたりさん？」

そう言いながら黒いオーラを放ちながら笑顔でキザマロとゴンタの二人を見た。二人はビクツとしながら、顔を縦に何度も振った。

「そう言うことね。確かに私は明日から仕事だから皆と学校に行

く事が少なくなるけど、でもスバル君には明日学校で今日なんで質問にこたえないで逃げたか聞けばいいんじゃないかな？ ね？ スバル君」

キザマロとゴンタ同様ガタガタ震えながら見ていたスバルはいきなり話を振られてハイ！と答えてしまった。

それにより、ミソラは上機嫌になりルナの方は怒りを込めてスバルを睨んだ。

睨まれたスバルはこれ以上はやばいと思い、意を決して（足下を震わせながら）前に出て委員長の前に出た。

キザマロとゴンタ同様ガタガタ震えながら見ていたスバルはいきなり話を振られてハイ！と答えてしまった。それにより、ミソラは上機嫌になりルナの方は怒りを込めてスバルを睨んだ。

睨まれたスバルはこれ以上はやばいと思い、意を決して（足下を震わせながら）前に出て委員長とミソラの間に入りながらハンターを構えた。

4人はスバルが何をするのかと見ていたら突然ハンターを天に掲げると、「トランスコード・シューティングスター・ロックマン」そういった次の瞬間一瞬青い閃光に包まれ

たスバルは青き流星のロックマンになった。

「バトルカード！ タイフーンダンス！」

「「キヤ！」」

「「うわあ〜！」」

ロックマンがタイフーンダンスのカードを使うと辺りは強い強風が吹き一瞬だが皆（ロックマン以外）強い強風で目をつぶった。その隙にミソラを素早く抱えてウェーブロードに乗って逃走した。そして強風が納まった頃にはスバルとミソラの姿はなかった。

「スバル君！ 明日学校ですべて吐いてもらいますからねー！」

ルナは既にその場にはいないスバルにめがけて思いっきり叫んだ。

その頃、無事？ ルナたちから逃げたスバルは明日は覚悟しないと
思うのだった。

玄関先で

スバルはミソラを抱えたまま家に着いた後、玄関の前で電波変換を解除した。

その時、スバル達の後ろから足音が聞こえたためスバル達は足音の方に振り向いた。(まだミソラはスバルに抱き抱えられてるためスバルが振り向いた時に、自然と振り向いた形になった。)

二人が振り向いた先には仕事からの帰りなのか驚いた顔の大悟がいた。

「ス、スバル！ どうしたんだ一体？」

「ど、どうしたって今から家に入ろうとしたんだけど？」

「入るのはいいが、とりあえずミソラちゃんを降ろしてからにしろ！」

「え？」

スバルは大悟に言われて初めてまだミソラを抱き抱えているのに気付いて慌ててミソラを優しく降ろした。

「ご、ごめんねミソラちゃん。また忘れてて」

「別にいいよ」

「また？」

「父さんには別に関係ないよ。とりあえず早く家に入ろう」

そう言つてスバル、ミソラ、大吾の順番に入った。

ただ、大悟だけはスバルがミソラに謝つたときに、気になった言葉があつたがそれは夕食の時に知ることになる。

ベツト共有（前書き）

お久しぶりです。投稿が遅くなって真に申し訳ございません。

ベット共有

今スバルはミソラと2人でスバルの部屋にいた。

「たく、ただ委員長達から逃げるためにミソラちゃんを抱き抱えただけなのに何で母さんはあんなこというんだらう?」

「まあまあ、でも“今”のスバル君は絶対そんなことをしないって信じてるから機嫌を直してよ。ね!」

「なんか気になることいわれたけど、ミソラちゃんがそういうなら」

話を遡ることあれば夕飯の時、スバル、ミソラ、大悟、あかねが四人で楽しく食事をしていた時だった。すると大悟が突然玄関先でスバルがミソラを抱き抱えたまま家の前にいた話をしだした。

それを聞いたあかねは口元をニヤニヤしながら、鰯の照り焼きを口に入れてるスバルとコップに入っているお茶を飲もうとしている大悟と丁度一番先に食べ終わった後、食べた食器を洗い場に持つていつてるミソラの3人に爆弾発言をした。

「でも残念だったわねー。大悟さんがそこにいなかったら、そのまま二人でベットまで行ってあんなことやこんなことができたのね!」

「!?!」

「ブーーーーー」

ガシャン!

上から順に説明するとスバルは鯽の照り焼きを思わず呑み込んでしまったため胸をドンドンと叩いていて、大悟は飲んでいたお茶を盛大に吹き出すは、さらにミソラは台所に持っ^てていこうとした食器を落として何枚か割^ってしまった。

あかねは慌ててミソラに大丈夫？　といいながら、割れた食器を片付けた。だがミソラは何か金縛りにあ^ったかのように棒たちになり先程あかねが言ったことが何回も頭の中で竜巻のように回転してしま^っているためあかねの大丈夫？　という言葉も聞こえてい^なかった。スバルは大吾に貰^ったコップを一気に飲んでハア、ハアと息を切^らしていたが、やがて大きく息を吸^うように深呼吸をして落ち着^いた。

それを見た大悟はホツとしてあかねの方に振り替^えると丁度割れた食器の破片を箒と塵取りを使って発泡スチロールの箱に入れてるところだ^った。

「あかね！　いくらなんでもからかうにも限度と言^うものがあるぞ！　それにスバルは喉を詰^まらせるわミソラは皿を落^してまだ固ま^ってるしで少しは限度と言^うもの^を考える！」

「言^ったらどうい^う反応をするのかちよ^っと試^してみた^かつたの。

「ご免^なさいね」

といいながらあかねは片目をつぶりながら舌をペロツと出した。その後まだ固ま^っているミソラを軽く揺^さぶりながら言^った。

「ミソラちゃん？　御免^ね。　冗談だから気にしないで」

「は！」

ミソラはあかねの言葉でようやく現実へと戻ってきた。

「皿を割ってしまって、ご免なさい！」

ミソラはあかねに頭を下げて謝ってから欠片を踏まないように気を付けながらスバルの部屋に逃げるようにしてしまった。

「母さんがあんなことを言うから、喉を詰まらせたじゃないか！」

そう言ってスバルも食器を台所に持って行ってからミソラを追うように自身も部屋にいつってしまった。

それを見届けたあかねはフツツと笑って思うのだった。

(これからは少し気を付けながら、あの二人をからかおうかしらね？)

そして今にいたるわけだ。あのあと二人は先程のあかねの発言を忘れて、今日行った遊園地の事を楽しく話していた。二人

が話をしているとあかねが下から「お風呂湧いたからどちらか先に風呂に入りなさい」と言う声を聞いて、ミソラ、スバルの順番に入った。そして夜、ここからスバルにとってなかなか眠れない日々が続くとはスバル本人は知る由もなかっただろう。

「ミソラちゃん？ そろそろ11時前だし寝ようか？」

「うん…。 そうだね…。 明日からまた仕事でスバル君やルナちゃんとかゴンタ君にキザマ口君やツカサ君やジャック君達と一緒に学校に行くことができないんだよね…。」

スバルはミソラが悲しそうな顔で言ってるのを見て心が少しズキツとなった。 そんな時、ミソラがなにかを思ったのか又は思いついたのかスバルにあるお願いをした。

「ねえスバル君？ お願いがあるんだけどいいかな？」

「何？ ミソラちゃん？」

その時、ミソラは若干頬を赤らめながら言った。

「スバル君のベッドで寝ていいかな？」

「え？ 別にいいけどじゃあ僕は布団で寝るから」

「違う違うそうじゃなくて！」

「え？ そういつことじゃないの？」

スバルはミソラの言いたいことがわからずに首を傾げた。
ミソラは大きく深呼吸してから頬をさらに赤く染めながら言った。

「だから」スバル君と一緒に寝たいの！」

「ああ、なんだ僕と一緒にってえええええー！」

スバルはミソラからのビックリ発言により叫んだあと、脳が一瞬停止した状態になった。

直ぐにスバルは脳を再起動させて顔を真っ赤にしながら猛反対した。

「だ、だめだよそんなこと！」

ミソラはスバルが当然の反応をするのを予想してたのか直ぐに涙目（演技）になりながらスバルに聞き返した。

「なんで駄目なの？ 私達今日やっと告白出来て付き合っことになったのにそれぐらい別にいいでしょスバル君？」

「うっ！」

（ヤバイどうしょ？ ミソラちゃん今にも泣きそうだよ。ただ僕の理性がどこまで持つかわからないし、何より理性が切れた瞬間、朝になってミソラちゃんを傷つけたなんてなったら社会的にも僕自身も明日がなくなってしまう。どうしよう？）

スバルはミソラの涙目が演技だとは気付かずにさらに動揺してしま
った。

そこに助け船（スバルにとっては命運が尽きたような感じで）ミソ
ラの布団を持ってきたあかねが言った。

「あら？　そう言うことなら今日からミソラちゃんの布団はいらな
いわね？　良かったわねスバル！　これからスバルは大好きな人と
一緒に寝れるんだから　それにしても二人が付き合いはじめたな
んて母さんうれしいわ！　大吾さんにも報告しなくっちゃ」

あかねはそう言って持ってきた布団をそのまま抱き抱えて鼻歌をし
ながらいってしまった。

「どっしょよっ…？」

スバルは完全に退路を立たされて顔が赤から青に変わった。

とそこへ二体の電波体がウィザード・オンしてスバルの前に現れた。

「おいスバル！　一緒に寝るだけなんだからグダグダ言っな！」

「そうよ！　男ならスパーツといきなさい！」

上からウォーロックとハーブの順番にいった。

「ただ一緒に寝るだけなのに、やっぱりスバル君は私と一緒にいるのが嫌なんだ…。ヒック！ ウェエエーン！」

止めのミソラの泣き（うそ泣きだが）それを見てスバルは慌ててミソラに近いて観念したように言葉を発した。

「わ、わかったから。ミソラちゃん？ だから泣き止んで。ね？」

「本当に一緒に寝てくれる？」

「うん！ いいよ！」

「じゃあ早く寝よう！ あれからもう30分たってるよ！ 早く早く！」

「あ、ちょっとミソラちゃん？」

ミソラは嘘泣きをやめると満面の笑みでスバルを引っ張ってベットの方に言った。

「ふ〜やれやれ。これでやっと眠れるぜ！」

そういうとウォーロックはスリープモードになった。ハープは二人がベットに潜ったのを見届けてから電気を消しにいった。

「じゃあお二人さん電気を消すわよ」

「うん。　　いいよハープ！」

「それじゃお休みなさい。　二人ともいい夢を」

「うん。　　お休みハープ」

「お休みなさい」

上からハープ、ミソラ、ハープ、スバル、ミソラの順に言った。ハープは電気を消してミソラのハンターに戻ってウォーロックと同じくスリープモードになった。

そして二人は天上を見上げるように寝ていた。

と、そこにいきなりミソラがスバルの手を握ってきた。

「ミ、ミソラちゃん？」

スバルはビククリして顔を真っ赤に染めてミソラを見た。

だがミソラからはスーサーという規則正しい寝息だけしか返ってこなかった。

だがスバルは手を繋がれただけで真夜中の2時まで眠れなかったの

であつた。

ンフフフフ！

どこかのウェーブロードや普通の電腦世界とは違うところ…そうそこは二百年前まで裏インターネットに繋がるバグの塊かたまりが至るところにあつた場所に一人の不気味な男いや電波人間がいた。

黒い帽子を被り右手にはマジシャンが使うような黒いステッキを持つており故か所々破れているマントを羽織つていて口癖は「ンフフフ」んという誰が聞いても気持ち悪い男が一つの棺ひつぎの前に立っていた。

「ンフフフフ。これで二百年前のヒーローとその仲間たちにより封印されし者、そう電腦の破壊神と恐れられた者を再び復活させることができる！」

そういうと彼は懐から黒いオーラみたいなので覆われているピラミッドの形をした物を棺の真上にかがけて叫んだ。

「二百年前に恐れられし破壊神よ！ 古代より伝わるムーの魂たましいを吸収し今再びこの世に復活したまえー！」

彼がそう高々に叫ぶとピラミッドの形をした物の中から黒い塊かたまりが棺の中に吸収されていくと少しずつ棺がカタカタと音を立ててやがてやがて棺のなかに黒い塊かたまりが全て入るとゆっくりと棺の蓋がひとりにて外されそこから全体に黒いマントとどす黒いオーラに覆われた者が現れた。

「我は電腦の破壊神フォルテ！ 貴様か？ 我の封印を解いた者は

「？」

そういって、彼は口元ニヤニヤさせながら答えた。

「ソフフフフ！　そうです。　貴方様の封印を解いたのはこの私です」

「まず、貴様は何者だ？　何故私の封印を解いた？」

「私の名前はファントムブラックと申します。　以後お見知りおきを。　そして貴方様の封印を解いた訳は私の壮大な計画とある人物の抹殺、その手助けを頼もうと思ひましてね」

ファントムブラックとはファントムとハイドという男が電波変換した姿なのである。　彼は元々飢え死にしかけて

いたのを当時ムーの力で支配しようとしたドクターオリヒメに助けられ、それ以降彼はオリヒメと共に行動していたのだが、ある時、ロックマンとブライとの鬪いに負けたため、オリヒメから見捨てられたのである。それ以来虎視眈々とロックマンに復讐するチャンスが来るのを狙っていたのである。

「それで私の封印を解いたのか？　フツ…まあいいだろ。　せつかく封印を解いてくれたのだ！　私も封印した奴らに死をもって恐怖とドン底の淵ふちに叩き落としてやるとするか？」

「ソフフフフ！　残念ながらそれはできない！」

「なんだと？」

「ソフフフフ！　その理由は貴方様を封印した奴らはすでにもうこ

の世界をどこに探してもいないからですよ!」

「な…んだと!？」

フォルテは事実を突き付けられて驚愕したが、次の瞬間笑いだしたのだ。

「ん？ なにが可笑しいのです？」

ファントムブラックは何故フォルテが突然笑いだしたのが聞いた。フォルテは笑いながら答えた。

「ハツハツハツハツハ！ これが笑わずにいられるか？ 二百年も間に奴らは消えもう我は奴らに封印されることがないのだから！ またこれで我はいや電腦の破壊神である俺は世界最強の者になるだろう！ ハツハツハツハツハ！」

「ソフフフフ！ 確かにあの者達がいなくなったらもう貴方様を封印される心配もない！ たった一人を除いてね！」

「なに!？ 俺を封印できるほどの力持った奴がいるのか？」

「ソフフフフ！ その通りでございます。その者の名はロックマン！」

「なにロックマンだと!? どういうことだ? この時代にもロック…む! 何者かがここに近づいているな?」

フォルテのこの言葉にファントムブラックは慌ててしまう。

「クツ! 奴め! ここまで追い掛けてくるとはしつこい奴だ!」

それを聞いたフォルテは左手にエネルギーを集中させてなにもないところに放つと別の空間が出来た。

その光景を見て驚いているファントムブラックにフォルテは入るように促した。そして二人が入るとその空間が閉じ何もないただ空間だけになった。そこに紫色のバイザーをして胸にはムーの文字がきざまれ体のまわりには紫色のオーラを放つ右手にはギザギザの形をしたソードを持っていた電波人間が現れた。

「チツ! 一足遅かったか!」

そついうと彼はどこかえと消えていった。

これは星河スバルとその仲間達が繰り広げる新たな闘いプロローグ(序章)であったのだ。

ンフフフフ！（後書き）

近々バトルに突入します。上手く描写出来るかわかりませんが、
一杯やらせて戴きます。

それでも全然駄目だったらごめんなさい。

ハイドからの呼び出し状（前書き）

なんとか来年までにとうとうこつできたあー。（半泣）
ではどつど！

ハイドからの呼び出し状

「スバルの部屋」

AM8:00

ピピピピピピピピピピ というアラーム音がスバルの部屋になった。

スバルは布団に潜った状態でアラームを止めるとまたそのまま夢の世界に旅立とうとした。

だが1分後、

「スバル君朝だよ。起きなさい！ じゃないとまた委員長に怒られちゃうよ！」

スバルはビックリして起きてから辺りを見渡した。

それは何故か？ 答えは簡単突然ミソラの声が聞こえたからである。ウォーロックは辺りをキョロキョロと見ているスバルにククツと笑いながら話した。

「ようやく起きたか？ ミソラの声がしてはつとなつただらう？」

因みにミソラは朝早くから仕事でいないからな。わかったら早く飯食って学校に行きな！

じゃないとまたあの女にお説教を食らうことになるぜ！（最も昨日の事について聞かれると思うがな！ ま、俺には関係ないがな）」

スバルは布団から出て着替えながら先程から疑問に思っていることをウォーロックに聞いた。

「ねえ？ ロック？ この目覚まし時計って家にはなかったけど、ミソラちゃんが持ってきたのかな？」

「ああ。詳しくは知らねえがヨイリーの婆さんに作って貰ったみたいだぜ。理由は知らねえかな」

「ふん」

そういつてスバルは下に降りていくとタイミング良くあかねがテーブルの上に朝御飯であるトーストとハムエッグとキャベツの中央にプチトマトの盛り合わせであるサラダが置かれているところだった。あかねはスバルが起きたのを確認すると手を休めずにいった。

「あら、おはようスバル。今日は早いよね。」

もしかして、ミソラちゃんと付き合うようになったから早起きの習慣がついたのかしら？」

「え！？なんで僕とミソラちゃんが付き合ってるのを知ってるの？もしかしてミソラちゃんが言ったの？」

スバルはビクリしてあかねに聞くと、あかねはフフフと笑いながらいった。

「あら、昨日ミソラちゃんがいったじゃない。
それに母親としても二人が付き合ってくれるなんて大いに賛成しち
やうわ。」

ゆくゆく二人はけー」

「あ~~~~~そ、そうだったね！ 早く食べて行こうつと！
委員長達を待たせるわけにはいかないしね」

スバルは言うが早く物の数分で朝御飯をたべて洗顔歯磨きなどして
二階にあがったと思ったら鞆をもって玄関から外に出ていく際に行
つてきますと一言声をかけて出ていった。

「あらあら、あんなに急いで出ていなくてもいいのに。 恐らく
私の推理では学校についたとたん、大半の女の子達から質問攻めに
あい星河スバルの運命が決まってしまうだろうって、推理ドラマの
観すぎね。」

時間わつと・・・大変！？あと30分でパートの時間だわ。
早く準備していかなくちゃ！」

そういつてあかねはいそいそとパートに行く準備をするのだった。
ここで捕捉説明をするとあかねは大悟が帰ってきてからパートをや
めようと思ったのだが、大吾から「せっかくパートで知り合った人
がいるんだからやめずに続けたらどうだ？」といわれたあかねは大

悟さんらしいなと思いつながらパートをやめることをあきらめかわりにパートにいく時間と日にちを短縮してもらったのだった。話を戻そう、一方のスバルはと言うとみんなと合流したのだが、朝日おはようSON^{さん}というテレビ番組の突撃取材の攻撃？ を受けていた。何故こうなったかと言うとスバルは珍しくツカサの次に到着して、その数分後にルナとジャックが来て、さらに三十秒ぐらい後にキザマロとゴンタが来て学校に向かって出発したのだが、校門前でいきなり一人の女性が手にマイクを持ってカメラマンと数人の人をたずさえてスバルの前に突撃取材をできて現在にいたるわけである。

「おはようございます。私朝日おはようSON^{さん}のリポーターの大田と申します。」

星河スバル君ですね？」

「え？ あ、はいそうです。」

でも取材ちよつとー」

「ええ。わかっています。例の件は取材してはいけないことになっているのは承知しています」

スバルはディーラーの起こしたメテオGの取材はできないと言おうとしたら大田が知っていると知りスバルはホツとし、では何の用か尋ねることにした。

「じゃあ一体なんの取材ですか？」

「朝、響ミソラちゃんが朝日おはようSONと言つ番組に出たのをご存知ですか？」

スバルは知らないと言つ前にルナが答えた。

「ええ。 朝六時からやつてる番組ですよね？
私、毎朝みていますの」

「ええ！ そのとおりです。 毎朝見て戴きありがとうございます」

大田はルナに感謝の言葉を述べた。
それを聞いたスバル達はビックリしてジャックがルナに聞いた。

「お前いつも何時に起きてるんだよ？」

「学校がある日は六時前に起きて、それ以外は七時に起きてるわ」

皆はまたもやビックリした。

(僕はいつも時間ぎりぎりにロックに起こしてもらってるからとてもそんな真似が出来ないや)

(さすが委員長です。
僕なんか七時半ですからね)

(やっぱり委員長って凄いぜ！)

(ク、俺なんかいつも七時に起きるといっのにこのドリル頭は六時前って一体何者だ?)

(さすが委員長だね。
僕なんか早くて六時半だからね)

上からスバル、キザマロ、ゴンタ、ジャック、ツカサがそれぞれ思った。

大田が先程の続きを話そうとゴホンと咳払いして話しはじめた。

「それでミソラちゃんに色々と質問していたらある発言をしまして、そのことについてスバル君に取材しようと思ってきました」

そのことをスバル達(ルナを除く)は一体何なんだろうと思っていた。
た。

「そうそう、それでスバル君に学校で聞くことと思ってたのよね。」

後昨日の事も含めてね」

スバルはルナからその言葉を聞いて昨日の事を思い出し恐怖した。大田はそれをしっぺかしらさずかスバルに単刀直入に聞いてきた。

「あなたは響ミソラさんと付き合っているのは本当ですか？」

「!？」

「な!？」

「何だと!！」

その言葉を聞いた瞬間、スバルはビククリしたショックで言葉が出ず、ゴンタとキザマロは大田の爆弾発言にビククリした。大田はそんなことも構いなしでもう一度尋ねた。

「もう一度尋ねます。

あなたはミソラちゃんと付き合ってますね？」

「はい！」

スバルは今度は正直に速答で答えた。

正直に答えた理由は嘘をついてミソラを泣かせたくなかったから。そんなスバルに構わず大田は次の質問をした。

「いつ、どこで、どのように告白なされたんでしょうか？」

「それはー」

「ちょっと待ってください！」

スバルが答える前にツカサが突然喋りだした。皆がびっくりしてツカサの方に向いた。

「もうすぐで授業が始まるので取材はここまでにしてもらえませんか？」

「ええ、そうですね。」

そのことについてはまた日を改めてということでもよろしいでしょうか？」

大田の意見にスバルはいいですよと答えた。

大田は一礼して去っていった。

そのあと、スバル達が教室にはいった瞬間一斉にスバルの方を見て確認すると（おもに女子達）が一斉にスバルを取り囲んで質問攻めにした。

実はほとんどの女性人は朝やっていた朝日おはようSONさんと言う番組を観ていたとはさすがのスバルもビックリせざるを得なかった。そのあと、スバルは担任の育田が来るまで生き地獄をあげわうことになった。だが女子達の質問の中にミソラちゃんと付き合っているのかという質問を聞いた男子達（ジャック、ツカサを除く）が昼休み食事を済んだスバルを取り囲み殺気を込めた質問が昼休みが終わるまで始まったのだ。

（放課後）

スバルは帰る準備を済ませてルナ達と帰ろうとすると突然ウォーロックがスバルに話し掛けてきた。

「おい、スバルメールだ」

「誰からだろう？」

スバルがメールを見るとその内容はスバルとウォーロックを呆れさせる内容だった。

『親愛なる星河スバル君へ！

今日こそ君に復習を果たそうと思っている。

今日の四時に展望台にて待っている。

なお来なかった場合は無関係な人が傷つくということをお忘れなく！

ンフフフフ!』

「はあ~~~~~」

メールを読んだ一人と一体は盛大に溜息をついた。

「ハイドって本当にしつこいね」

「ああ、今度こそ俺の爪でけちよんけちよんに切り裂いてやる！
そして二度とこんな悪ふざけが出来ないように一生、刑務所にたたき込んでやる！」

「うんそうだね。」

それじゃあ、一回家に鞆を置いてからいこうか？」

「ああ！ 今度こそ奴との闘いを終わらせてやる!」

そのあと、スバルはルナ達に今日は用事があるから一緒に帰れないからと断り、電波変換して家に帰っていった。

この時スバルには長い長い闘いが待っているとは予想もできなかっただろう。

ハイドからの呼び出し状（後書き）

今年も今日でお終いですね。

長かったような短かったような一年でした。

来年もこんな調子ですが何卒よろしくお願いします。

フォルテ(前書き)

明けましておめでとつごいませす。

こんな調子ですが今年もどつぞよろしくお願い致します。

それではどつぞ！

フォルテ

スバルは家に帰った後、すぐ鞆を置いて展望台に向かった。

〈展望台〉

スバルが展望台に着くと黒い帽子を被り右手には杖を持って口元をにやりとした男性がいた。

スバルはその男性を見つけるとゆっくりと歩き男との距離が約10メートルのところだとまった。

そしてウォーロックがウィザード・オンして二人と一体は静かに睨み合った。

するとにやついていた男性が口元をフツと動かし喋りだした。

「久しぶりだな星河スバル、いやロックマン!!」

「なんの用だハイド!」

男いやハイドはスバルにそういわれると怒りを露にして喋りだした。

「わかっているだろう? 貴様が私の完璧な演出を駄目にしただけでなく一番信頼されてた方から裏切られ私の最高の脚本いや人生そのものを狂わせたのだ!

貴様には死と恐怖を持って私のシナリオ（脚本）どつりに死んでもらわないと気が済まないんだよ！」

その言葉を聞きウォーロックが怒鳴り返した。

「おい！ この脚本家野郎！ お前が俺達を恨むのはお門違いってもんだぜ！

お前の人生が壊れた原因はお前自身が壊したせいだろうが！ 今日こそお前を捕まえて二度と悪事ができないようにしてやるから覚悟しやがれ！」

それをきいたハイドは高らかに笑った。

「ハツハツハツハツハツハツハ！」

この私を捕まえる？
可笑しなことをいう。

私かわざわざ何も用意せず貴様等呼び出したと思うか？」

「なに？ それはどついうことだ？」

スバルがハイドの言葉に疑問の声をかけるとハイド指をパチン！とならすとハイドの隣に体全体を黒いマントで覆ったフォルテがスツと現れ両目をギリリと光らせてスバルを睨んだ。

スバルは一瞬恐怖を抱いて一歩後退したが、すぐに足を踏ん張るようにしてフォルテのプレッシャーに対抗するようにフォルテ

を睨み返した。

「ハイド！ 隣にいるのは一体誰だ？」

「ソフフフフ！ ご紹介しましょう彼はー」

「待て！ 自己紹介くらい自分でする！」ハイドはフォルテの事を教えようとしたが、その前にフォルテがハイドを止めて自分で言うと言い出した。ハイドは口元をにやりとしてフォルテに言った。

「ソフフフフ！ わかりました。

それでは私はこの辺で失礼します。

ロックマンくれぐれもこの方の機嫌を損ねないように。

じゃないと貴方とはここでお別れになりますので。

それでは失礼！ 電波変換！！」

「あ、待て！」

スバルが待つように言うがハイドは電波変換してファントム・ブラツクとなりマントを翻した瞬間、ファントム・ブラツクの姿は闇に消えるように姿を消した。そしてこの場にはスバルとフォルテの二人だけになり辺りは静寂だけが支配していた。

その静寂のなかフォルテがその静寂を切り裂くように話した。

「フツ奴はいつたか。」

改めて自己紹介をしよう。俺の名はフォルテ！ 二百年前電腦の破壊神と恐れられたものだ！」

「二百年前の電腦の破壊神フォルテ・・・それが何故今になって蘇ったんだ？」

スバルはフォルテの名前を聞いただけで冷や汗が出てきた。

「蘇った？ ふん違うな！俺は二百年前のロックマンとその仲間たちによって電腦世界の奥深く封印されたのだ！」

「封印された？ でもなんで…ま、まさか！？」

スバルは何故フォルテが今頃になって封印から蘇ったのか考えると近くにハイドがいたことによりその謎がすぐにわかってきた。

「そつだ！ あいつに封印を解いてもらったのだ！ だが俺を封印をしたロックマン達はもういない。」

だが今のロックマンがいると聞き貴様の腕を知りたくなつたのだ。俺と戦え！ さもなくば貴様が戦う意思を見せるまでこの町に住んでいる住人が巻き込まれることになるぞ！」

そうフォルテが脅してきた。

「わかった！　いくよロック！」

「オウ！」

スバルはウォーロックの返事を聞くとハンターV.Gを天高く掲げた。

「シューティングスター・ロックマン」

そしてスバルはロックマンとなりフォルテを睨みながらバスターを構えた。

「いくぞフォルテ！　ウェーブバトル・ライド・オンー！！」
「こいー！」

フォルテ（後書き）

次回はロックマンVSフォルテです。

上手く戦闘シーン（描写）ができるかわかりませんが頑張ってください。
ますのでよろしくお願い致します。

V S フォルテ（前書き）

大変遅くなり申し訳ございません。

初めてのバトルシーンでしたのでなるべく分かりやすく描こうと思
い試行錯誤しながらやりました。
ではどうぞ

V S フォルテ

「いくぞ！ バトルカード、ソード！」

ロックマンは右手をソードに変えてフォルテに突っ込んだ。
フォルテは動かずにただ左手を出しただけだった。

「ダークソード！」

フォルテの左手が黒いソードの姿に変わった。

「ハア！」

ロックマンがソードでフォルテに切り掛かるとフォルテはロックマンのソードと相対するように防いぐとカキン！ という鈍い音がした。後二人は競り合う形に刃をになった。

「フツ、貴様の腕とはその程度か？」

「まだまだこれからだ！」

ロックマンは後ろにジャンプしてフォルテから離れて新たなバトル

カードを使った。

「バトルカード、マッドバルカン！」

ロックマンの右手がソードから一気に何十発も連射ができるバルカンに変わってフォルテに標準をセットして発射した。

フォルテは避ける動作もせずただ、ロックマンの攻撃を受けるだけでフォルテのまわりに砂塵が舞った。

「やったか？」

「いやまだだ！」

砂塵が晴れるとそこにはスバルの言うとおり無傷のフォルテがその場にいた。

「フン！ その程度か？」

「クー！」

「フン！ お前に取って置きを見せてやるぜ！」

「フツ面白い、ではとくと拝ませてもらおうか？ 取って置きとやらを？」

「お望みとあらば見せてやるぜ！　いくぜスバル！　ファイナルライズだ！！」

ウォーロックがスバルにファイナルライズをするようにいったがロツクマンは変身どころか、身動き一つしなかった。
ウォーロックは不思議に思いスバルに聞いた。

「どうしたスバル？」

「実は今、WAXAのヨイリー博士にエースBGMを預けててファイナルライズが出来ないんだ」

「な、なんだとー！」

ウォーロックはその言葉を聞いて驚愕した。

「チツ仕方ねえ！　バトルフォルダから強力な奴を選んでやるしかねえ！」

（なんでよりによってヨイリーの婆さんに預けてんだよ！）

「うん！　バトルカードデストロイミサイル！」

ロックマンはギガクラスカードであるデストロイミサイルを使った。するとフォルテの周りを何百発というミサイルが着弾して再び砂塵が舞い上がった。

「これでどうだ！」

ロックマンは警戒心を解かないまま砂塵が晴れるのを待った。だが砂塵が晴れたときに観た光景は先程マッドバルカンを撃った後と同じく無傷のフォルテがそこにはいた。

「ふん。あれぐらいのミサイル等わざわざ避けずともこのダークソードですべて切り裂いてやった！」

「な、なんだとあのミサイルをすべて切っただと!？」

「くそ！」

ウォーロックとスバルはフォルテにむかって放たれたミサイルをすべて切り伏せた事に驚きを隠せなかった。

「貴様の力はこの程度だったとはガツカリだ。今度はこちらからいくぞ！」

そういうとフォルテはダークソードをロックマンにむけると周波数

変換して一瞬の内にロックマンの前に現れた。

「は、速い!？」

フォルテはダークソードでロックマンに切り付けるがロックマンもソードで応戦しようとしたが…

バキ! という音がしてロックマンのソードが折れてそのままロックマンは切り付けられそのまま後ろに吹っ飛ばされてしまった。

「くそ! 大丈夫かスバル？」

「うん! なんとか」

ロックマンは立ち上がるうとしたが目の前にフォルテが現れ首を掴まれながら無理矢理持ち上げられてしまった。

「フン! やはり貴様はその程度だったか死ね!」

(クツ! ファイナルライズさえ出来たら!)

フォルテがダークソードをロックマンの喉元にゆっくり突き付けた。

「死ね！」

そういうとフォルテはロックマンをダークソードで貫こうとしたが、できなかった。

フォルテのダークソードが折れてしまったからだ。

「誰だ？ 邪魔をしたのは？」

フォルテはロックマンを投げ飛ばして顔だけを少し右にむけるとそこには胸にムーの紋章をつけ、ラプラスソードを持ったブライがいた。

少しブライの説明をするとブライとはムー人の末裔であるソロが電波変換した姿である。

彼はとある村で生まれたのだが、小さな時から村の子達から虐めにあっていた。しかしその度に父母に助けられていたが、三歳の時、父親は隣の村まで食料を買いに行ったのだが、そのまま神隠しにあったかのように戻ってこず、一年後には母親が病に倒れてそのまま帰らぬ人になった。

村の子達はソロに親がいなくなった事を知るとまた虐めだしついは大人までもがソロを痛め付けた後、村を追い出したのである。

ソロはその後なんとか一人で暮らしていこうとしたがどこに行っても理由をつけられて虐められる始末にあいやがてソロは誰も信用しなくなっていた。そのあと、ソロはとある寺で偶然にも父親の名前の書いてある墓を見つけて住職に父親の経緯を聞いたら、食料を求めて隣村までいったが、断わられさらにその先の町までいこうと

したが、途中嵐により大木が折れてその下敷きとなり通り掛かりの人によりここまで連れてこられたが、看病するも亡くなってしまったためこの寺に埋葬したという。住職はその時、持ってきた荷物に父親の形見である古代のスターキヤリアを渡された。彼は父親の墓前の前で手を合わせ住職に礼をいってその場を去った。その後、ソロは生まれ育った村にいった。当然村人達は彼に対して冷たい視線を放つただけでなくまたいつものように痛めつけてやろうと桑や棒等を持ってソロにゆっくりと輪を囲んで詰め寄った。彼は口元をニヤリとした後叫んだ。

「電波変換！ ソロ、オン、エア！」

彼はブライとなりその力で村人達にいままでの仕打ちを返すかのように村人のほとんどに重軽傷を追わせて村自体を潰した。

村の人達はその後、彼に懇願を求めた。

だが、彼は自分に助けを求める人達を見て悟った。

彼らはいざというときは仲間だった人々と助け合おうとはせず、自分だけ助かれば良いと思っ

群れているのを見ると虫酸むしずが走るのだと。彼は助けを求める村人を無視してどこかへと去っていった。

そのあと、ソロはどこで自分の事を知ったのか知らないオリヒメにムー大陸の復活の為、ムー人として力を貸してくれといわれ協力してロックマンとはオーパーツを巡って何度か闘ってりしていたが、オリヒメが自分を利用したと知るとオリヒメから離反した。

そのあと、彼はメテオGの時に一時的にロックマンに協力したりFM星をブラックホールで吸い込もうとするブラックホール管理者のシリウスからムーメタルを取り返そうとしていた時、FM星を救おうとしていたロックマンと闘ったりとロックマンとは何かしら因縁がある。

彼はそれを天の決めた宿命であると感じていたのだ。

話しを戻そう。

今彼いやブライはフォルテと睨み合いながら対峙していた。

「貴様がムーの秘術で甦った奴か？」

「そうだ！　だがそこに転がっている奴にもいったが、俺は甦ったのではなく封印から目覚めたのだ！」

「ふん！　そんなのは関係ない！　ただ貴様がムーの秘術を使ったかどうかだ！　封印を解かれたやそこに転がっている奴にいったの関係ない！」

（僕ってなんで扱いがひどいんだろ）

スバルはバトル中に不謹慎？　にもフォルテとブライの「転がっている奴」という言葉にちょっと傷ついた。

「それではこの俺に何の用だ？」

「ムーの秘術で復活した貴様を倒す！」

「よかろう。　来い！」

ブライはラプラスソードを構えフォルテは新たにダークソードをだしてお互い構えた。

そして二人は同時に駆け出し刃と刃が交わり合う。

二人は鏝競り合いになるかと思いきやフォルテはもう片方の手で黒いオーラを作りブライの足元めがけて放つが、ブライは一瞬早く気付いてフォルテから離れるとその場で大爆発が起こる。

煙が晴れるとフォルテの姿は何処にもなかった。

ブライはラプラスソードの構えを解いてロックマンに後ろ姿を見せながら言った。

「チツ！ 逃がしたか…まあいい」

「あのブライ？ 助けてくれてありがとう」

ブライはロックマンの方に振り返って言った。

「貴様を助けたわけじゃない。

それにフォルテとか言う奴を捜して倒したら次は貴様の番だ！ 覚えておけ！」

そういうとブライはどこかにいってしまった。

「ケツ！ 相変わらずいけすかない奴だぜ！」

「まあまあロック。

でもフォルテとか言う奴は強かった。

次の休みの日にWAXAについてヨイリー博士のところにいこう」

「ああ、そうだな。

今日はもう疲れたから帰ろうぜ？」

「うん」

そういうとロックマンは家に帰っていった。

だがこの一部始終を見ていたロックマン達よりも背が高くサンゲラスのようなものを掛けている電波体がいたことに誰も気づかなかった。

「……………」

その電波体はどこかえと消えていった。

V Sフォルテ（後書き）

正直バトルシーンはこれで良かったのかすごく不安です。

もしよろしければ感想欄に悪いところとここが駄目だと教えてください。

良くて書き直し最悪もう一度（この話だけですが）最初から書き直します。

お母さん

スバルがハイドの呼び出しにより展望台に向かっている頃、星河邸では今しがた今日の仕事を終わらせたミソラが帰宅していた。

「ただいま」

「ミソラちゃんお帰りなさい。

今夕飯の準備しているからその間にお風呂に入ってきたら？」

「はい、ありがとうございます！　ところでスバル君は？」

ミソラはスバルが何処にいるのかを聞いた。
あかねはいたずらっぽく笑って答えた。

「あのこならまだ帰ってきてないわよ。
もしかして二人で入りたいの？」

ミソラはその言葉を聞いて慌てて答えた。

「い、いえ違います！　スバル君に話しがあつたので何処にいるのかなと思っただけです。決して一緒に入りたかったわけじゃないで

す！」

あかねはフフツと笑って答えた

「冗談よ冗談」

（本当にミソラちゃんはからかいがあるわ〜）

「あ〜私も夕飯手伝っていいですか？」

ミソラは話題を反らそうと自ら夕飯の手伝いを申し出たがこれが返ってとんでもないからかいを受けることになる。

「あら？ 愛しい旦那様の為に少し%ミソラはついあかねにその先に待つ未来がそうであったらいいなと思いついて話してしまい否定すら出来なくなった。

「さて未来の旦那さまにの為に未来の妻が腕に寄りを掛けて造りましょう？」

「はい／＼／」

もはやミソラは顔を真っ赤にしながらかねの問いに答えるだけだ

った。

黙々と料理を造り（一人は鼻歌を歌いもう一人は顔を真っ赤にしながらの作業）30分後には全ての料理を造り終えた二人はリビングへ行きソファに座った。

そしてあかねはミソラの顔を見て喋りだした。

「ミソラちゃん？」

「はい何ですか？」

「ミソラちゃんにお願いがあるんだけどいいかしら？」

「はい！ いいですよ！ スバル君のお母様には大変お世話になってますので」

「それじゃあ、これから私のことをお母さんと呼んでくれるかしら？ もちろん敬語もなしでね？」

「え？ でも…」

「あ！ もちろん無理ならいいのよ。」

「ごめんなさい。」

「ミソラちゃん今の言葉忘れて」

あかねがミソラに慌てていってからソファから立ち上がりかけたとき、あかねの手にミソラはそっと握ってきた。あかねは少し驚きをしたもののすぐに優しい顔になりソファに座り直した。

「…お母さん」

ミソラがそう呼ぶとあかねはミソラをやさしく抱いた。

「ありがとうミソラちゃん。いままでハーブちゃんと二人だけで辛かったでしょう。でも、これからはハーブちゃんだけじゃなくて、私や大悟さん、スバルにロック君がいる。

これからは私達にうーんと甘えていいのよ」

「うーうん、ありがとう…お母さん」

そういつとミソラはあかねにしがみついて泣き出した。

(ミソラちゃん、これからはお母さんに甘えられなかった分まで甘えてね)

あかねはそう思いながらミソラの頭を優しく撫でた。それを見てい

たハーブは心の底からあかねに感謝した。

（ありがとうあかねさん。良かったわねミソラ）

その30分後ミソラとあかねはTVを見ながら、本当の母娘ははいのよう
に楽しく談笑していた。

スバルが帰ってくるのはさらに30分が経ってからである。

ウォーロックとハーブ（前書き）

もう一話行進してました。ではどうぞ！

ウォーロックとハーブ

スバルはフォルテに殺されかけたところをプライに助けられ家にくたくたになりながら家に帰った。
家に着くと電波変換を解いて玄関のドアを開けた。

「ただいま」

「あら、お帰りなさい」

「お帰りスバル君」

あかねとミソラはスバルが帰ってきたと知ると玄関まで出迎えた。
スバルは出迎えを受けて中に入りあかねから夕飯の食べる前にお風呂に入るように言われミソラとスバルは交替で入った。
その時、ハーブとウォーロックは勝手に大吾の部屋にいき今日のことを話していた。

「なるほどね。」

貴方達がそんな強敵と闘っていたなんてね」

「ああ、奴は並の奴じゃない。それに二百年前のヒーローもてこずってみたいだしな」

「それにしてもハイドとかいう人も困った人ね」

「ああ、あの脚本化野郎のせいでもんでもない奴が現われたもんぜ。ハープわかってると思うがな」

「ええ、そんな危険な奴にミソラは闘わせないわ！
実は強力な電波を感じてたけど、ミソラにいったら必ず行くと言いだすと思ったから黙ってたわ」

「ああ、そのほうが助かる。
それと、さっきの話しを同じように大悟にもして、土曜日はスバルが学校が休みだからその日にWAXAについてヨイリーの婆さん達にも話しに行ってくるぜ！」

「ロックWAXAに行くのはいいけど、日曜日にしなさい！」

「あん？　なんでだ？」

「な・ん・で・も！　いいわね！！！」

「お、おうわかった…！」

ウォーロックはハーブの凄い形相に冷や汗を流しながら了承した。

「じ、じゃあ俺はスバルのハンターV.Gに戻るとするか？」

「私もそうしようかしら？」

二体はそれぞれのハンターV.Gに戻っていった。

ミソラの手料理はいかが？

スバルとミソラとあかねは夕飯を食べていた。

今日の夕飯のメニューは大根サラダにハンバーグに魚の赤だしだに豆腐だった。スバルはそれらのものを食べていつもの味とは違う味に気が付いた。

「ねえ？ この赤だしとハンバーグいつもとちょっと味が変わってない？」

スバルがそう聞くとあかねが答えた。

「あら？ よく気が付いたわね！ このハンバーグと赤だしはミソラちゃんが作ってくれたのよ！」

「ど、どうかな？」

ミソラはスバルにこの味が美味いかどうか凄く不安になりながら聞いた。

「すっごくおいしいよー！」

もうこんなに美味しいのが食べれるんだったら毎日作ってほしいぐ

らいだよ！」

「よかったわね？ スバルがあそこまで気に入ってくれるなんてね？」

「う、うん／＼ ありがとうスバル君／＼」

スバルが誉めるとミソラは頬を染めながらスバルにお礼をいった。

三人が食事を終えた頃、大吾が帰ってきて大吾もミソラの手料理を褒めるとミソラは再び頬を染めながらお礼を言ったのは言うまでもない。

ミソラと一緒にTV（テレビ）出演！？「本番前」（前書き）

お久しぶりです。

色々と忙しくて更新できませんでした。

本当に申し訳ございません。

「ミソラと一緒にＴＶ（テレビ）出演！？」本番前」

スバルとミソラは夕飯を食べた後、スバル、ミソラと交代で風呂に入り、今度身体中がポカポカさせて、頬をほんのりと赤くさせたミソラが可愛らしいピンクの熊の着ぐるみパジャマでスバルの部屋に入ってきた。

スバルはミソラのパジャマ姿にポーツと見惚れていた。

ミソラはスバルに見られているのに対しもともとお風呂上がりもあつて頬がほんのりと赤かったのがさらに赤みを増していきながらもスバルに用件を伝えようと少し声のボリュームを上げた。

「ね、ねえ、スバル君にお願いがあるんだけどいいかな？」

「え？ あ、うん、なにお願いって？」スバルはミソラの声で現実に戻されたことにより声がどもりながらもミソラに返事を返した。

「今度の土曜日に私と一緒にオクダマスタジオに来てほしいの？」

「うん。別にいいけど、でも何で？」

「とりあえずその日にオクダマスタジオにいったらわかるからお願いー！」

ミソラは両手を合わせてスバルにお願いした。

「うん。わかったよ！」

（でもなんでだろうそこに言ったら究極の決断を迫られるような気がするんだけど…）

スバルは返事を返ししながらそんなことを思っていた。彼の勘はあながち間違っていないのだが…。

日は飛んで土曜日の朝AM7:15

スバルのベットからもぞもぞと音がした。

起きたのはスバル・・・ではなくミソラのほうだった。

（読者の方は当然わかるように）2人は付き合い始めた日から同じ布団で寝るようになった。

当然スバルは今だに慣れなくてミソラが寝てから2、3時間後に寝るといふ日常を繰り返している。

「ふわ～あ。さて、スバル君を起こそうかな？」

スバル君もう朝だよ！起きて？」

そう言いながらまだ寝ているスバルを揺すりながら起こす・・・がスバルは今だに寝ていた。

ミソラは声のトーンと揺さ振る力を少し強めながらスバルを再度起こすように言った。

「スバル君起きてよ！」

今日はオクダマスタジオと一緒に行くって言うてくれたでしょ？」

「うん。 え？ オクダマスタジオ？ あ！ そうだった！ ごめんミソラちゃん。 うっかり寝過ぎすところだったよ」

「よかった。 じゃあ早速着替えて朝御飯を食べてから行こう！」

「うん！ そうだね」

そのあと、ミソラが着替えるためあかねの部屋に行きスバルはミソラが部屋から出たのを確認してから着替えて朝食を採るために下に降りた。

そのあと二人は朝食を食べて出かける準備をして家を出る際にあかねと今日夕々に休みがとれたといていた大悟に行つて来ますと声をかけてから玄関を出た二人は、ウェーブライナー乗り場まで他愛のない話しをしながら歩いていった。

（ウェーブライナー乗り場）

ウェーブライナー乗り場に着いたスバルとミソラが話ながら乗り物が出るのを待っていると、5、6歳と思われる男の子が二人の前に現れて二枚の色紙と黒のマジックペンを差し出した。

「ミソラちゃんとロックマンさんのサイン下さい！」

ミソラは一瞬ビックリしたがすぐにフツツと微笑むと男の子から黒のマジックペンを受け取ると色紙にサインを書いて男の子に渡した。だがスバルはサインを書いてくれと言われて固まってしまっていた。スバルは今まで家の前にファンレター（主に女性やヒーローに憧れる幼稚園児ぐらいの子達から）が送られたり学校が終わった後、放課後に女子達に囲まれる程度だったのだが、サインがほしいといわれたのが初めてだったためどうしたらいいかわからずじまら。そこにミソラがいつまでたっても何の反応もしないスバルの背中を押すように言う。

「スバル君、早くサインしてあげたら？」

「で、でも僕は今までサインしてあげたことがないから、どうやってサインしてあげたらいいかわからくて」

「そんなの簡単だよ。スバル君の名前を書くだけでいいんだよ。もっとも今回はロックマンさんって言われてるんだから、色紙に口ツクマンを書いてあげたらいいんじゃないかな？」

「で、でも」

「つべこべ言わないで男なら書く！」

「は、はい!!」

スバルはミソラの気迫に圧されて色紙にロックマンと書いて男の子に渡した。

そうすると男の子がお礼を言って母親の方に戻っていった。

そのあと2人は、ウェーブライナーが来て乗り込んだ後、オクダマスタジオ駅までサイン攻めにあつた。

理由は先程の男の子がサインをしてもらったのを見ていた小さな子供達がサインをくださいと言ってきたのである。

そして、駅に着いたスバル達は（スバルだけ疲れた顔をしながら）ウェーブライナーから降りてオクダマスタジオに歩いていき出入口の前に来て、ミソラは熊型の警備ウィザードにスタジオ関係者用のカードを見せて中に入った。スバルは、熊型の警備ウィザードを見てふと疑問に思いミソラに聞いた。

「ねえミソラちゃん？」

去年初めて来たときは犬型の警備ウィザードがいたはずんだけど、今年は熊の警備ウィザードなんだね？」

「うんなんかね、マモロウさんが今年は熊の警備ウィザードにするって言い出したの？ 犬の警備ウィザードは子供達に人気が出てきたからみたい」

「ふーん、それで熊の警備ウィザードなんだね。」

そう言えば去年いた犬の警備ウイザードは何処にいったの？」

「えーと、確かヤシブタウンのデパートの屋上で子供達に交通安全の指導をしてるみたいだよ」

「そうなんだ」

2人はその話しをしながら、楽屋の前に着いた。

「あ、スバル君、悪いけどあそこの待合室で待ってて？」

「うん。わかった！」

そうしてミソラは楽屋に入るのを見届けた後スバルは待合室に行つてミソラが来るのを待つことにした。

スバルが待合室で椅子に掛けていると2人の人物がスバルに声を掛けてきた。

「よお、スバル君じゃないか！ 久しぶりだな！」

「あ！ 久しぶりスバル君！ 去年は色々と有り難う！」

「あ！ 浦方さん、お久しぶりです！ スズカちゃんも久しぶりだね！」

スバルは声を掛けてきた2人に返事を返した。

スバルに声をかけてきた一人目は30代前半ぐらいの大柄の男の人で去年はミソラのとある青春ドラマを成功させるためミソラをはじめとするスタッフの方々に裏方としていろいろとサポートした人である。

今ではここオクダマスタジオの責任者として任されているぐらいだ。

もう一人はスバルと一緒に年齢でありミソラとは親友であり時にはライバルでもあるスズカという少女である。スズカは当初はミソラと同じ歌手として最終審査まで上り詰めたのだが、あえなく落ちてしまった。

だが、その数週間後に最終審査の時に、スズカに眼を付けていた1人のプロデューサーから声が掛かり歌手としてではなく俳優として事務所に来てみないかと言われ、考えた末に歌手を諦め俳優を目指して頑張ろうという気になりスカウトされた事務所に入った。

そして数年後、最初の頃はあまり名前も売れていなかったのだが、ドラマで（主に子役で）出るようになると、演技力が可愛く見えるという事で徐々に仕事が増えて、世間からも顔と名前を覚えて貰うようになってきた。

ある時、事務所から今の自分のパートナーであるアイス（ウィザード）を貰った。

そして、スズカはウィザードのアイスとともに頑張っていたのだが、ある時ミソラが事情によりこちらの事務所に来た時に、2人は再会を喜びあったのだが、ミソラが来てから、スズカの仕事が若干減らされたことに、スズカのウィザードであるアイスがミソラに嫉妬心を抱いたのである。

だが逆にスズカはミソラを見て親友としてすごいなと憧れを感じながら、いつかミソラを抜かすという気持ち（ライバル心）を持ち始めてきていた。スズカはミソラとは何度か共演をしたり、自分の与えられた仕事にやりがいを持ちながら確実にこなしていったのだが、スズカのパートナーであるアイスは、スズカとは違いあっちこっちに引つ張り回される状態になるのをみたり、スズカとミソラが共演しているときでも、司会者がスズカよりミソラの方に質問が多かったりするのをみたりして、差別をされていると感じ始めていた。これには、スズカもアイスの愚痴には困っていた。

ミソラとは親友でいたいともあるのだが、アイスが自分の事をこんなにも想ってくれているとおもつと、アイスの愚痴を聞いて宥めることしかできなかつたのである。

ある時、ミソラがとあるドラマに友人をエキストラとして共演させたいと監督に許可を貰ってその数日後にスバルとルナとゴンタとキザマロとジャック（ルナに強制的に連れてこられた）達が来た日の午後に撮影中に事件が起きたのである。

以前キングが造ったノイズカードで元ディーラーの一員であったジャックがゴンタの体の中に眠っていた残留電波を叩き起こし、ゴンタはオックス・ファイアとなり三度（一度目はFM星のオックスに操られ、二度目はハイドが古代のムーの力を使ったことにより暴走した）暴れたのである。

その時、スバルはロックマンとなってオックス・ファイアを倒すことにより、被害を食い止めたのだが、（その時から、ゴンタはオックス・ファイアに電波変換できるようになった）その活躍をみた監督がロックマン（スバル）とスズカの役を交代してしまった。それを見たアイスは怒りのボルテージが上がりそこに眼をつけたジャックがアイスにノイズカードを放った。するとアイスは両耳がダイヤの形をして体格が雪の女王様みたいな形に豹変していきダイヤ・アイスバーンとして暴走しはじめミソラのドラマを妨害しようとした

が、ロックマンにより阻止された。

そのあと、アイスは元に戻りミソラへの執着心を捨てて自分の相棒パートナーであるスズカの為に2人で頑張ると誓ったのである。

「今日はどうしたんだ？　こんなところで？」

マモロウがそう話しを切り出した。

「実は今日ミソラちゃんと一緒に来てほしいといわれたて来たんですけど、そう言えば何でここに来たんだらう？」

スバルは初めて何故ミソラと一緒に来てほしかったのか首を傾げた。一方、マモロウとスズカはなんとなくピンときたようだ。

「ま、スバル君！　緊張しないようにリラックスだ！　リラックス！」

「？」

マモロウはそれだけいうと、何処かにいってしまった。

スバルはマモロウの言ったことがわからずただマモロウが通り過ぎて行くのを観ていた。

そしてスバルとスズカが他愛のない話をしていると衣装に着替えたミソラがスバル達の元にやってきた。そのミソラの衣装は少し長めのブルーのスカートに半袖の水玉模様のワンピースを着ていた。

ミソラの衣装を見たスバルはドキツとした。

「あ！ ミソラ？ もしかして、あの番組にスバル君を出す気なの？」

「あ！ スズカ！ うん！ そうだよ」

「でもスバル君は全然知らなかったみたいだけど、一言いっというたほうがよかったんじゃないの？」

「うーん、でもスバル君に話したら絶対来てくれないと思ったから内緒でつれてきちゃった」

ミソラが片目をつぶって小さく下を出すと、スズカは呆れたようにハア〜と溜め息をついた。

一方のスバルは2人の話についていけずに、え？ という顔になっていた。

「ねえ？ 2人ともさっきから何の話してるかわからないんだけど？ それに僕もテレビに出るってどういうこと？」

ミソラはスバルの方に振り返り両手でスバルの前に謝りながら説明しはじめた。

「ごめんねスバル君。」

実はこないだの番組でスバル君との関係を話したら2人から詳しいことを聞きたいから今日の番組に出てほしいってテレビ局から依頼があったの。

私はOKしたんだけど、スバル君にいったら断られると思ったから内緒にしたの本当にごめんなさい！」

そういつて、ミソラは深々と頭を下げた。

それを見たスバルはミソラのもとにいき、両手でミソラを優しく抱いた。

ミソラは一瞬ビクツと肩を震わせて恐る恐る顔をあげてスバルの顔を見た。

そこには、いつもと変わらないやさしそうな顔をしたスバルがミソラの眼に写っていた。

「確かに今聞いてびっくりしたし、一言いつてほしかったのもあったけど、別にテレビに出るのはいやじゃないよ。」

確かに僕は目立つのは嫌いだし余りミソラちゃんとの関係をテレビを通じてというのは好きじゃないけど、ミソラちゃんがそうしたいなら僕も了解するよ。

これからはこういうことはやめて、なんでも僕に言ってくれるかな？出来る限りミソラちゃんの要望は聞き入れるからさ！」

「ノノスバル君ありがとうノノ」

そうして、2人は唇を重ねようとしたが、第三者の咳払いにより2

人は振り返った。

「あの、非常にいいムードになって申し訳ないんですが、他の場所ですべていただくとありがたいんですが？」

スズカに言われて2人ははっとなり真つ赤になりながら慌てて離れた。

よく見るといつの間にか数名のスタッフがこちらを見ており2人はさらに顔を真つ赤にしながら下を向いたのである。

そのあと、2人はスズカに連れられて目的の場所に向かった。

そのあと目的の場所に着いた3人だったが、スズカは別の仕事があるからとその場を去っていった。

そして、本番が始まるまでには赤くなっていた頬がさめていった。

そして2人は本番まで他愛のない話をしていたが、スバルは本番直前になってミソラから生放送だと聞いて驚いたのはまた別の話し。

ミソラと一緒にTV出演！？（本番スタート！！）（前書き）

皆さんお久しぶりです。

待っててくださった方本当に申し訳ありません。

最近仕事が忙しくて投稿もなかなかできない状態です。

本当にすいません。

それではどうぞ！

ミソラと一緒にTV出演!? (本番スタート!)

ここはオクダマスタジオ内

本番5秒前

4、

3、

2、

1、

「皆様こんにちは！」

今日出かけるには雲一つない絶好の良いお天気日和ですね。

そして、今日は特別なゲストをお呼びしております。皆様ご存じのあの国民的人気アイドルシンガーソングライターの響ミソラさん！

そしてもう一人は、この地球を救ってくれたヒーローであり、つい最近、響ミソラさんと付き合い始めたという星河スバルさんです！早速2人に登場してもらいましょう！」

そう司会者がいうと会場から拍手がパチパチと鳴った。

少し前スタジオの裏で

スバルとミソラは出番が来るのを黙って待っていた。

(初めてTVに出ると思うと緊張するな)

「スバル君リラックスだよ。リラックス」

ミソラは笑顔でスバルの緊張をほぐそうと声を掛けた。

「う、うん。　　やっぱり初めてＴＶに出るから緊張しちゃって」

「そんなに緊張してたら、質問されて答えるときに舌を噛んじゃうかもしれないよ？」

「う、うん。　　でも、どうしても緊張しちゃって…」

ミソラは一瞬手を顎にあててうんと唸りながら考えた。すると、すぐに思い浮かんだのか、笑顔になってスバルに「私に任せて！」と伝えた。当然スバルの頭には？が浮かんだ。と、そこに本番５秒前という声が聞こえやがて、拍手の音と同時に司会の人があい手をした。そして、ミソラとスバルに次の拍手がなつたら入るようにスタッフの人が伝えて数十秒後に拍手がなりまず最初にミソラが中に入り続いてスバルが（かなり緊張しながら）中に入っていた。

スタジオの中

スバルとミソラが中に入ると拍手が大きくなりミソラはペコリとお辞儀をして、スバルは緊張しながら深々と頭を下げてから中に入った。

司会の人に近くの椅子に座るように促されて２人は司会の人と向き合うように座ると拍手が止まった。

「こんにちはミソラちゃん、スバル君！ 今日はお忙しいところ来ていただきありがとうございます。今日呼んだのは2人が付き合いはじめた経緯と又どこで知り合ったかを聞くために本日お越しいただきました。」

「ではまず、お二人がどういう経緯で知り合ったかを教えていただけないでしょうか？」

司会者がそう質問してきた。

「わかりました！ その前に少しだけ彼の、スバル君に自己紹介をさせてあげてください。」

スバル君は地球を救った英雄だけで、スバル君の性格や人柄がどんな人が皆さんは知らないと思うので、皆さんに知ってもらいたいです。　　お願いします！」

そう言いながらカメラに向かって深々と頭を下げた。スバルは自分の緊張感を解そうとしてくれるミソラを見て驚きつつ緊張してなんかいられないと思うと自然とリラックスできるようになっていった。

「わかりました。ではスバル君にまず簡単に自己紹介をしてもらいたいと思いますが宜しいでしょうか？」

「あ、はい！　でも何を言えばいいでしょうか？」

「そうですね〜？ では趣味と招来の夢についてお願いします」

「わかりました。 じゃあまず僕の招来の夢から語ります。
僕の招来の夢は父親と一緒に宇宙飛行士になることです！」

「宇宙飛行士になりたいと思ったきっかけはやはり宇宙飛行士である父親の星河大悟さんの影響でしょうか？」

「はい、そうですね！ まあそれだけじゃないんですけど」

「他にはどんな理由があるんですか？」

そう司会者が聞いた瞬間、スバルの目がキラリと光った。
それを見た3人（性格には1人と2体だが）

（（（マ、マズイ！？ スバル「君」に例のスイッチが入ってしまった（（（

「一つ目はですねー」

「一言で言いますと、彼は尊敬する父親の背中を見て宇宙飛行士になる夢をもっているわけですよ！」

スバルが一つずつ語るうとしたが、ミソラに早口に言われてしまい少しへこんでしまった。(せっかく僕が宇宙のことについて語ろうと思ったのにな…)

(あ、危なかった。スバル君が宇宙のことについて語ってたらいつまでたっても終わらなかったよ)

(ナイスよ「だ」ミソラ！)

「父親の背中をみて夢を追いかけるなんていい夢ですね。
それで、スバル君の趣味は何ですか？」

司会者は2人と二体の電波体がそんな事を思っているとは知らずに次々と話を進めていく。

「僕の趣味は夜に星を見に行くことと、あとは読書や音楽を聴いたりすることですね！」

音楽と聞いた瞬間、司会者の眼がキラリと光った。

「スバル君の趣味は天体観測をしたり、読書や音楽を聴いたりするんですねー！ところで、音楽を聞くのが趣味とおっしゃいましたが、どんな歌を聴くんですか？

やはり彼女であるミソラちゃんの歌を聴くんでしょうか？」

「はい！ ミソラちゃんの歌で一番気に入ってる曲が絆・ウェーブです！」

スバルは顔を赤らめながら司会者の質問に答えた。

ミソラの方も司会者が『彼女』という単語を発したとき若干頬が赤みが増してきたがスバルが自分の歌が好きだと言ってきて嬉しさも込み上げてきた。

「絆・ウェーブと言えば、以前ミソラちゃんが絆の大切さを大事な人に教えてもらった事をみんなにも知ってもらいたいと言うことで創った曲とおっしゃいましたが、その大切な人とはスバル君のことでしょうか！？」

「はい！ 私は母親を失って何もかも嫌になつていたとき私は彼に……いえスバル君に出会いました。スバル君は私に『母親の為に歌っていたんだったら、今度は自分の夢に向かって歩いていったらいいんじゃないかな？

きつとミソラちゃんのお母さんも天国でそう願ってるはずだから……それに僕も応援しているから！』と優しく言ってくれてどんなに嬉しかったことか。それに私が一時期引退ライブをしたあと、これか

ら誰にも頼らず一人で歩んでいくんだと思うと泣いてしまいました
私にスバル君から『僕とブラザーバンドを結んでください』と言わ
れたとき、私は凄く嬉しかったです。　　だってこれからは一
人じゃないんだと、それに辛いときはスバル君が私をファンとして
でなく一人の友達として応援してくれているだから弱音を吐かない
で自分の夢を必ず見つけて探すんだという思いを持って生きてきま
した。

そして私は自分の夢を見つけたから今ここに立って今の私がいるん
だと改めて実感します！」

スバルはビツクリしていた。

ミソラと出会ってから自分の人生が変わったのは自分だけでなく彼
女もまた自分に出会って変わったたてたなんて。

「そんな出会いがあったんですね。　それでミソラちゃんの夢とは
一体なんでしょうか？」

「はい！　私の夢は世界中には孤児になった人達や不幸になった人
達がたくさんいます！」

そう言う人達に私の歌ですこしでも心の傷が癒えるようにまた皆さ
んに絆の大切さを知ってほしいと思っています！」

「素晴らしい夢ですね！」

その夢にむかって頑張ってください！」

「はい！　ありがとうございます！」

「さてそろそろお時間が後少しとなってしまいました。最後にお二人に相手のどういふところが好きになったのか教えていただけないでしょうか？」

そう司会者が言うとまずミソラが喋りだした。

「私はスバル君の優しくて他人を想いやるところがあつても一番は、母親を失つて暗闇の中にいた私に暖かく手を差し伸べてくれたのに惹かれました！」

スバルはミソラが満面の笑みで言うのを聞いてると恥ずかしさからか顔を少し赤くした。

「スバル君の事をそこまで好きなんですね！
ではスバル君ミソラちゃんのどういふところが好きになったのか教えていただけないでしょうか？」

スバルは司会者に話しを振られると一度だけ静かに深呼吸をしてから喋りだした。

「僕は一度父親が行方不明になつてしまったときです。
皆さん御存じの方が多と思います、宇宙ステーション“絆”が

消息不明になったときです。

僕の父は星河大悟宇宙ステーションの“絆”の船長でした。宇宙ステーション“絆”がFM星人と接触したとき、FM星人が侵略者だと勘違いしたのです。彼らは自分達の星を護るために仕方なく僕らの地球に攻めてきました。

そんな時、僕はまだ父親の行方がわからないというショックで誰にも心を開くことができなかったのです。ある時展望台で運命的な出会いをしました。

自分のパートナー（ウィザード）であるウォーロックに出会ったのです。

彼はFM星から逃亡してきたといいました。

そして彼を追って次々とFM星人がやってきました。

僕は最初は嫌々戦っていました。

ある時、僕が家の近くの展望台にいくと美しい歌声が聞こえてきました。

僕がいくとそこにはミソラちゃんがお母さんの為に歌を歌っていました。

そして何度か会う内に僕の心に変化が訪れました。もう一度人を信じて見ようという想いです！

もし僕がミソラちゃんに会わなかったら今頃は今だに人を信じられずにいたと思います」

そしてスバルは立ち上がってミソラの方に向いた。

「ミソラちゃんに会わなかったら今だにきっかけをみつけれられずにいると思うんだ。

だから本当にありがとう！そしてこれからもよろしくね！」

そう言った後、スバルは頭を下げた。

それを見たミソラは立ち上がってスバルの方に向いた。「それは私もだよ！ 私もスバル君にあつてなかつたらアイドルをやめて一人孤独にいきてたかもしれないだよ？ だから私の方こそありがとう！ それからこれからもよろしくね！」

そう言ってミソラもスバルに頭を下げた。

すると、会場からは大きな拍手が沸き起こった。

「なんとお二人はそんな過去がありそして今のお二人には強い絆で結ばれていらつしやるのですね！」

これからも、お二人とも仲良くしていつてくださーい！」

「はい！」

スバルとミソラは司会者の言葉に力強く答えた。

「最後にTVを御覧になつてゐる皆様一言づつお願い致します」
司会者が言うのと同時に、カメラがミソラの方に向いた。

「TVを御覧になつてゐる皆様いつも応援ありがとうございます！
これからも頑張つて行きますので応援よろしくお願いします！」

ミソラがいつものスマイル顔でそう言うとカメラはミソラからスバルに向いた。

「地球に三度目の危機が来たとき僕は皆さんに助けられました。

あの時なんとかメテオGを食い止めたものの僕は力尽きてしまい地球にはもどれずに宇宙を漂流するところだったんです。

皆さんにとっては“ロックマン”は地球を救った英雄かもしれませんが、僕にとつたら皆さんは命の恩人なんです。

皆さん僕を助けてくれて本当にありがとうございます！」

スバルはカメラに向かって頭を下げると会場から大きな大きな拍手が響いた。

「どうもありがとうございました！」

さて皆さんそろそろお別れの時間です。

それでは皆さんまたお会いしましょう！

さようならー！」

司会者がそう締め括るとまたもや大きな拍手が沸き起こった。

しばらくして鳴り止んだ後スタッフが「お疲れさまでした！」という一言で会場にいた人達はそれぞれ解散した。

そのあと、スバルはミソラについてきてと言われていくと、そこには「響ミソラサイン会」と書かれた看板がありそこに並ぶ人達がたくさんいた。

ミソラはスバルにこれが終わるまでまってほしいと頼むと用意されてる椅子に座った。

すると一人のスタッフがそれではサイン会を始めますと言うとミソラは一人一人にサインを書いて握手するときに「これからも応援よ

ろしくね」「とか」「いつもCD置ってくれてありがとう」「とかいったりしていた。

一方スバルはファン（主に女性の）に囲まれてサインを書いたとか書かなかったとか…。

ハイドの野望として・・・(前書き)

かなり遅れました。
申し訳ございません。

ハイドの野望そして・・・

ここはとある古いビルの中でハイドとフォルテが空のカプセルををずっと凝視するように見ていた。その数15個である。

「本当に貴様がこのカプセルに私の“僕”^{しもへ}となる電波体を生み出せるのか？」

「ああそつだ。だから黙ってみている！」

(ふん！ まさか“あいつ”の能力を使うことになるうとはな)

フォルテは両手を天に掲げると両の手の平から黒いオーラのようなものが表れたと思いきやそのオーラが15の粒子に分かれて空のカプセルに入っていった。

するとカプセルが光だし思わずハイドは眩しさに自身の着ているマントの中に隠れた。ハイドが見た次の瞬間黒い粒のような固まりがただ不気味に浮いていた。フォルテは両手をマントの中に隠すように収めると歩きだした。

それに気付いたハイドがフォルテに声を掛けた。

「何処に行く？」

フォルテは歩みを止めて振り返らずに答えた。

「これで俺の役目も終わった。
あとはお前が何をしようとするのか見届けるだけだ」

「待て！ このカプセルに入っている物は一体なんだ？

それにお前はこの私に協力するとい」

「勘違いするなそのカプセルに入っている物体は電波体となってお前の手足となつて動いてくれるだろう。あと一週間もすれば一気に六体の電波体が生まれるだろう。

それ以上は協力する義務はない！」そう言つてフォルテは再び歩みを再開した。

「ま、まて！」

「あ、そうそう」

といい一端止まって顔をハイドの方に向き直つてまた喋りだした。

「私の封印を解いてくれたことに礼を言おう。

さて二百年後の世界でもみてくるとするか？」

そういつた瞬間フォルテの姿はもう何処にもいなくなっていた。

ハイドは暫くフォルテのいた場所をじつとみていたがやがてカプセルの方に向くと一人ほくそ笑むのであった。

??????????

ここにはサングラスを掛けた大柄な男と隣には顔は暗くて見えないが空中に浮かんでいる椅子に座ってトランプの束で遊ぶかのように右手に持っていたトランプをパラパラと音を立てながら左に流している者に、背中に十字型のしゅりけんみたいな形の者が床に方膝を着けて頭を下げながらとある報告をしていた。「フム、ご苦労であった。報酬は送っておいたまた何か会ったときはよろしく頼む！」

「御意！ では失礼する！」

そういった次の瞬間その者の姿は消えていた。

その者がいなくなったあと大柄な男がトランプを持っている男に尋ねた。

「ー様ハイドは我々の計画の妨げになります。

奴を消したほうがよろしいのでは？」

「いや、今我々がでたらWAXAが黙ってはいないだろう。

それに我々には今しばらく時が必要だ。

我らの切り札となるものを捕らえ完全に操れるようにするための装置がな。

それまではハイドに好きにやらせてやるうじやないか　なあ“子供達”よ？」

そういつてその者は後ろに振り返って顔は暗くしてみえないが“子供達”と呼んだ三人を見てほくそ笑んだ。（まっっているがいい！　□

ツクマン！ いや星河スバル！
)

WAXA

翌朝スバルはフォルテの事をWAXAに報告しにいくため朝食を食べて身だしなみを整えてWAXAに向かった。

ちなみにミソラはまだ家で寝ていたためスバルは明日から仕事だと聞いてたため今日一日はゆっくりさせてやろうと思いきさず家を出た。

余談だがミソラの寝顔に、ウォーロックが声を掛けるまで見惚れてたのは言うまでもない。

話を戻そう。

今スバルはWAXA専用のウェーブライナーに乗っていた。

因みにWAXAに行くには電波変換でいくかWAXAで発行してもらえる専用のカードがないと行くことができない。

「ねえロック？」

「なんだ？」

「フォルテは電腦の破壊神っていったけど、次にあったときに勝てるかな…」

「ああ？ 何弱気な事をいつてんだ！ この前は負けたけど、ノイズBGMさえあればもしかしたら勝ってたかもしれないんだぜ！」

「そうかもしれないけどさ、フォルテは二百年前に“ロックマン達”に封印されたって言ってたよね？」

「ああ、それがどうした？」

「封印されたってことは二百年前の英雄にも倒せなかったから封印したんじゃないのかなと思って、もしそうなら僕等で勝てるか不安になっちゃって」

「確かに奴は強い！ 気に食わないがブライに救われなかったらあのままやられてただろう。だからってあの時俺達が戦わなかったら、関係ない人達が巻き込まれてたかもしれないんだぜ！」

「それはそうだけど」

「まあWAXAについてたらヨイリーの婆さんにも相談してみるんだな」

「うん」

2人が話している間にWAXAに到着したためウォロックはハンターV.Gの中に戻りスバルはウェーブライナーから降りた。因みにWAXAは富士山の火口の頂にある。

WAXAの中に入ったスバルはエレベーターまで歩いていくとある人物にあった。

「あ！　こんにちは宇田海さん」

「やあスバル君こんにちは。
今日はどうしたんだい？」

彼の名前は宇田海^{うたがいしんすけ}深祐天地の部下である。

彼は以前、前の職場で信頼していた上司にアイデアを盗まれてしまった。

彼は誰一人として信用しなくなった。それを知った天地は一緒に仕事をしないかと誘うと、彼はそれを了承したのだが、彼は天地でさえ信用していなかった。そこをFM星人のキグナスに付け込まれ電波変換してキグナス・ウィングとなつて天地研究所にいた人達を苦しめたがロツクマンの活躍により天地研究所にいた人達は救われまた宇田海も人を信じるようになった。

その後彼は色々な物を開発し次々と成功していった。まあたまに失敗作が出来てその度にサテラポリスやロツクマンにお世話になつているのは別のお話。後、彼はヨイリー博士の推薦でWAXAの開発部門として働いている。

「ちょっとヨイリー博士に用があつて来たんです」

「そうですか。　あ、そうだ！　もし用事が終わったら僕の研究室

に来てくれませんか？ 丁度今からある実験をしようと思ったところなんですよ。もし来てくれるんでしたらスバル君が来るまで待ちますので」

スバルはどうしようかと考えようとしたらいきなりウォーロックがウィザード・オンして出てきた。

「面白そうじゃねえか！

あのあと別にやることはねえしな！ 勿論スバルはいくよな？」

「え？ う、うんじゃあ後で研究室に伺います」

「わかりました。では用事が終わったら来て下さいね」

「はい！ わかりました」

そう言っつてスバルは一旦宇田海と別れた。

そしてエレベーターに乗ってヨイリー博士の研究室まで上がっていった。

因みにヨイリー博士の研究室は60階にある。

あと宇田海の研究室は地下二階である。

チン！

スバルがエレベーターに乗って数十秒後に六十階に着くと扉が開いて、そのまま真直ぐ歩いていくと白衣を来た白髪のある女性の人

何かの資料を手を持ちながら見ていた。
スバルはその人の近くまで行き声を掛けた。

「ヨイリー博士お久しぶりです！」

するとヨイリー博士と呼ばれた人は手に持っていた資料から眼を離すと声の掛かった方に振り向いてスバルの顔を確認するとほほ笑みながら言葉を返した。

「あら？ スバルちゃんいらっしやい。今日はどうしたの？」

「じつは…」

スバルはこないだのハイドやフォルテのことを話した。

「そう、そんなことがあったの…。フォルテのことはこちらで調べてみるわ。それとスバルちゃんちょっと一緒に来てもらっていいかしら？」

「あ、はい」

そういうとヨイリーとスバルは奥の方に行った。
因みにヨイリー博士とはトランサーを始めとする多くの機械を設計し、開発した人である。

そして初めて人工生命体である暁シドウのウィザードのアシッドを造った人である。

ただヨイリー博士は誰であつてもちゃんづけ呼ぶので（一部例外）WAXAの（職員一部）とウィザード（雄？）からはちゃんづけで呼ぶのは止めて欲しいと強く願っているとか。

話を戻すとヨイリーとスバルが着いた場所は中型ドームくらいある建物の前にいた。

そこに着くとヨイリーが唐突に話した。

「スバルちゃん今からちょっとした実験をするわ。この中に入ったらウイルスを出すからそれぞれブラックエース、レッドジョーカーにファイナルライズしてウイルスを倒してみてくれないかしら？」

「え？ でもヨイリー博士にノイズBGMを預けてファイナルライズが出来ないんですけど」

「あらそうだったわね。」

はいノイズBGM改よこれがあればいちいちノイズを溜めなくてもファイナルライズができるようになるわ」

そう言いながらポケットからノイズBGMを取り出してスバルに手渡した。

スバルは興奮しながら受け取った。

そりゃそうだろう。 なんとって好きなときにファイナルライズができるようになるんだから。

「はい！ わかりました！ ロック！」

「ああ！ これで次からフォルテのやろつに勝てるかも知れないぜ！」

「じゃあノイズBGMの性能をテストしたいから早速中に入って電波変換してちょうだい」

「はい！ わかりました！」

そう言うとスバルは中に入っていった。

WAXA (後書き)

仕事の日を除くと個人的にいろいろやりたいことが出来てしまйнаかなか執筆できない状態です。

待ってて下さった皆様には申し訳ございません。

それでも執筆出来る時間が少しでもあればやろうと思っています。

これからもこんな調子であります、待っててくださった皆様には本当に待っててくださって感謝しています。

これからもこんな調子ですがよろしく願います。

ファイナライズ！ レッドジョーカー！ ブラックエース！（前書き）

更新がいつも遅くて申し訳ございません。
今回もぐだぐだです。

ファイナライズ！ レッドジョーカー！ ブラックエース！

スバルはドーム場の中に入りロックマンへと電波変換して実験が行われるのを今か今かとスタンバイしていた。

「ロックマン聞こえる？ 準備はいいかしら？」

ドーム場にヨイリー博士の声が響いた。

「はい！ 大丈夫です！」

「それじゃスタートするわ！ 実験開始！」

そう言うのと同時にロックマンの目の前には工事現場の人が被る黄色いヘルメットに右手にはツルハシを振り上げて衝撃波で襲ってくるメットリオに、左右に鋼の刃をがあり口は鋭い嘴になつて襲ってくるクロツカーに、頭から火が出ていて両手を炎で燃やして炎のパンチで襲ってくるドツカーン等計50体のウィルスが表れた。

「さてまずはこれだ！ ファイナライズ！ レッドジョーカー！」

するとロックマンの周りにノイズの塊かたまりが全身包んだかとおもうと、次の瞬間ロックマンは両肩や全身をスーパーアーマーで覆われ胸には流星のエンブレムが刻まれている。因みに色は赤や黒で混ざりあっている。

「よしいくぞロック！」

「おう！」

「バトルカード！ ホイツスル！」

ロックマンは笛を吹くとウィルス達がロックマン目がけて一ヶ所に集まった。

ロックマンは素早く後ろに跳躍しながら右手にノイズの塊を集めると着地した瞬間右手をウィルス達の前に向けて放った。

「NFB！ レッドガイアイレイザー！」

ロックマンの腕から発射されたノイズの塊は全部のウィルスを巻き込んで全てデリートした。

そのあと、ロックマンはファイナライズを解除した。

「さすがね。それじゃあ次はブラックエースになって頂戴！」

「はい！」

「ファイナライズブラックエース！」

するとまたロックマンの体をノイズが包み次の瞬間、ロックマンは漆黒の背中に翼が生えて胸には流星のエンブレムがあり体はボディ―アーマーで包まれていた。

また同じようにウイルスが五十体ほど出てきた。

ロックマンは翼を思いっきり拡げてウイルスに突っ込んでいった。

「NFB！ ブラックエンドギャラクシー！ うおおおおお！」

ロックマンは雄叫びをあげながら両脇にいたウイルスを翼でデリートしていき、正面にいる敵は両手でプラズマを作りウイルスをデリートしていった。

そしてロックマンはファイナライズを解除したあと、電波変換を解除した。

「ご苦労様実験は終了よ！ 結果を報告するから此方に来てくれる？」

「はいわかりました」

スバルは実験施設から出てヨイリーのところに向かった。
ヨイリーはスバルがくると実験結果の資料を見ながら話した。

「結論だけいわね。今までノイズを集めないでファイナライズがすぐにできることには成功したわ！でもファイナライズが何時でも出来る代わりに持続できる時間が短いのよ」

「それって一体どういうことですか？」

「元々ノイズBGMは耐ノイズ用に造ったやつなの。ある時ノイズBGMが耐えきれなくなってスバル君の体にもノイズの付加がかりスバルちゃんが苦しみましたところをファントム・ブラックに襲われたんだっかわよね？」

「はい。あの時動けなくなったところをファントム・ブラックに襲われて駄目だと思ったらいきなりファイナライズが出来るようになったんです」

「そのあと、スバルちゃんはノイズを溜めるとファイナライズが出来るようになったんだけど、スバルちゃんがノイズの塊であるメテオGを破壊したことで表の電波世界ではノイズの反応がなくなったわ」

「表の電波世界？」

「ああ、表と裏の電波世界があつて表の電波世界とは此方の電波ルートで裏の世界とは犯罪者やヤクザ系が使う電波ルートのことよ」「スバルは成る程と納得した。

「話しを戻すわね。つまりノイズがなくなつてからファイナライズが出来なくなつたのよ。でもウイルスを倒したら微弱だけどノイズの反応があつたわ」

「それじゃあ、ウイルスをデリートしていけばまたファイナライズ出来るんじゃないんですか？」

「それが駄目なのよ！」

「あ？　なんでだウイルスをデリートしていきやあノイズが溜まつてファイナライズ出来るんじゃないかねえのか？」

ヨイリーはロックの言葉に首を横に振つて答えた。

「さっきもいったようにメテオGが消滅してからノイズの反応が消えたといったでしょう？　でも何故かウイルスには極わずかにノイ

ズの反応が見られるけど、本当に少量でメテオGが消滅するまえの約10倍のウイルスを倒さないとファイナライズが出来なくなつたのよ」

「や、約10倍!? それで博士はノイズBGMの機能を改良して出来るようにしたんですね。」

でも何故ファイナライズしても長く保たないんですか?」

「その理由はスバルちゃんがロックマンになつてノイズが溜まつたらファイナライズしてブラックエースかレッドジョーカーになり敵と闘つてるときに最強技(NFB)を放つ時があるでしょう? その時に溜まつていたノイズの9割を消費して残りの1割をファイナライズの状態を持続させるために残っているのよ。そうそうスバルちゃんはNFBを放つた後、妙に疲れたりしなかつたかしら?」

「え? そう言えば疲れがどつと溜まつたようなのよ」

そう言いながらスバルは右手を顎にあてて考える仕草をしながら答えた。

「でも1割残っているんだつたらNFBは撃てなくてもファイナライズが解除される必要がないんじゃないんですか?」

「それがね、今回改良したノイズBGMには前はノイズの耐性用で造つたけど今回は新たに人工的にノイズを生み出せるように造つた

のよ。勿論ノイズBGMの耐性を強化したり、電波人間に影響を与えないようにしたり、電波変換が解除されても人体に影響しないようにしてね」

「す、すごい！　こんどはファイナライズが何時でも出来るということですよ。でも人工的に造れるように改良したんですたらファイナライズが解除されることはないんじゃないんですか？」

「そこが問題なのよ。電波変換してる状態でもノイズが溜まるように実験をしたんだけど、途中でノイズBGMが堪えられなくなるという事態が発生したの。幸い堪えられなくなる前に実験を強制的に中断させたから何ともなかったけど、その改善方法を探しているんだけど、今のところはお手上げ状態なのよ」

「え？　じゃあファイナライズしてNFBが射てるのは一発だけでことですか？」

「ええ、そうよ。さっきはスバルが電波変換したのを見計らってノイズをドーム場の中に入れたからできたんだけどね。あと前みたいにあまり疲れが出ないように改良したからファイナライズが解けても普通に動くことはできるわよ。それと電波変換を解除してから30分たったらまたファイナライズが出来るようになるから」

「だからさっきは全然疲れが溜まらなかったんだ。でもファイナライズはすぐに出来るようになったけどNFBが一回しか射てないのはちょっとつらいな」

スバルは肩をガツクリとさせなが俯いた。
そこにヨイリーは肩をガツクリとしているスバルの右肩に優しく手を置いて話した。

「今はこれ以上このBGMの改良はできないけど、今新しく開発しているのがあるの。これが成功すればロックマンに新たな力が授けることができるわ！」

「ほ、本当ですか!？」

スバルは俯いていた顔を上げてヨイリーに顔を向けながら聞いた。
するとヨイリーは優しい顔をしながら頷いた。

「ええ、あと電波変換している状態でもノイズが集まる方法も探して、もしその方法がわかったらスバルちゃんに連絡するわね」

「はい！ わかりました！それじゃあ僕はこの辺で失礼します」

「ええ、それじゃあ気を付けてね」

「はい！ それじゃあ失礼します」

そう言ってスバルはヨイリーに一礼してエレベーターに乗り込んだ。エレベーターに乗り込むとロックがスバルの前にウィザード・オンしてスバルの前に立った。

「よかったじゃねえか。　これでいつでもファイナライズが出来るようになったからな！」

ロックの言葉にスバルは再び下を向いて俯いた。

「うん、でも」

「だ~~~~もう！　ファイナライズが長くは保たないのはわかるが、今はいつでもファイナライズが出来ることだけ喜べばいいじゃないか？　ヨイリーの婆さんもファイナライズが持続できる方法を探すっていつてんだからよ」

「うん。　そうだね！　ごめんねロック」

「分かればいいぜ！　そんなことより早くあいつ（宇田海）のところにいこうぜ！」

「..」

そうしてスバルとロックは宇田海の研究室までいくのだった。

宇田海の発明品パート1（前書き）

大変遅くなりました。

まっけてくださった方々本当に申し訳ございません。

宇田海の発明品パート1

チン!

今スバルを乗せたエレベーターが丁度宇田海の研究室に着きエレベーターの扉が開いた。

スバルはエレベーターから降りて宇田海を探すとすぐに見つかった。彼はスバルに気付かないのか背を向けるような形で何かをしていた。スバルが宇田海の所に行こうとしたが、それよりも早くロックがウイザード・オンして宇田海の近くまで行き声を掛けた。

「おーい、宇田海なにやってんだ？」

「わ!？」

宇田海はいきなり声を掛けられてビックリして地面に尻餅をついた。スバルは慌てて宇田海の所に行き手を差し出した。

「いきなりロックが声を掛けて驚かせてしまいましたん」

宇田海はスバルの手をとりながらいやいいですよと言いなから立ちなんの意味があるかわからないが、いきなり咳払いをした。

「おっほん! さてスバル君とロック君に私の発明品を発表するま

えに私のウィザードを紹介しようと思います」

宇田海がスバルとロックにいうと二人はどんなウィザードだろうと思うなか、宇田海がウィザード・オンした。

「な!？」

「こいつは!？」

スバルとロックは宇田海のウィザードを見て驚いた。白鳥座のFM星人キグナスがだった。

それにスバルとロックはキグナスがある発言をしたことに驚愕した。

「はじめまして私は宇田海様のウィザードのキグナスと申します。どうぞよろしく願います」

そういつて頭を深々と下げた。

「あ、あのFM星にいた頃は散々人を馬鹿にしたり見下していたキグナスがこんなになっちまうなんて信じられねえぜ!」

ロックが驚きのあまり半分放心状態になりながらキグナスに対して失礼なことをいうありまさであった。

そんな中スバルは驚きながらも宇田海に何故キグナスがこの場において宇田海のウィザードになったか訳を聞いていた。

宇田海がいうには以前から自分のハンターV Gに異変を感じてヨイリー博士に相談して調べて貰ったところ以前、宇田海に取り付いた電波体のキグナスの残留電波が残っていた。

このまま放置すると、残留電波が膨らんでいきキグナスが復活して再度宇田海に取り付いて暴れ廻る危険性がでてくる可能性があったのだが、除去しようにも宇田海自身から発せられる微弱な電波で埃ぐらいの小さなものが宇田海のハンターV Gに集まるため完全に除去することができなかった。

そこでヨイリーはキグナスを再構築する際に元FM星人というを記憶を含む、すべての記憶を消去して宇田海のウィザードとして再構築した。

（余談だが彼が礼儀正しいのはたまたまらしい。もしかしたら彼は悪い部分を除けば元々礼儀正しかったのかもしれない）

そして、勿論彼はキグナスと電波変換出来るのだが、再構築した日に実験として電波変換を一回しかしていないとのこと。その為、自分分は極力前線にはでないとのことなどを話した。

スバルといつの間にか話を聞いていた（どこから話を聞いていたのかわからないが）ロックが納得したように頷いた。

一通り宇田海からキグナスの話聞いたスバルが話の本題に入った。

「それで宇田海さんの発明したのは一体なんですか？」

「おお！ そうだった。何を完成させたんだ？」

ロックもスバルの言葉にはっとして宇田海に興味深々に聞いてきた。宇田海はゴホンと一回咳払いをしてから発表しだした。

「よくぞ聞いてくれました！」

私がWAXAに来てから初めて独自に成功させた物です！」

高らかに言うのとポケットから丸くて掌サイズくらいの丸い赤いボタンを出した。それを宇田海がポチッと押すと、スバルが入ってきたドアの反対側の壁がヴィーンという音とともに左右に分かれるように開いた。

そして一人と一体はそれをみてポーゼンとした。

というのも、一人と一体は壁を左右に開くのを見て、てっきりかなり大きくて凄いものなのだと思っていたのに実際はその逆で、大きさは人よりも小さくてラジコンを操縦する機械のような物を連想させるものだった。

「なにこれ？」

スバルは思わず思っていたことを口に出してしまった。

だが、宇田海はスバルが口に出したことを気にしていないのか、はたまた聞いていないのか気にせずこの機械について説明しだした。

「これはウィルスを特殊な電波で一ヶ所に集めて一気にデリートするマシンです」

「ウイルスを」

「デリート？」

スバルとロックは疑問の声をあげた。

「でも宇田海さんどうやってウイルスをデリートするんですか？」

「それを今からご説明いたします！」

宇田海は声高らかに言うど懐から何かのリモコンをとり出して何もない白い壁に向かってスイッチを押した。

すると天井からスクリーンがゆっくり降りてくると同時に、下の地面が真つ二つに別れるように開くとその下からスクリーンに映し出す映写機が表れた。

そして窓側のカーテンが人工太陽（宇田海が開発したもの）の光を遮るように自動的に敷かれていき、部屋の灯りが少しづつ薄暗くなつていった。

これを見た二人はまるで映画館にいるみたいだなと思った。

「これで準備は整いました。今からスクリーンに映し出される映像を見ていただければこの機械がどのようにウイルスを退治するのかわかりやすいと思いますので。それではいきます！」

そう言って映写機のボタンを押した。

3

2

1

映写機の中に宇田海と先程の同じ機械が映し出された。

宇田海がその機械に付いている操縦棒に似た棒を前に倒した。

するとアンテナから10メートル先まで微弱な青い電流が流れたかと思うと、どこからかウイルス1匹、2匹、3匹と約50体のウイルスが集まってきた。

「今だ！」

映写機の宇田海がそういうと操縦棒のとなりにあるボタンを押すと先程アンテナから流れた青い電流が黄色に変わり物凄い勢いで発射

されウイルスをたちまちデリートしてしまった。

最後に映写機の中にいる宇田海がこちらに振り向いてピースサインを送って画面が消えた。

そうして証明の明かりがついて閉まっていたカーテンが開いて先程の明るい部屋に戻った。

そして宇田海は早速2人に感想を聞いてみることにした。

「どうですか？ ウイルスを集めてデリートしちゃう名付けてウイルスホイホイ！」

ネーミングセンスのなま

2人はその名前に啞然とすると同時に過去に何度も宇田海が失敗作（欠陥品ともいう）を作りウイルスを呼び出すという事態を思い出すのであった。

スバルは不安になりつい宇田海に聞いてしまった。

「宇田海さん今度は大丈夫なんですよね？」

「ええ大丈夫ですよ！ ヨイリー博士にも見て貰って大丈夫だと太鼓判を貰いましたから！」

宇田海は高らかに宣言するかのように右腕を胸に当てていった。

「そうですか。ヨイリー博士が言ったなら間違いないですね。これはいつ発表するんですか？」

スバルはヨイリー博士が大丈夫だと言ったことに安心し、宇田海にいつ発表するのかを訪ねると宇田海は困った笑みを浮かべた。

「実はこれには問題点がありまして」

「問題点？」

「はい。実は」

宇田海の話によると日常色んなところにいるウイルスの内の中級レベルのウイルスまでしか消去出来ないと^{デリート}いう。特に家の中に潜むウイルスが殆どが小、中級レベルのウイルスしかないのだが稀にいる上級ウイルスが表れた場合デリートが出来ないということだった。

「ですから、これからヨイリー博士にも協力してもらって上級ウイ

ルスも消去^{デリート}出来るように改良して完成したら発表しようと考えています」

「頑張つて完成させてくださいね！」

「ありがとうございます。よし完成に向けて頑張るぞー！」

宇田海はスバルからのエールに闘志を燃やすのであった。

「それじゃあ、用もすんだし帰ろうか？」

「ああ、そうだな」

「それじゃあ僕らはここで失礼します」

「わざわざ見に来てくれてありがとうございます」

スバルは宇田海に軽く頭を下げるとエレベーターに乗っていった。
そのまま自宅へと帰っていった。

一方スバル宅では一人の女の子が自分のウィザードに向けて愚痴を
零していた。

「もう～スバル君たら私を置いてなんで一人でWAXAに行ったの
よ？」

いくら私が寝てたからって起こさないでいつちやう？ 普通？」

「ミソラ落ち着いて！ スバル君は優しいからあなたが寝てるのを
見てそつとしてあげようと思って出掛けたんじゃないかしら？」

「だからって普通彼女に黙って出掛けないでしょう？」

（いや彼女は関係ないような気がするんだけど）

今怒っている女の子は言わずともわかる響ミソラにそのミソラをな
だめているのがウィザードのハーブであった。

「私だってWAXAにいきたかったのに」

そういつて頬を膨らませること数秒間急になっこりと笑ってまるで悪戯を思いついたような笑みでハープにいつのだった。

「いいわ。 帰ってきたら絶対今日デートに行ってもらっもん！
そんなもって夕飯も奢って貰っちゃおうと」

「あ、あら〜それはいい考えね〜。(スバル君可愛そうに)」

ハープは目をキラキラと輝かせるミソラを見ながら心の底からスバルに同情するのだった。

宇田海の発明品パート1（後書き）

初級ウイルス、中級ウイルス、上級ウイルス（あくまでも僕の中の基準ですが）はまた折を見て説明していこうと思います。次回の投稿はその説明にしようと思っています。それでは失礼します。

ウィルスのレベルについて

この前も申しました通り此方にはスバル達の世界ではウィルスのレベルはどれくらいなのか（あくまでも僕の中の基準ですが）を説明したいと思います。

それとこういうのには興味がない方、またはどうでもいいという方には本編の更新では無いことをお詫び申し上げます。

また逆に見てくださる方には感謝いたします。

それではまずウィルスの初級レベルから説明していきます。

*注（ ）の中の数字はウィルスのレベルです。

ウィルス初級レベル（1～3）

メットール（1）、メットリオ2（2）、メットリオ3（3）、ク
ロツカー（1）、クロケット（2）、マイリー（1）、ストーンゴ
1）、ストーンガ（2）、デスクアウント（1）、ドツカーン（1）、
ドツゴーン（2）、フレイマー（1）、プルミン（1）、ステルス
（2）、イナドラン（1）、スパイダラ（1）、スパイダラーナ（
3）、ホイルズ（1）、バルカナ（1）、キャノベース（1）、キ
ヤノベースG（3）、メラマンダ（1）、メラリザード（3）、モ
エローダー（1）、ビリーエース（1）、ビリーキング（3）、モ
ノソード（1）、ベルゴング（1）、モアイアン（1）、サワニガ
ー（1）、カワニガー（2）、ネバーラ（1）、ヌッキー（1）、
アイズ（1）、ガードアイ（3）、アイズG（3）、ラビジェット
（1）、ラビロケット（3）、ダバダンス（1）、ダバダンスG（
3）、ホタロー（1）、フラッター（1）、フラッタリオン（3）、
オロロン（1）、オルルン（3）、パサラン（1）、フワラン（2）
、ポワラン（3）以上がウィルスの初級レベルです。

次は中級ウィルスです。（4～7）

メットリオG(4)、メットリオ2G(5)、メットリオ3G(6)、クロツカーG(5)、クロケットG(6)、デスカウントG(4)、デスポマー(5)、ネオフレイマー(7)、プルミンG(5)、サワニガーG(4)、カワニガーG(7)、ステルスG(4)、バルカナG(4)、バルガンナー(5)、バルガンナーG(6)、バルスナイパー(7)、ビリーエースG(4)、ビリーキングG(6)、モノソードG(4)、ガードアイG(4)、ラビジェットG(4)、ラビロケットG(6)以上が中級ウイルスです。

最後は上級ウイルスです。(8)~(9)

クロバース(8)、クロバースG(9)、デスプロージョン(8)、ズッガン(8)、ズッガンG(9)、ネオフレイマーG(9)、プルポン(8)、プルポンG(9)以上が上級ウイルスです。

それと他にもウイルスがいますが今回ののはあくまで一般家庭に潜んでいるウイルスの説明ですので。それともう一つ補足しますとウイルスのレベルは一応20まであることになっていますが、10以上のウイルスはすべて裏のウイルスやノイズのウイルスという設定ですのでどういうウイルスかという説明はまた別の機会にさせていただきます。ただこうと思っています。

それでは次回は話を戻しましてスバルとミソラのデートシーンになります。

それでは失礼します。

ウイルスのレベルについて（後書き）

お知らせです。

お気付きの方が多いと思いますがこの度小説のタイトルを変えました。

今後とも宜しく願います。

デート？ それとも荷物持ち？

スバル宅

「ただいま」

「お帰りー！」

「え？ う、うわぁ！？」

「お帰りスバル君」

「た、ただいま、ミソラちゃん、それと恥ずかしいから離れて！／／」

今の状況を説明するとスバルが家のなかに入った途端、玄関先でミソラに抱きつかれて頬擦りをされていた。スバルはいきなり抱きつかれたと思ったら頬擦りをされて一瞬にして顔を真っ赤にしながらミソラに止めるように頼んでいた。

「スバル君が私のお願いを聞いてくれたら止めてあげる」

「お願い？」

「そ　お・ね・が・い」

スバルは一瞬迷った。

だがミソラのお願いを聞かなければいまもやられている頬擦りは止めてくれないだろうし、だがこれ以上やられたら体温があがりすぎて意識がぶっ飛んでしまいそんな感覚に襲われるかもしれないと思うとスバルの決断は速かった。

「わ、わかったお願いを聞くから離れて！／＼／＼」

「うん！　わかった！」

そう言うってからミソラは頬擦りを止めてスバルから離れると「今からデートしよう！」と言った。

スバルは驚いたが先程の半分くらい顔を赤らめながら二つ返事です承した。

ミソラはその返事を聞くとスバルに「ちょっと待ってて」といいあかねの部屋にいき30分後に部屋から出てきた。

スバルはミソラの格好に思わず息を呑んだ。

上は水色の真ん中には青い の記号が入っている半袖に下は紺色のデニムのショートパンツを履いて髪は後ろに結んでそしてサンングラスを掛けたミソラがいたのだ。

ミソラはモジモジとしながらスバルにどうかな？ と聞いた。

スバルはミソラの言葉で我に振り返りすつごく可愛いよと言つとミソラはありがとうと頬を染めながらお礼をいった。

そして二人はヤシブタウンにあるヤシブデパートに行くことに決めた。

二人は手を繋いでウエーブライナに乗ってヤシブタウンへと向かった。

余談だがスバルは毎晩ミソラと手を繋いで寝てるせいか慣れてきたという。

ヤシブタウン

二人はいまヤシブデパートの前にいた。

補足するとヤシブタウンにあった103デパートの規模を大きくしようとして屋上をいれて4階までであったのを9階にまで改装した。

そのときに103デパートをヤシブデパートに改名したという。

一階は食品売り場に案内所に迷子受付カウンターにお土産屋さんとあり、二階には玩具売り場があり、三階には服屋さんがあり、四階にはゲームショップがあり、五階には家電製品やウイルスを消去するための強化型ワクチンが売ってある。

六階にはCDショップや本屋さんがあり、七階にはレストランが6件もある。

そして八階には一回(100〜300G)で遊べるゲームセンターがあり、九階は屋外となっておりベンチや自販機や屋台等皆の憩いの場となっている。

おまにホッテックやフライドポテト

そして今、スバルとミソラはもと103デパートだったヤシブデパートの出入口の前まで来ていた。

「スバル君行くよ！ いざ出陣！」

そう言うとミソラはスバルの手を引つ張って三階のいろんな服が売っているところまで意気揚々といった。スバルはミソラに引つ張られながら心の中でため息を吐き荷物持ちを覚悟するのであった。

三階服屋

スバル達が中に入ってから一時間近くたっていた。

ミソラがドラマやバラエティーなどで使う服と私服用に着る服などをゆっくりと選んで30分たった時、突然アナウンスが流れ「今からバーゲンセールを始めます」という放送を聞いたミソラはそれまでに買うと決めていた服を急いでレジに持っていき、精算だけするとスバルに買った服（荷物）を店員が袋に入れた後、受け取るように頼むと速攻でバーゲンセールへと向かった。

スバルは店員から袋を受け取り（その数二袋）ミソラの元に行くとミソラがかなりの数の服を持っていたのを見て仰天した。

ミソラはスバルの姿を確認すると大量に持っていた服をスバルに預けて（ついでに掛けていたサングラスも）前方で若い女性から主婦

だと思われのおばちゃん達による服の争奪戦が行われているであろう人込みの中に入っていた。

スバルはため息を吐きながらベンチに座りミソラが戻ってくるのを待っていた。待つこと30分ミソラは選んだ服（といっても争奪戦でとれた服だが）を持ってスバルが待っているであろうベンチに向かっていた。スバルのところに行く待ちくたびれたのかベンチに寄り添うようにしてうたた寝をしていたスバルを見付けるとクスツと笑ってスバルを起こしにかかった。

「スバル君お待たせ！　こんなところで寝たら風邪引くよ？」

「うーん。　あれミソラちゃん？　もういいの？」

スバルは起きると同時に両腕を伸ばしながらミソラの姿を確認して買い物はもういいのかを聞いた。

ミソラがもう十分買い物したと言うことだったのでスバルがベンチから立ち上がると二人はレジまでいきミソラが会計を済ませるとスバルは持つ袋が二袋から五袋に増えミソラは一袋を持って家に帰ろうと店を出ると周りが騒がしくなった。

「あれ？　あそこにいるのはミソラちゃんじゃないか？」

「あゝほんとだー！」

「隣にいるのは彼氏のスバル君じゃない？」

「ほんとだー！」

そういつて周りにいた人達が集まってきた。

二人は人が続々と集まる中何故ばれたんだろうと焦りながらも考えていた。

「あれ？　なんでばれたんだろう？」

「あ！？　サングラス」

「え？　あ！　本当だ！」

2人は気が付いた。

それはそうだろう、だってミソラはあの合戦場（服の取り合い）にて得た服に満足感で忘れてしまい、スバルに関しては居眠りしたときにすっかりミソラのサングラスを預かっていたのを忘れていたのだから。

そのあと二人は逃げようにも周りはファン達に囲まれていたため持っていた荷物を下ろして、それぞれ握手やヤシブデパートで急いで買ってきたと思われる色紙にサインをしていった。

そのあと2人は何とかファンの人達の相手をして帰宅したのは夕方

の6時だった。(余談だがミソラが疲れたと聞いたため袋はすべてスバルが持ったという)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0728h/>

流星のロックマンメテオGを止めてからのその後の日々

2011年2月22日15時49分発行